DOCUMENT RESUME

ED 425 216 UD 032 627

TITLE	Women in Development: Towards Global Networking. Extract from the Proceedings of the International Forum on Intercultual Exchange (Saitama, Japan), October 29-30, 1991).
INSTITUTION	National Women's Education Centre, Saitama (Japan).
PUB DATE	1991-10-00
NOTE	283p.; For various conference proceedings sponsored by NWEC, see UD 032 627-633.
PUB TYPE	Collected Works - Proceedings (021) -- Multilingual/Bilingual Materials (171)
LANGUAGE	Japanese, English
EDRS PRICE	MF01/PC12 Plus Postage.
DESCRIPTORS	Conferences; *Cultural Awareness; Developing Nations; Economic Development; *Females; Foreign Countries; *Information Dissemination; Japanese; *Networks; Quality of Life; *Sex Role; *Social Change; Unions; Womens Studies
IDENTIFIERS	Global Awareness; Japan; *Women in Development

ABSTRACT

The Japanese National Women's Education Centre (NWEC) held its International Forum on Intercultural Exchange to undertake a broad exchange of information on socioeconomic development, focusing on the present condition of women and their roles, and to conduct detailed discussions of international cooperation with regard to women's solidarity on a global level. The English version of the abstracts of papers from this forum was prepared from transcriptions of the taped recordings of the speeches and their simultaneously rendered translations. The opening address by Yoriko Meguro, chairperson of the forum, comments on the concept of "Women in Development" and presents some background for the discussion of women's issues. Kate Young reviews the historic approach to women's roles in social change and the effects of social change on women in "Theoretical Approaches to Understanding the Relative Positions of Women and Men in Societies Undergoing Rapid Social Change." Alexandra Stephens, in "Rural Women: Partners in Development," discusses development as it relates to the rural woman, who suffers serious consequences from cuts in government services. "Japan's Approach to 'Women in Development' from the Viewpoint of Cultural Anthropology," by Kyoko Kikuchi, offers a perspective on development that takes into account Japanese cultural traditions. Ela Ramesh Bhatt, in "SEWA Experience," describes the operations of the Self Employed Women's Association (SEWA), a labor union formed for self-employed women in India. In "Women in the Bureaucracy: The Philippine Case," Patricia A. Sto. Tomas describes the roles of Philippine women in government positions working for development and women's issues. Mieko Magami, in "The Path to Independence," comments on work to improve the lives of female members of an agricultural cooperative in Bangladesh. Appended to the conference papers is a brochure given conference participants to provide the conference agenda, background information on the speakers, and some comments from the speakers on women's development and other issues related to women's well-being. (SLD)

ED 425 216

平成3年度国際交流フォーラム
International Forum on Intercultural Exchange

会議録抜粋
Extract from its proceedings

「開発と女性」－国際的ネットワークを考える

'Women in Development: towards global networking'

平成３年１０月２９日（火）～３０日（水）

OCTOBER 29-30, 1991

国立婦人教育会館

NATIONAL WOMEN'S EDUCATION CENTRE

JAPAN

BEST COPY AVAILABLE

UD032627

U.S. DEPARTMENT OF EDUCATION
Office of Educational Research and Improvement
EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)
☒ This document has been reproduced as received from the person or organization originating it.
☐ Minor changes have been made to improve reproduction quality.
• Points of view or opinions stated in this document do not necessarily represent official OERI position or policy.

PERMISSION TO REPRODUCE AND DISSEMINATE THIS MATERIAL HAS BEEN GRANTED BY
Ikuyoshi Horiuchi
NWEC
TO THE EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)

BEST COPY AVAILABLE

まえがき

国立婦人教育会館は、平成３年１０月２９日から３０日にかけて、「『開発と女性』－国際的ネットワークを考える」というテーマで、国際交流フォーラムを開催しました。これは、社会・経済の開発における女性の現状と役割及び女性の視点を入れた開発について国際的な広がりを持つ意見交換を図るとともに、地球レベルの女性の連帯を意識した国際協力等のあり方について討議を深めようというものでした。

本冊子は、同フォーラムでの議長あいさつ並びにセッションＩ及びＩＩにおける内外の専門家６名による発表報告の記録です。これは、当日の発表オリジナルテープ及びその同時通訳部分を聞き起こして作成したものです。したがって日本語及び英語が、必ずしも翻訳文のようには正確に対応していないことをご了解下さい。

平成４年３月

もくじ

＜議長あいさつ＞　上智大学教授　目黒依子・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

＜セッション　I：「開発と女性」へのアプローチ＞・・・・・・・・・・・・・・　7

1　「急激に変貌する社会における
　　男女のありかたに対する理論的アプローチ」・・・・・・・・・・・・　9
　　ウーマンカインド代表　　ケイト・ヤング
2　「農村の女性：開発におけるパートナー」・・・・・・・・・・・・・・・・　19
　　国連食糧農業機関（FAO)アジア太平洋
　　地域事務所開発と女性担当官
　　アレクサンドラ・スティーブンズ
3　「日本における『開発と女性』論への取組み
　　－文化人類学的視点から－」・・・・・・・・・・・・　29
　　津田塾大学助教授　　菊地京子

＜セッション　II：「開発と女性」に係わる活動現場から＞・・・・・・・・・　39

4　「ＳＥＷＡの経験」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　41
　　自営女性協会(SEWA)会長
　　イーラ・ラメシュ・バット
5　「フィリピン官僚制度における女性の現状及び課題」・・・・・・・・・　53
　　フィリピン公務員委員会(CSC) 会長
　　パトリシア・Ａ・サント・トーマス
6　「自立への道」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　64
　　バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰
　　馬上美恵子

議長あいさつ

BEST COPY AVAILABLE

議長あいさつ

上智大学教授　目黒依子

ご紹介にあずかりました目黒でございます。最初に、“ＷＩＤ：Women in Development ”、「開発における女性」という概念が日本でまだあまりなじみがないと思いますので、議長あいさつという名の下におおまかな話をここで少しさせていただきます。

国際交流とか国際協力について私たち市民が関心を持つようになったのは、物と金の流通から人の交流への関心が強まり、いわゆる国際化論というものが盛んになって来た頃からだと思います。特に、昨年夏以降の湾岸危機は国際社会における日本の貢献ということを茶の間の話題にまでさせた、そして日本の海外援助や海外協力のあり方について考えさせる大変重要な契機になったというふうに言えるかと思います。

一般に政府開発援助いわゆるＯＤＡと言われるものについては女性問題と直接結びつけて考えるということをあまりして来なかったと言えますが、外国の女性のＮＧＯの方々と接する度に、日本のＯＤＡのあり方について批判的なコメントを聞くとか、実際に途上国の女性の状況に直接接してその問題を確認するという経験を重ねてきた日本の女性たち、こういう女性たちからの批判があり、こういう背景があってこそ、この国際化の議論あるいは昨年以降の湾岸危機というきっかけの中で、開発と女性についての関心がいわば一挙に高まったと言ってもいいんじゃないかと思います。

開発における女性の役割に注目した“Women in Development”，略してＷＩＤと言っておりますが、このＷＩＤという概念は国際援助の世界では既に２０年ほど前から注目され、その重要性の認識に基づいたさまざま行動が展開されてきたわけです。その背景には、国連の婦人の地位委員会と経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）の開発協力委員会（ＤＡＣ）における動きがあったわけです。

国連では途上国メンバーの増加に伴って、国の開発と女性との関係に関心が高まり、女性の地位向上のためには貧困からの脱却が不可欠であるという認識が共有されるようになってきたわけです。１９７６年に始まった「国連婦人の１０年」の中間年の大会が開かれました１９８０年というのは、国連の第３次「開発の１０年」のスタートした年でもあり、女性に対する注目が浮上したわけです。「国連婦人の１０年」の最終年１９８５年にナイロビでまとめられました「２０００年に向けての将来戦略」では、開発援助が進んでいる地域で、女性の状況がむしろ良くなっていないという事実が指摘され、開発が経済のみならず政治や社会、文化、その他のあらゆる側面を含む必要があるという立場から、従来の開発に対する反省が求められることになったわけです。

またＤＡＣの方では、１９７０年代に入ってからＷＩＤをめぐる検討が進められ、１９８４年にＷＩＤ専門家グループが結成されました。８５年のナイロビ将来戦略を受けて、

ＤＡＣの方でも、「ナイロビから２０００年へ、ＤＡＣメンバーの取るべき行動」を作成して、そしてメンバー国内のガイドライン作りとか、行政組織の整備を伴うＷＩＤ支援活動を進めてきたわけです。

日本に関しましては、ＤＡＣの主なメンバーであるにもかかわらず、ＷＩＤに関する国内ガイドラインも作らず、またその行政組織の整備もされず、最近に至ったわけです。最近ではＪＩＣＡによる、「開発と女性」援助研究会が報告書を出しまして、ＷＩＤに関する国の方針を示すガイドラインの第一歩が踏み出されたというふうに言えましょう。

現在、世界人口の７７％に当たる約４１億人は、開発途上国に住んでいて、その半数以上が女性です。女性を視野に入れない開発というものは考えられないわけです。開発における女性の役割に関して、世界的に関心が高まっているわけですけれども、８５年のナイロビ会議で、女性に関する意識の向上は世界中で見られたけれども女性が置かれている状況はあまり変化がない、あるいはむしろ悪化したという報告が数多く出されました。女性の状況とかニーズというのは、国の政治や経済、社会、文化などによって、また一つの社会の中でも、社会階層や居住地域、職業などによってさまざまです。ですから、一般化するということは大変難しいわけです。

開発援助が量的に盛んであるにもかかわらず、女性の状況が向上していないということは、女性の状況とか、女性の持っているニーズを的確に把握することができなかったこと、そして開発計画やプログラムに、女性が組み込まれていなかったという現実があったからだと思われます。従来の開発理論というのはパイを大きくすれば、あらゆる層にその配分が行き渡るというふうな考え方に基づいていたということなんですが、それが１９７０年代に見直された。しかし、この見直されたものも結局は男性中心であった、つまりはジェンダー・ブラインドであったというところが貧困というものを女性に集中させる、そして女性の男性に対する依存性を強めるような結果を生み出したんだというふうな見方が大変強いわけです。

従来、開発計画において女性は、周辺的（マージナル）な存在であって、男性と同様に開発の中心にいるという、そういう認識はなかったわけです。そういう開発の結果生み出されたさまざまな問題、例えば世界規模で見られるような環境問題とか、貧困、人口爆発、こういったものがその結果であるわけですが、そういうものが主として女性の負担になって来るという状況が見られるわけです。その意味で、女性というのは、特定の開発における領域あるいは分野ではなくて、環境とか貧困、人口などの問題をクロス・カットするようなキー概念ではなかろうかと思われます。

ＷＩＤというのはあらゆる領域の開発計画に女性が受益者としてだけでなく全面的に参画するという視点に立っていて、女性が自らの生についての決定を自ら行うことができるような自立の条件整備をすること、そして、そのための力を付ける、エンパワーメントのための協力援助を目標にしているということだろうと思われます。

国連婦人の１０年の間、日本のＮＧＯや行政が熱心に取り組んできたテーマは、平等、平和、開発の中の平等だけであったと言っても過言ではなかろうかと思います。ただ、昨年来、開発への関心は一挙に吹き出したという状況にありまして、最近の新国内行動計画内でもＷＩＤについての項目が新しく入ったわけです。それから地方自治体やＮＧＯの中にも集中的な取り組みをするところが見られ始めました。

8

なぜ今、私たち日本の女性が平等問題を国内で抱えたままで、開発と女性に取り組むのか。なぜ、「開発」が「女性」なのかということなんですが、それは平等と開発が同じ根を持っている、同根であるということの認識が多くの日本の女性によって、共有され始めたからだろうというふうに私は思います。

この１５年の間に女性たちが国際的に人と人とが共通の問題解決に向かって手をつなぐネットワーキングを経験してきたからだというふうにも思うわけです。しかし、現実には日本の女性たちの多くがまだＷＩＤについての関心を持っていないというのが現実です。

今日と明日の２日間で、パネルの専門家の皆さんと一緒に、参加者全員でより理解を深め、そして今後さらに、その世界的なネットワーク作りに努力をしていく、そういうことが今回のフォーラムの、そして私にとっての参加の意味であり、多くの皆さんにとっての参加の意味になると期待しております。

では、簡単ですが、これで私のあいさつとさせていただきます。

《セッションⅠ》

「開発と女性」へのアプローチ

BEST COPY AVAILABLE

1. 急激に変貌する社会における男女のあり方に対する理論的アプローチ

ウーマンカインド代表　ケイト・ヤング

ありがとうございます。目黒先生からもお話がありましたが、ＷＩＤ「女性と開発」に関する研究はもう２０年続いています。いろいろな文献も出版されています。また様々なアプローチもあります。３０分でお話するにはあまりにも膨大な資料やテーマですので、非常に限られ簡素化された話になると思います。

急激に変貌する社会での女性について、３つのアプローチがあります。まず最も知られているアプローチとして、既に目黒先生が言及されたＷＩＤがあります。このアプローチの出発点には、女性が開発過程で無視されてきたために、開発の恩恵を享受できなかったという前提があります。女性が開発に参加できなかったのは、女性の経済的役割についての認識不足のためでした。開発とは主として男性の分野であり、女性はあくまでも主婦としかみなされませんでした。家庭を守り、育児や家事に専念して、商業、農業、漁業や手工芸などの経済活動にはいっさい関わり無しとされていました。しかし実際には、ほとんどの発展途上国の女性は、農業や漁業を営み、手工芸品を作ったりしていました。従ってＷＩＤ活動家たちは、女性軽視を克服するためには十分な情報が必要であると主張しました。問題は男性の理解の欠如であり、女性に関する知識さえ習得すれば、女性の参画は自動的に達成できるという主張でした。実際、都市や農村での女性の経済的役割のみならず、家庭福祉への女性の貢献に関する重要性が多くの研究で明らかにされました。また、このような研究や調査は男女間の活動の差異も指摘し、経済において性的分業がいかに重要な要因となっているかを示しています。つまり男女間の仕事をはっきり分けているのです。この性的分業は国によって大きく異なります。ある国での男の仕事は、他の国では女がする仕事になる場合もあります。しかし調査で分ったことは、ほとんどの文化では生産をコントロールするのは圧倒的に男性であるということです。それは単に、主たる生産手段が男性の手中にあるからに過ぎません。例えば、農村地域の主要な生産手段といえば土地になります。また男性は女性労働者も含んだ人員配置においても支配する立場にありました。さらに生産の成果、恩恵を管理するのも男性で、特に経済現金化の発達とともに男性がキャッシュをコントロールしてきたと言えると思います。

時間、労働そして生産の成果についての優先順位も、男女間で違うことが明らかにされています。男性の方はキャッシュの報酬や還元のあるような生産を好み、生産性を向上させるような所得創出を追求し、得た収入は家族よりも自分たちに権利があると考えてきたと思います。換言すると、男性は稼いだ賃金あるいはキャッシュの大部分を、自分たちの個人的な用途に使ってきたと言えます。

男性の労働パターンも女性のとは異なります。男性の労働は、多岐にわたる責務からの制約を受けず、間断なく仕事が出来るパターンです。特に農業部門においての労働は季節的で、雨期などには長い余暇を楽しめます。

それに対して女性はどうでしょう。彼女たちの経済活動は、経済学者の言ういわゆるノン・ワーク（非労働）ですでに過密になっているスケジュールの中に更に組み込まれていくのです。ノン・ワークには水汲み、炊事、育児、高齢者と病人の世話、掃除など諸々の家事が含まれます。また忙しい家事のほかにも、必要に応じて田畑で夫の手伝いを強いられるのです。多忙の中農業という経済活動に携わりますが、男性に言わせると、それは庭仕事に過ぎませんでした。しかし実際には、彼女たちの経済活動は多種多様で、家畜の世話、市場での作物の取引、機織り、家庭用品と手工芸品の生産、その他の商いなど、女性の年間の労働パターンは男性とは大きく異なります。朝早くから夜遅くまで、一日の活動時間は男性に比べてはるかに長くなります。一年を通しての労働パターンも定常的にきつく、長い余暇などまったくありません。農業に比べ、家事には季節的要因などいっさい無いからです。キャッシュを得ても、それはそのまま家長に渡し、たとえ自分の裁量にまかされたとしても、大抵家族のために使ってしまいます。多額の現金を個人的目的に使用する主婦はごく稀です。

経済現金化の発展は、主に男性に恩恵をもたらしたことは明白です。つまり彼らには農耕の研修や、良い農作機械、品種改良された種、更には井戸を掘ったりポンプやトラクターを買うための信用供与が与えられたのです。女性が注目されるとすれば、それはいかに良妻賢母になるか、どうしたらより効率よく料理や栄養を満たせるかを問うときです。しかも栄養価の高い食物をどうやって入手するかについての援助ははまったくなしにです。更に女性は、家族計画のために避妊具の使用を要請されたのです。彼女たちには改善され

た農業機械や援助や信用供与など与えられませんでした。開発を実践する者にとって、女性の責任はあくまでも家事にあるということで、その家事がどのように過酷な負担であるかということは、いっさい無視されました。開発担当者にとって家族とは、あくまでも男性の稼ぎ手が家長であって、女性は家長を有能かつ快くサポートする役割に徹すべきだとされていました。育児と家族の福祉、つまり生活が女性の主たる責任であると考えられていたのです。無論、子供も非労働者とみなされていました。しかしこのような家族の理想像は、誤った概念に過ぎませんでした。

女性は家庭に従属するという女性観は、アフリカのサハラ以南地域で悲惨な結果を生んでいます。この地域のほとんどの部族は伝統的に、女性を独立した経済の担い手として扱ってきました。従って、女性は結婚しても自分たちの経済力で子供を育てなければなりませんでした。以南地域では複婚、つまり一夫多妻制が広く行きわたり、男性は自分の子供よりもむしろ一族全体の系統に責任を感じているのです。事実‘子供’の概念も、私たちの定義よりももっと広義な解釈になっています。つまり自分が生ませた子というより、一族の血を引くすべての若年層を総して‘子供’と定義付けています。

開発プロジェクトを手掛ける際には、開発目的が何であれ、報酬無しに女性の労働負担を増加したり、女性の経済的立場を弱めたりするものであってはならないとするのがＷＩＤ活動家の主張です。また、経済の担い手としての女性の地位を低下させたり、男性に資源（リソース）への多大のアクセスを許したりしてもならないと主張しています。このように、開発プロジェクトで女性が余計に働かされるパターンはごく一般的で、主に開発計画者の誤解から生じています。最初の誤解は、女性にはたくさんの余暇あるいは暇があるというものです。二番目の誤解とは、男性が家長であり、開発から得る資源の配分も最終的には男性の責任であるとの考えです。

主張や抗議をへてＷＩＤ活動家たちが分ったことは、女性のために資源を確保する最善の方法は、女性に焦点を当てたプロジェクトで資金を調達することでした。もちろんこのような資金は、開発に投入される総額のほんの僅かなパーセンテージに過ぎません。それでもこのような資金によって、女性はいろいろな所得創出活動を展開することが出来るようになったのです。どんなに少額でも、彼女たちに一番必要なのはキャッシュへのアクセ

スであるという考えが台頭してきました。

そういうわけで、女性に対して実際的な形で援助を提供することがＷＩＤのアプローチです。またＷＩＤのアプローチには、開発に携わっている人たちに女性の社会への経済的な貢献度を認めてもらうという考えも含まれます。ＷＩＤ活動家たちは統計学者や計画当局に対して、もっと積極的に女性に関するデータを収集すべきだと要求し、国勢調査や各家庭のサーベイなどで、女性の経済活動についてもっと調査すべきだとも主張しています。さらに家事それ自体が社会の福祉に寄与しているという観点から、経済学者も女性の家事をもっと考慮すべきだと要求しています。この最後の点、つまり家事と子孫を育てるために払われる女性の多大な労力に関しては、国連の重要な機関である国連開発計画（ＵＮＤＰ）においても強く打ち出されています。ＵＮＤＰの趣旨は、開発とは人間の可能性を最大限に引き出すためのものであって、あらゆる開発過程は、工場、道路、鉄道など経済の物理的な繁栄よりも、人間の能力を最大に拡大し向上させるような恩恵をもたらさなくてはならないとしています。

ＷＩＤの活動家たちはまた、女性が意志決定のあらゆるレベルに参加すべきだと主張しました。更に、女性の意見や懸念などが開発計画の中の中心を成すべきだとも主張したわけです。

ＷＩＤが考えられ、戦いが続けられる中で、第２の視点も考え出されました。それは「ジェンダーと開発」（Gender and Development [GAD]）という視点です。この前提となっているものは、女性は開発計画者によって無視されてきたのではなく、女性と女性のする労働は最初から開発の考えの中に入っているというものです。しかし女性の役割は常に男性に対して従属的なものであるために、女性だけに焦点をあてるのではなく、近代経済が女性の社会・経済・政治的地位を男性に対してどのように低めているかの比較分析をする必要があるとするものです。

ＧＡＤでは、女性と男性の関係は歴史的に見て協力と対立の関係にあったと見ます。その中で、男性は女性を協力者として見ているけれども、決して平等のものとは見ず、毎日のささいな、取るに足りない事柄は、女性が面倒を見るべきだと考えてきました。

「ジェンダーと開発」の主唱者は、近代経済によってもたらされた社会変化は、長い目で見て、ほとんどの女性にとって不利なものであると考えています。もちろん女性の一部には、近代化により便益を受ける人たちもいますが。そして、経済で区別するところの生産的・非生産的労働、また生産的労働に対して与えられる社会的評価に対し、家事労働あるいは生殖活動や子育てに対して与えられる社会的評価の低さは、男性の世界と女性の世界を区分したものと同じであると考えました。男性の世界、即ち外に出て生産し政治に携わる世界、そして女性の世界、即ち内にいて家族の面倒を見る世界という概念を、経済学は文化を尊重するという考えから受け入れ、これを普遍の法則としてきました。

開発がどのように男女に影響を与え、男女がどのように開発プロセスに対応しているかを見るためには、経済分野での活動だけではなく、生殖活動あるいは家族の中で何が起こっているかを見る必要もあります。そして、女性の経済への貢献だけを見ていたのでは女性の社会的な貢献を無視してしまうと考えたわけです。また、それは家族への貢献だけではなく、女性はほとんどの社会において、その地域共同体の基礎をなすものだと考えました。

この女性が抱えている二つの負担を無視したために、女性を何とか助けようとしている人からさえも、女性がさらに大きな負担を荷負わされることになってしまったのです。女性の経済的貢献だけに焦点をあて、それを強調しようとしたためです。

「ジェンダーと開発」の視点の１つは、性的分業を男あるいは女に対して割り当てられたものという、男女を区分する見方ではなく、男性と女性を関連づけるもの、相互に依存させるものとして見るということです。ただし、いくつかの点においてです。異なるものを生産することで男女は相互依存的な関係を持たされますし、協力せねばなりません。しかしこの協力する上での条件というものは、家族の中の男女関係の契約のみならず、社会における男女関係の契約に基づいているのです。そしてこの相互依存関係の契約とでも言うべきものは文化的に受容されているわけですが、各世代で交渉したり、いろいろな形で修正されてきているものです。

この視点に立つと、女性に関してもっとデータあるいは統計を取るということは重要にはなりません。それらをどのように概念化し解釈するか、どのように価値を与えていくかがむしろ重要になってきます。

だからこの「ジェンダーと開発」という考え方においては、男女の力関係が非常に重要になってくるわけです。この男女の力関係は、社会階層の関係と似たものですが、これに還元してしまうことはできません。プライベートな形でもパブリックな形でも見ていくことができます。プライベートなというのは家族の中、パブリックなというのは国の中、あるいは地域社会の中での男と女の関係ということです。この男と女の力関係がどういうものであるか、そしてどうして開発がむしろ女性に有害なものになっていったのかを見るためには、家族、地域社会、国といったあらゆるレベルでの男と女の力関係を見ていかなくてはならないわけです。そして最終的にはその国の構造にまでメスを入れていかないと、明らかにできないわけです。ジェンダーと開発というのは、そもそも開発の目的とは何ぞやと、開発の過程もそうですが、何のために開発するのかということに対して疑問を投げかけてきました。ですから、当然開発を支持する人たちの間では軽んじられてきた考え方であり、援助機関に幅広く採用されてきたＷＩＤに比べると、より学術的な調査研究として捉えられてきたわけです。

第３番目のアプローチは、「女性と開発」(Women and Development[WAD])です。and とinだけの違いですが。これは開発途上国ではよく知られたドーン・グループという人たちが採っているアプローチで、ＷＩＤ及びＧＡＤのいくつかの要素に疑問を差し挟んでいます。この考え方の特徴は各国間の不平等、北と南の諸国の不平等という現実を疑問視し、国と国の力関係の差がなくならなければ、女性の地位も良くならないとすることです。これについては時間の関係上ごく簡単に触れました。

１９６０年代終わりから１９７０年代の初めにかけてＷＩＤとＧＡＤのアプローチが考え出されてから、３つの視点の違いが段々少なくなり、お互いに近いものになってきています。３つの視点いずれもが、社会的なさまざまな男女の地位の差がなくなればいいと考えている点で共通しています。また、いずれも開発を疑問視しています。もちろん、開発の問題をより批判的に、そして深くとらえているのは、ＧＡＤとＷＩＤです。全ての人た

ちが持続し得る開発という魔法の公式を探し求めているのです。

いずれにしろＷＩＤでは、どうやったら開発がもたらす資源を女性が入手できるかが問題です。例えば融資・訓練・情報・お金等のさまざまな資源に、どうやったら女性の手が届くのかが問題です。またＧＡＤでは、社会階級間の不平等が重要な変数となっていない社会をつくり出そうとしています。社会階級が存在し続ける限り、性差別も存在すると考えるからです。そしてＷＡＤでは、世界的なレベルで貧しい国々へ資源を再配分することを考えています。

この３つのいずれのアプローチにおいても、現在どうやって女性をサポートし、どうしたら女性の声が国際的に、あるいは国のレベルで反映されるのかということが主要な議論となっています。同時に、よく知られているエンパワーメント（empowerment)という概念についても討議されています。

この分野で今一つ大きな問題となっているのが重要な言葉、男女同権の用語とでもいいましょうか、その用語の使い方です。幅広くこれらの用語が使われるようになっています。例えば、ジェンダーは性別という意味でよく使われますし、時には女性という意味でも使います。エンパワーメントという言葉もあちこちで使われますがその意味がはっきりしません。ここでごく大ざっぱに定義しますと、世界銀行や大部分の公の援助機関は、エンパワーメントを人々特に女性に、その一人一人が成長を遂げるための責任を与えることととらえています。しかし公の機関が使用する言葉は、昔の資本主義者や資本家の時代を思わせます。セルフ・ヘルプとか、自力で立ち上がるとか、個人が持っているさまざまな技術、技能を使って自分の立場を向上させるというふうに考えているわけです。このような考え方の中には、国あるいは社会に対して何かを要求するといった議論や、次世代を産み育てていくという女性の重要な役割を認識させるという議論はありません。

女性のグループや女権拡張論者はエンパワーメントとは集団的力でなくてはならないと考えます。特に、貧しく社会的にも低い立場の女性たちが自尊心を持ち、集団としての力を得るための助けを受けることを意味します。この集団的力というのはまず現状を把握することから始まります。そして、どのような選択肢があるのかを知り、どのように先に進

んでいくかについて合意します。しかしそれは最初から決定済みのものではなく、女性が集団的に力をつけていく過程で常に反省をし、考え方や戦略を変えていくものです。集団的に力を与えるということは、女性のうちのだれか一人が大きな力を得るのではいけないというわけではありません。例えば議員とか、政府の役人とか、あるいは裁判官、場合によっては司教とか、ひょっとしたら教皇とかになるという時には、できる限りの援助をしなければなりません。ただし、そういった一人一人の女性がより大きな女性の集団に対して責任を持っていくということが大切です。

またエンパワーメントとは、女性のさまざまな考え方や異なる意見が、ひとつの中心的なものとして前進し、将来を形作っていくということでもあります。国の将来、あるいは世界全体の将来の一部になっていくということです。２０世紀後半のこれからの時代は、個々の国というのはそれほど重要ではなくなってきて、むしろ地域レベルや国際レベルでのまとまりの方が重要になってくるからです。

女性に力を与えるということ(empowerment of women)は、もちろん言葉で言うのは簡単ですが、それを実現するのはとても難しいことです。というのは、女性はそれぞれ違っていて統一されていないからです。女性たちは、なぜ我々が社会的に従属した地位に置かれているかという統一した見解を持っていません。女性だけでなく、男性もそうですが、人種やカースト階級、宗教など、さまざまな事柄によって、分断されています。ただエンパワーメントで重要な戦略は、まずお互いの違いを認識し尊重していくということです。

現在、女性問題に対するアプローチに対して、１つのコンセンサスが出来ています。これは女性の現実的なニーズと戦略的なニーズを分けて考えるということです。現実的なニーズとは、毎日毎日の性的分業の中で出てくるさまざまなニーズです。あるいは女性が社会の中にいて、経済的あるいは社会的活動を担っていくのに伴うニーズです。例えば母親になること、あるいは妻になることです。特に妻になることについてはいろいろ考え、うまくやろうとします。また先程も言いましたように、女性は地域社会でも活動していますし、家族を養うための経済活動もしています。多くの途上国において、女性は何を欲しているかと聞きますと、「これが欲しい」とはっきり言います。女性は自分たちのニーズをちゃんと知っているのです。「水が欲しい」「もっと良い道具が欲しい」「トレーニング

を受けたい」「どうやったらポンプを維持できるか」「どうやったらお金が借りられるか」「土地が欲しい」『もう少し知識が欲しい」「情報が欲しい」、このように女性ははっきり答えます。これが女性の現実的なニーズなわけです。

それでは次に戦略的なニーズとは何かということになりますと、もう少し別の視点が必要になってくるわけです。女性自身をよく知らなくてはなりません。自分たちがいかに無力であり、男性の暴力をどんなに恐れているか、自分たちの意見を聞いてもらえないことにどんなにフラストレーションを抱えているか、また新たにもう一人子供を育てなければならない苦労とはどんなものかについて女性は話します。しかし、自分の身体を自分でコントロールできず、しかも自分たちの意見をおし殺してしまうのです。こうしたことが女性の戦略的ニーズの根底だと言われています。しかしこのようなニーズは、すぐには頭には浮かんできません。これらの戦略的ニーズを勝ち得ようとする時、なかなか女性が一つのまとまりとして動きにくいという問題があります。というのは女性が共通項によって結ばれているのと同様に、違いによって分断されているからです。

次にエンパワーメントのためにどうやって闘っていったらいいか、どういう戦略を組んでいったらいいかということに触れます。まず、とにかく私たちは一人一人違うんだということを認識するという大仕事があります。文化や宗教や人種、あるいは年齢の違いによって女性一人一人が持っている視点も物事の優先順位も違っていることを受け止める必要があります。しかしこのような違いがありながらも、これを尊重して、いっしょに作業できる共通基盤を見つけていく必要があるわけです。そして私たちが手にしたビジョンを通して、女性間のパートナーシップを作っていく必要があります。男女間のパートナーシップが重要であると同様に、女性同士のパートナーシップも重要なわけです。

教育を受けている私たちにとりましては、これが特に大きな課題です。なぜならば、学歴があるということは男性が享受しているものと同じものを女性も共有しているからです。力があるということは、同時に責任があると考えるのは大変難しいことです。権利を考えてしまいがちです。しかしまず私たちが自らを変革し、私たちが自分たちの持っている姿勢、価値観に疑問を差し挟んでいく必要があります。そして貧しく無力の中で生きている女性たちを、ただ傍観するという姿勢を取り除いていかねばなりません。

このＷＩＤとＧＡＤとＷＡＤという３つの流れの中にも、視点の違いがあることを認識する必要があります。世界経済にしても社会にしても、強調する点が違っています。しかし本当に女性のことを考えるならば、このような国際ネットワーキングに参加する重要性を認識し、連帯や合意といった偽りのコンセンサスを得るためではなくて、私たちは違うのだということを認識し、そこからまた共通点を見つけていくことが重要だと思います。

ありがとうございました。

20

2．農村の女性：開発におけるパートナー

国連食糧農業機関（ＦＡＯ）アジア太平洋地域事務所
開発と女性（ＷＩＤ）担当官
アレクサンドラ・スティーブンズ

ありがとうございました。まずＮＷＥＣの皆様方に、今日こうして皆様方の前でお話しをする機会を得ましたことに対しての感謝の意を表したいと思います。非常にすばらしい暖かいおもてなしをありがとうございます。

「農村と女性」というテーマですけれども、これはいわゆるアカデミックな論拠というよりも私の経験に基づいています。私は大学を出て以来、実際に開発途上国で２４年間過ごしてきました。南太平洋、アフリカ、アジア、さまざまな国です。ですから、私がお話しすることは私の経験から得た実感とお取りくださって結構です。

ワシントンＤ．Ｃ．にあります人口危機管理委員会という委員会が、女性についての世界統計を出しています。そしてその統計を分析すると、女性は貧しく、力がなく、そして妊娠するものだという定義に到達します。

私は今バンコクにおります。アジアと太平洋地域を見ますと、やはりいろいろな意味で食糧生産への成功例が見受けられます。しかし同時に、貧困の増加も顕著です。アジア諸国は、米や小麦を自給自足という形で十分備えていますが、４億人の栄養不良、それから７億人の貧困生活を強いられている人たちも、やはりこの地域に住んでいます。

世界の女性の比率を見ますと、皆様に向かって左のところですが、国連婦人の１０年の際たくさんの統計が明らかにされ、分かったことは女性は世界の人口の半分を占めているということです。しかし驚くことに、世界の労働時間の４分の３も女性が占めているのが事実です。子供を育て、水を汲み、掃除をして、病人と高齢者の世話をするのもすべて女性です。しかし、経済学者はこのような女性の労働の価値を認めていません。また開発に

おいての女性の役割を分析しても、こういった女性の労働が少しも統計に反映されません。所得や収入の分野では、女性はいわゆる‘フォーマルセクター’から、世界の所得の１０％しか得ていません。また不動産でも、女性は僅かに１％位しか所有していません。

世銀とＩＭＦは最近のバンコクでの世界会議において、開発途上国は構造調整を必要としていると主張しました。現在途上国が累積赤字に病んでいるため、特に構造的な改革が不可欠であるという意見です。しかし多くの諸国、例えばフィリピンもそうですが、そういった国では国家予算の４割は、累積債務に割り当てられています。世銀や私と皆様が代表するような先進国から構造調整を要請されると、途上国政府はまず支出を下げることから始めます。そしてこの支出をどう削減するかというと、女性に一番関連のあるところから始めるのです。例えば社会保障、教育、公衆衛生といった部門です。その結果、女性に対して非常に深刻なインパクトが生じます。

まず、環境破壊が悪化します。それから、農村部の限られた土地で女性が食糧を生産して家族の食物を確保することがむずかしくなります。特にアジアでは、大変な人口増加とともに、土地の問題が危機的状態になっています。こういった状態は、すでに最貧国となっている国々でさらに悪化するでしょう。アジア太平洋やアフリカの最貧国では、出生率が最も高い傾向を示しています。最近私はイランに行きましたけど、イランの人口の年間増加率は年間で４％以上です。そしてパキスタンの人口増加率は年３．８％ということです。このように、１年の人口増加率が３％以上の貧困国はたくさんあります。

次に、こちらの方の図を御覧になれば、途上国と日本のような先進国との出生率の差がよくわかると思います。インド、スリランカ、バングラデシュ、フィリピン、タイなどの発展途上国では出生率が非常に高くなっています。その高出生率を示すのが下の赤い色の部分で、１５歳未満の年齢層を意味します。それから青色のところは、１５歳以上２４歳未満の年齢層です。日本やスウェーデンなどの先進国では、あまり子供は生まれていません。つまり出生率が非常に低いわけです。今でも毎年出生率は低下しています。私の国ニュージーランドでは、人口増加率は逆にマイナスに転じています。先程の青い箇所、１５歳から２４歳の青年層でも、やはり先進国と途上国の差が一目瞭然です。途上国の若者は、大学を卒業して社会に出ても仕事がまったく無いという状況です。多くの先進国で

は、失業率が下がって来た結果人手不足の所も多いのに、途上国では失業が蔓延しています。

御覧になれますでしょうか。あまりよく見えないかもしれませんが、この図は昨日いただいたＮＷＥＣの奇麗な封筒を使って作った農業人口の分布図です。先進国の農業従事者は、１９５０年には約３億１５００万人いました。この数は、２０２５年までには２９００万人に低下すると予測されています。しかし、農業の生産性は高水準で維持されます。その理由は、日本のように機械による自動化が進み、新しいバイオテクノロジー技術を使った集約農業での生産性向上があるからです。つまり、少ない従事者で多くの農業生産が可能になります。これは途上国にとってよいモデルになると思われるかもしれません。しかし様々な理由から、そうはなりません。実は、途上国ではまったく逆の様相を呈することになります。

１９５０年を見ますと、発展途上国の農業人口は１３億１２００万人でした。しかし２０２５年になると、この数は約２倍に跳上がり、２４億６０００万人になると考えられています。またこのアジア地域には、新しい農地など残っていません。ですから農業人口が２倍になっても、農地は現状のままで非常に限られてしまうのです。その上アジアでは土壌の劣化や侵食が、既に問題になっています。適切な農耕方法で土壌の肥沃さを保持する努力の欠如が目立ちます。

この限られた土地で家族のために食糧を生産する女性たちにとっては、大幅な援助無くして生産性向上はありえません。しかし、彼女たちにそういう援助の手はさしのべられていません。アジアの農家の４０％は女性で占められていますし、この比率は毎年上昇しています。特に若い男性にとって農業は魅力に欠け、タイなどでは最低の所得部門になっています。農作業はきつく、つまらない上に報酬が少ないということで、男性は農業を女性に任せて工業やサービス部門へと移行してしまいます。韓国などでは、既にこういう現象が顕著になっています。

農業の普及業務に携わる女性が非常に少ないため、女性は情報やサービス等農業を改善するために必要なものを受け取ることができません。多くの国において、女性は男性の農

業普及員に近づくことが許されていないので、必要な情報を得られません。アジアの農業普及員の中で女性の占める割合は０．７％にしか過ぎません。ですから農業に従事している女性は自分たちの仕事の仕方もなかなか改善できない、農業大学にもなかなか行けないといった大きな問題があります。多くの国において、なかなか女性の割り当てがありません。

パプアニューギニアでは、女性が農業従事者全体の９０％を占めるのですが、実際農業大学に入学が許される女性の割り当ては、全体の１０％です。またタイでは、昨年獣医大学において、上から１０位までの成績を修めた人が全て女性でしたが、政府がこれはまずいと判断して、獣医学部に入学できる女性は、全生徒の５％までと決めました。

もう１つ大きな問題があります。いろいろな政策が立案されて、世界の農業を改善しようとする試みがあります。しかし女性がそのような政策を議論する場に、全く参加していないということです。女性が農業に従事しているにもかかわらず、女性は農業従事者と認められていません。農業従事者とその妻という形でしか見られません。しかし実際は、農業従事者とその夫なのです。つまり、政策立案の場において、女性の問題はまだ明確にとらえられていません。

第３番目のチャートを御覧になればおわかりになると思いますが、世界の議会において、女性の議員はわずか９．７％です。１０％以下なのです。更にその下の黄色の部分を見ていただきますと、アジア太平洋地域において、大臣職の中で女性の占める割合は１．６％に過ぎず、世界で最も低い数字です。アフリカやラテン・アメリカ、ヨーロッパ、ソ連及び社会主義国家においてはもっと多くの女性がいます。アジアにおいては、女性が政策立案や意志決定過程の中に入るプロセスが遅々として、それは民間部門でも同じです。企業の中でも、女性は管理職に登場しません。ですから女性にかかわる問題は、トップレベルでは議論されないのです。

にもかかわらず、農業分野に女性はますます進出しています。日本でも同じだと思います。１０年前に比べて、農業に従事する女性は多くなっていると思います。男性が次々と農業を離れ、女性の手に委ねられているからです。

この政策立案の大きな問題の１つが姿勢です。これはヤング先生が既におっしゃいましたでしょうか。御存知のように立法や法律そのものでは、女性の状況を変えることはできません。特にアジアでは、男性の考え方が新しい政策についていかないからです。男性は女性が意志決定のプロセスに活発に参加することを非常にいやがります。

アジアの農村地域において、女性の１日は非常に長いです。今まで１０年間モニタリングをした結果、労働時間が年を追うごとに長くなっていることがわかりました。左側の図を御覧いただきたいんですが、赤が平均男性の労働時間です。これは東南アジアの国のいくつかを取ったもので、全地域を代表するものではありません。１週間に男性は４９時間働きますが、農村地域における女性は１週間に６１時間も働いています。これは子育てに関わる時間全てが含まれているわけではありません。子育てというのは２４時間労働ですから。ＩＬＯ（国際労働機関）の仕事の定義に基づけば、女性の方がずっと１週間に働いているということになります。韓国では農村地域の女性たちが、自分たちの負担があまりにも大き過ぎて、もうどうしようもない状態になっていると不満の声をあげるようになってきています。全く余暇時間がないという状態です。

次を御覧いただきたいんですが、ここではまた別の状況下の女性の数字が出ています。ここでは、女性は家庭を去って、フルタイムで働こうとしています。これは全てのアジア諸国、アフリカ諸国、世界どこでも見られる現象です。主婦は１日の時間の３３％を、仕事を持つ女性は２４％を、そして仕事を持つ男性は３４％を、自分の時間として持っています。この３つの円の中で、赤の部分にご注目いただきたいんです。主婦は自分の時間の６６％を無収入の労働のために使っています。赤い部分が無収入の部分です。一方で仕事を持つ女性は、自分の時間の４０％を使って労働をし、今度は家に帰って、さらに３１％の時間を家事労働のために費やします。そして一番下は男性ですが、家事労働をするために使う時間はたった１１％です。

私自身、中国即ちチベットと、中国のいくつかの州において調査をしましたが、全く同じパターンが出ました。女性は、１日の自分の労働時間がもう我慢できないくらい長くなっていると不満を言っていました。中国政府がキャンペーンを行って、口を酸っぱくして

男性も家事労働に参加せよと呼びかけているにもかかわらず、男性は拒否し続けています。１９４９年の共産党による革命以来、男性の家事労働の時間にはほとんど変化はありません。ソ連でもベトナムでも政府が同じ運動をしましたけれども、結果は同じでした。とにかく男性はやる気がありません。既得権を手放したい人なんてどこにもいません。いったいどうすればやらせることができるでしょうか。我々の方から何らかの形で、彼らの既得権を奪い取るしかないのでしょう。

女性の賃金は常に男性よりも低い賃金です。平等の賃金が法律でうたわれている国でも、抜け穴を見つけるのは非常に簡単です。女性が内職でする出来高払いの仕事は、あまりにも報酬が低くて、英語ではこのことを「ピーナッツしか払われない」と言うのです。つまりピーナッツをチンパンジーにやるぐらいの報酬しかないということです。しかも女性は組織化されていません。明日バットさんから女性をどうやって組織化してきたかという話があると思います。このような問題の解決のための鍵が話されると思いますけれども、私が今まで経験した諸国において、一般的には、農村における女性は組織化されておらず、ごくわずかのお金であっても、家族のニーズを満たすためであれば、どんな仕事でも引き受けるという実状です。

ネパールで興味深い調査を行いました。男性のためのビジネス開発、女性のための所得増加活動という調査でした。男性が農業従事者で、女性は庭いじりという同じパターンです。それはともかくとして、男性も女性も所得を増やすことで貧困から脱出させようとするものでした。ネパールでの調査でわかったことは、ネパールの女性は自分の可処分所得の８０％を家族のために使っているにもかかわらず、男性は自分の余分なお金の２０％しか、家族のために使わないということです。自分のお金の８０％は自分自身のために使っていることがわかりました。

もう一つ指摘したいのは貧困の差がますます悪化して、懸念されることです。まず、豊かな国と途上国との間の格差が開いています。そして、先進国の中でも貧困の差が開いています。先進国の豊かなエリートたちが、より多くの資源や生産材を手中に収めている状況です。

御覧いただけますでしょうか。１９７６年にタイでは、人口の一番豊かな２０％が、人口の総所得の４９．３％を得ていました。そして一番下の２０％は６．１％でした。１９８８年になると、この格差がさらに開き、一番いい暮らしをしている２０％の人たちが総所得の５５％を占め、一番貧しい２０％は総所得のわずか４．５％しか得ていないという結果が出ています。これはタイのパターンですが、タイに限らず、世界のあらゆる国において、ほとんど同じパターンが見られます。ニュージーランドでも同じです。この格差はいつまで開き続け、そしてだれが犠牲になっていくのでしょうか。

もっとも貧しい人たちの間で、この貧困の一番の犠牲になるのは女性です。というのは、女性が最も子供たちと密接にかかわり、子供がお腹をすかせて夜泣くのを聞き、病気の時には、看病をし薬を与えるからです。女性こそが貧困の最も大きな深い影響を受けているのです。ですから貧富の差がますます開いてきていることに、私は大きな不安を覚えます。

最後のグラフを出していただけますか。これももう一つの大きな女性の問題です。婦人の１０年もありましたし、国際識字年もありましたけれども、バングラデシュやスリランカやパキスタン、インド、ブータンなど、南アジアの諸国におきまして、２５歳以上の女性の４分の３は、このグラフの緑の部分で示されていますけれども、非識字者です。もし女性が非識字者ならば、無知に捕われているということです。自分たちの生活を改善するための情報が得られないわけです。東アジアと東南アジアでは、数字は少し良くなっていますが、それでも女性の非識字率は高過ぎます。東アジアと東南アジアにおいて、３分の１以上の女性が非識字者です。男性の２倍です。初等教育を受けるチャンスも、ほとんどの国において男の子の方がいいわけです。女性の非識字率が改善されなければ、なかなか女性のおかれる状況もよくならないと思います。

ＦＡＯで非常に努力していることの１つは、農村地域に住む女性に関する情報を改善することです。データ・ベースが全く不充分です。統計からだけでは女性の抱える問題をとらえることができません。女性は、統計に反映すらされません。統計で農業従事者というときは、男性しか数えません。女性も農業に従事しているのに、それは数えられないのです。タイ政府は、女性の農業従事者の存在自体を認めていません。ですからタイの女性グ

ループは、女性がれっきとした農業従事者であることを認めさせようとしています。そうすれば女性が銀行から融資を受けられます。女性が農業労働者という肩書きを持つまでは、融資も受けられません。女性は主婦としてしか見られません。男性はバンコクでタクシーの運転手として働き、女性が農作業を全てしているという状態においてさえも女性はあくまでも主婦としか見られないのです。

このような法的な問題があります。ですから、女性はまず生産者として認識されなければなりません。また家族を扶養している者としても認識されねばなりません。農村地域に行って、その地域の生活上の問題について調査をするために世帯主にインタビューしたいと言うと、常に男性が出てきます。その男性は、家族全員のことを知っていると考えられているわけです。もし女性がインタビューに答えようとするならば、女性のことしか念頭にないと考えられてしまいます。男性が何をしているかということを女性は知らないけれど、男性は女性のことを知っていると調査員は考えるわけです。

そういうわけで、私たちは参加調査と呼ぶ研究を行っています。女性のグループを対象に、調査員が女性とパートナーシップを組んで女性の状況を調査するわけです。これはアジア９ケ国で小規模農家を対象に私たちが行った参加型モニタリング評価プログラムから発展したものです。小規模農業をしている家族においてこの調査を行ったのは、農村地域の女性に関するデータ・ベースを構築するためです。今までのインタビュー方式の調査とこの参加調査の違いというのは、この参加調査は２つの目的を持っているということです。

最初の目的というのはまずデータを収集して、データ・ベースを構築することです。非常に簡単な方法でデータを採って、女性が自分たちの状況を考えるためのたたき台を作り上げます。第２番目は、教育上の目的です。データを収集し、その村ですぐに分析をするということは、女性の意識を目覚めさせる上で、非常に役に立っているわけです。今までいくつか問題が起きましたが、その１つは、男性が何がそんなに女性を熱中させるのかを知りたがってここへ参加しようとしたことです。男性がこのグループに参加すると、女性が黙ってしまうことがあるわけです。例えば家族計画については女性が発言しなくなってしまいます。へそくりについても然りです。家の裏の壷にへそくりを隠していることを、

男性は知らないからです。ですから男性が参加すると、意見が聞けないという問題も出てきました。しかしながら、この参加調査は非常におもしろいものですので、英語で書かれてはおりますが、異なるテーマについて３～４冊の本が出ていますので、皆様ご興味がありましたらお送りできます。

ＦＡＯでやりましたもう１つのことは、女性の仕事について、より正確なデータを出そうとする仕事です。１０年ごとに農業の国勢調査を各国で行いまして、農村地域で誰が何をやっているかを調べて、国連にその統計を提出しています。次の農業国勢調査は２０００年に行われるわけですが、その中で女性の問題についても触れてほしいと思っています。その準備として、インド、マレーシア、パキスタンそしてタイで、パイロット・サーベイという新しい調査方法を導入して実験しています。ＩＬＯの定義する労働に基づくものではなく、本当に正確な統計手法、国際レベルから村のレベルまで通用する指標を使用して、調査をしようとしています。

今まで実験的にやった調査によって、おもしろい結果が出ました。男性の調査員が女性の農業従事者に対して質問をしますと、間違ったデータを引き出してしまうということです。女性の調査員が女性の農業従事者に質問をすると、データの正確さが幾分よくなります。しかしもっとも正確なのは、調査員が２４時間から７２時間いっしょにその家族と過ごすことによって得られるデータです。もちろんそのコスト効率を考える必要があります。あまり細かくやりすぎると、こんなことをコスト的にやっていられないと政府は考えるでしょう。しかし、今までデータ数としては小さいのですが、非常にうまく階層化されたデータに基づいて、農業そして地域開発における女性の仕事の現状を大変よくつかめると証明できました。水や薪を取って来たり、家族のための食糧を栽培したり、家畜にえさをやったりする女性の労働の実態が、もっとも正確に表せられるデータが取れるわけです。そしてこのデータを更に有効にするため、非識字者の人たちにも分かる図を使用しています。そしてデータを提供してくれた人たちに対してこのデータの結果をもう一度見てもらって、必要がある場合には修正してもらう方法をとっています。特にパキスタンではこれを長くやっておりまして、非常に充実したデータが得られるというすばらしい結果が出ています。政府の国勢調査局には報告されないデータが議論の中から出てきて、非常に豊かな充実したデータになり、村レベルでの知的活動も大変違ったものになってきます。

去年と今年やりまして、来年も予定しています。多くの人が興味を示したので、ぜひ世界の援助機関の手助けを得て、調査を行いたいと思います。外国人が調査をするのではなく、その文化、慣習、そして言葉を知っている現地の調査員がデータを収集することが必要です。とにかく外国人は側面からの支援以外は手を出さないで、地元の人にやってもらうというやり方を考えています。ありがとうございました。

3．日本における「開発と女性」論への取り組み－文化人類学的視点から－

津田塾大学助教授　菊地　京子

菊地でございます。もう既に１時間程、前の先生方のお話を伺いましたので、皆さんお疲れかと思いますけれど、もう少しお付き合いいただきたいと思います。

私は、今日はなぜ日本で開発と女性ということを考えていかなければならないような状況になっているのかというようなことを、私自身が専門としております文化人類学あるいは社会人類学と言ってもいいのですが、この分野から少しお話をしてみたいと思います。既に、目黒先生からＷＩＤについての概念がどういうところから考え出されて、そしてそれが注目を浴びるようになったかというお話があったかと思います。それからお二方の先生方のお話の中には、女性が社会的にも経済的にも政治的にも、貧困と結び付いているような、あるいは結び付けられているような状況に置かれている、その実態のお話があったかと思います。それらのことと関連いたしまして、私は少しお話をしてみたいと思います。

つまりなぜ開発ということと女性を結び付けて考えなければいけないのかということですね。おそらくここの会館でも、「開発と男性」とか、「開発と子供」と言うフォーラムはこれまでに開催されていないのではないかと思います。「開発と男性」ということはまずほとんど不可能と言いましょうか、あり得ないと思われます。ただし「開発と子供」については、子供が開発の中に取り込まれている、子供がどういう状況にあるかということは考えていかなければならないと思います。「開発と子供」については次のフォーラムで考えることができるかと思いますが、「開発と男性」というのはあり得ないかもしれません。

問題は、なぜ「開発と女性」なのかということなのだと思います。開発について、さまざま定義があろうかと思いますけれど、そのうちのひとつが人間の社会生活の中に何らかの改善が導かれるような変革のプロセスとでもいえます。ところが先程スティーブンズ先生のお話にもありましたように、いわゆる開発が進んでいく中で女性の状況はますます悪くなっていくという実状のお話がございました。それは本来、開発が目指しているところ、目的とはかなり掛け離れた方に進んで行ってしまっているというふうに考えざるを得ないわけです。それを何とか本来、開発ということが目指している方向に戻す努力をする、つまり軌道修正をしなければいけないということです。そこに「開発と女性」ということを考えていく一つの目的・意義があるのではないかと思います。

女性だけがなぜこの人類社会全体から切り離して考えられなければいけないのか。その必要性は何なんだろうと、おそらく皆さん方も疑問に思っておられると思います。それは「開発と女性」、より正確に言いますと、「開発における女性」あるいは「開発における女性の役割」と言いましょうか、それが取りざたされる理由にはいくつかあろうかと思います。私はその一つの理由を、次のように考えます。

人類のこの長い長い歴史の中で、女性が社会との関わりを持つその関わり方が直接的ではなかったということが言えます。つまり、女性は配偶者を通して、あるいは親を通して、あるいは子供を通してというふうに、誰か媒介者を通して社会と関わり合っていた。そのことが、この女性の社会への直接的な参加であるとか、貢献というものを、部分的な関わりであったり、あるいは間接的な関わりであったというように捉えられるようになっていき、その結果、評価そのものも正当に評価されなくなってしまったという歴史的な経緯があろうかと思います。それは先程のスティーブンス先生のお話の中にも充分表れていたかと思います。

つまり家内労働の例を採ると、例えば夫と共に農業をしている女性、あるいは夫と共に漁業に従事している女性たちが単にファーマーズ・ワイフであるとか、フィッシャーマンズ・ワイフであるとかいうふうにしか分類されないわけです。彼らは夫たちと同等に働いたとしても、それは正当に評価されない、あるいは賃金体系の上に乗ってこないという状況にあるわけです。そういうことが従来、行われてきたことから、女性が貧困と結び付く

原因の一つになっていったのではなかろうかと思います。

近代以前の社会では、男性が女性と子供を養う、男性が女性と子供を扶養するということが一般的でしたが、それは結果的に、男性が女性・子供を管理していくことになるわけです。文化人類学の分野では、親族組織のあり方に基づいて、人間社会を父系制の社会、母系制の社会、そのどっちでもない社会とに分類します。

父系制の社会というのは、我々に非常になじみのある、いわゆる家制度の下にある社会なんです。男性の系統だけが、メンバーシップを取る際にたどられて、地位の継承と財産の相続というのは男の血統だけをたどって行なわれていくような社会を父系社会と言います。父系社会の中では夫が妻子を扶養するという形ができあがっていきます。

一方、母系社会というのがあります。母系社会は地球上の人類社会の中でそれほど大きい割合を占めているわけではありません。母系というのは父系社会の全く逆の形が表われているかというと、残念ながらそうではありません。母系社会の中では、女性は自分の兄弟によって養われ、自分の子供たちは自分の兄弟によって管理されていることになります。つまり、兄弟が自分の血を分けた姉妹とその姉妹が産んだ子供を扶養し、管理していくという仕組みができあがっていくわけです。

さてここで、そのどっちでもない社会というのがあるのですが、我々はそれをノン・ユニリニアル・ソサエティー（非単系的社会）と呼んでいます。これは私達の一番良く知っている例でいいますと、現在の民法がだんだんこの考え方に近づきつつあります。

例えば、女性の相続権、結婚した女性でも生家の親の財産を相続することができるというのは非単系的発想であるといえるわけです。子供は、女であろうが男であろうが、財産相続権の面では必ずしも制限を受けません。ところが、そうは言いつつも日本の社会には、まだまだ家制度の残存というのが強く残っております。

例えば、結婚をしますとどちらの姓を名乗るか、これは民法ではどちらの姓を名乗ってもいいことになっています。ところが実際婿養子をとることを最初から決められた目的と

33

した結婚でない限り、９０％を越える人達は男性の、つまり夫の姓を自分のファミリー・ネームとしていくわけです。法律ではどちらでもいいのですが、そういうような状況がだんだんと定着していく、つまり、男性が女性を管理していくというようなことが、女性を現在のように、社会的にも、経済的にも、政治的にも、不安定な状況あるいは第二の市民と言われるような状況に追い込んでいったという経緯があったと思います。

そしてさらに、開発という問題を考えていく際に、開発が進められる中で、本来は女性の地位も含めて人間の生活全体が改善されるような方向に行かなければならないのが、時にはそれが実行されていない。むしろ女性の状況を見てみると、改悪の方向に向かっていることさえもあり得るということです。そこで、我々はやはり開発の中における女性の役割、開発の中における女性の状況の改善を目指すというような観点から、おそらく"Women in Development"という考え方が出てきて、そしてこのことについて、本当にまじめに考えていかなければいけないのではないでしょうか。開発、政策を立案し、それからその政策を施行していく中で、開発の本来持っている目的を実現していくようにしなければならないということが、今日こうして皆さんにお集まりいただいて考えていく一つの理由ではないかと思うわけです。

ですから、このような文脈の中でＷＩＤという概念が女性の社会的地位の向上ということを目指す戦略の一つとして考え出されてきたと言えるのではないかと思います。したがいまして、今後、私達は社会開発の過程の中で、女性を人的資源として、本当に正当な評価を受けるような人的資源として再認識すると共に、この女性の社会への貢献と、それから今度は逆に女性が社会から受ける受益ということを男性と同じように、得られるようにしていかなければならないとそう思うわけです。

さて、開発の問題についてですが、この開発の究極の目的は一体何でしょうか。それは決して単線的な、あるいは一元的な社会進化を果たして行くという考え方に基づいて、その究極にいわゆる欧米なりあるいは日本を含めた先進工業国の社会の再現を目指すものではないということは皆さんおわかりだと思います。

そこで、文化の多様性、あるいは文化の多元性、それを我々の分野では文化相対主義と

言うわけですが、つまり全ての文化にはそれぞれが存在するだけの価値があると考えるのですが、我々には、非常に奇妙に見える伝統・風習であっても、それらはその社会の中に正統なファンクション（機能）、あるいは役目があって、それはまた長い歴史を持っているという考え方に基づいて、開発が行なわれるべきだと思います。

開発の方向というのは、決して現在の先進工業国のあるべき姿に向かって突き進んでいくことだけではないと思います。それぞれの社会には、例えば時の観念や、蓄財の観念や、勤労の観念についても、さまざまな価値観があるかと思います。我々日本人は、いわゆる農耕民出身ですから、一生懸命決められた時間の中で働いて、物を溜めて、財を成すことが美徳であると考えます。

ところが世界のさまざまな文化の中には、必ずしも備蓄や貯蓄が美徳であるとされてないところもあるわけです。例えば、移動耕作を行なっている焼畑農耕民、あるいはやはり移動生活をしている遊牧民の社会の中では物はなるべく溜めない方がいいんです。というのは移住に簡単だからです。移動生活をしてますから、物を溜めることは極力避けるわけです。家財道具は最小限度に押さえるわけです。このように、文化によっては、蓄財という観念の中に少しずれが出てきます。

我々は一生懸命働いて、何でもいいから物を溜めようとする。ところが一方では必ずしもそのことが美徳ではない社会があるわけです。そのことを私達はやはり知らなければいけないと思います。違った世界がある、違った価値観を持っている世界があるということを、我々はやはり認識をした上で、開発を考え、開発政策を作り、それを実行していく必要があるのではないかと思います。

とは言いますが、世界の趨勢というのは、やはり欧米の社会なり、あるいは日本を含めた先進工業国の社会を目指して突き進んでいるかのように見えます。確かにそうです。このようなフォーラムが行なわれる、あるいは学校教育が行なわれる、あるいはインフラストラクチャーが整えられる、橋が架けられる、港湾が作られる、道路が整備されるというようなことは、今、世界中で同じ方向を目指して進んでいることなんですね。この流れを止めることは大変難しいと思います。

我々は公害を起こすから、原子力発電所を止めよう、もう電気を使うことはやめましょう、さあランプの生活に戻りましょうということが実現可能だと思いますか？それはおそらく無理だろうと思います。ただ、一部の社会の中には、それを実行している人たちが現在でもいます。例えば、アメリカの社会の中に、アーミッシュと言われる人たちは１７、１８世紀までに開発された文明・文化の中で今なお生活を営んでいます。それは、彼らが意図的に選んだ生活だといえます。

アーミッシュのような例外はありますが、世界の全般的な情勢を見れば、今私が申し上げたような電気の生活、あるいは交通網や通信網が発達して、いながらにしてアメリカのことが同時にわかる、いながらにしてロンドンへ出かけていった大相撲の公演が東京で見ることができるという生活を我々はエンジョイしているわけです。それはよほどの決心がない限りできないことです。そうなると、こういう風潮が進んで行く際に、できるだけ全ての人たちに平等に、開発の成果が配分されるように考えていかなければいけないと思われます。

開発について考える際に、また女性の問題を考える場合に、先程も申し上げましたように、さまざまな社会の中にはさまざまな女性像があります。それぞれの社会の中で、どういう女性像が理想の女性像なのかという点については、それぞれ違っていますね。

皆さんもご承知だと思いますけれども、例えば我々日本の女性は、これはかつての話ですが、それもここ数年の話じゃなくて、我々が子供だった頃の話と言いましょうか。日本の女性は自分が考えていることを１００％表現することは決していいことだとは見なされておりませんでした。つまり、自己主張をするということは決して美徳だとは思われていなかったわけです。ところが、諸外国と文化交流、あるいはさまざまな外国の文化の接触で、我々が考えていることを１００％やはり言うべきであろうと気づきはじめています。そうでないと、お互いに理解し得ない、黙っていたのでは互いに理解し得ないというようなことになっていくわけです。従って、学校教育の中でも男の子に限らず、女の子に限らず、皆が、あなた方が思っていることを正確に言いなさいということが奨励されるようになってきたのだろうと思います。

国際会議などの席でいつも感じるのは、我々日本人はどちらかというと無口になりがちで、それはもちろん言葉にハンディがあるということもあるかもしれませんが、それだけではなくて、我々の自分の中に既に自己規制してしまうところがあるのではないでしょうか。つまり、自分が思っていることを１００％言うことは、女性として好ましいことではないという文化の中に我々が育っていることから来る行動様式によると、説明できるかもしれません。その辺がおそらく外国から来られた先生方にはおわかりにはならないところかもしれません。

しかしそうは言っても、我々も外国の方とお付き合いする中ではそうは言っていられないわけですから、今後は女性であろうと、女の子であろうと、自分の思っていることを言えるようにならなければいけないし、また後程、討論の時間がございますけれども、どうぞそのディスカッションの場合にはお考えのことがありましたら、自分の中で留めておかないで必ず挙手してご発言していただきたいと思います。そういうことも含めて、我々は開発の問題を考えていく必要があると思います。

つまり、いろいろな社会の中にいろいろな女性のイメージがあって、そのイメージに沿うような形で現在開発が行なわれていることになりますが、それは一面いいことなのかもしれませんけれど、ただそこでいつまでも留まっている限りでは開発の本来の目的がなかなか果たせないのではないかと思います。

以上のことが最初に申し上げたいことで、時間が後半分くらいしかございませんので、後半のお話に入りたいと思います。実は日本でも、昨年の２月に国際開発学会という学会が設立されました。これはどういうことから起こってきたかと申しますと、このご承知の通り、日本は今や援助大国と言われるまでになってきたわけですが、日本の援助に対する批判が非常にいろいろ出てきているわけです。もちろん日本の援助は決して悪いとは私は思いません。いいこともたくさんしていると思います。ところがその評価が芳しくないというのは、援助のあり方に問題があると思われます。莫大なお金を国際社会に拠出していながら、それ相応の評価が得られないとなると、それは我々納税者として、日本国民の一人として、非常に残念なことでもあるわけです。そこでこういう日本の開発援助に対する国際社会の期待に充分応え、且つ正当な評価が得られるように、我々の開発援助のあり方

をもう一度問い直そうと、しかもそれは従来言われていたように、経済至上主義といいましょうか、経済学の分野の方々だけが開発のことを考えるのではなくて、非常に幅の広い分野の中の人たちが共に開発援助あるいは開発のことについて考えようという、その場として国際開発学会というのが設けられたわけです。

昨年の２月に発足いたしまして、正式の会員名簿ができたのがちょうど1年前、１１月頃なのですが、その時点で６５０名ほどの会員数を持っております。今ではおそらくもっと増えているのではないかと思います。この学会の特色というのは、学際的に違った分野の人たちが共に開発のことを考えようとするだけではなくて、今まで従来、アカデミックなサークルに学ぶ人たちだけが開発のことを考えようとしていたきらいがありましたが、そうではなくて、実際開発の政策を決定するような方々、それから開発に参入してくる民間の企業の方々、そういう人たちが共に開発援助について考える場にしようというもう一つの特色があろうかと思います。従いまして、非常に広くオープンにどなたにも開かれている学会という点が、既成の学会と違う点であろうかと思います。従いまして、メンバーの中には、大学で教鞭を取っておられる方、政府の官僚の方、それから実際に開発関連の機関にお勤めの方、あるいはコンサルティング会社の方など民間の企業の方々、実際に開発援助の中でお仕事をされている方々、さまざまなバックグラウンドの方々が一堂に会して開発について勉強をしようという場でもあるわけです。

その中の一つとして「開発と女性」という分科会が作られています。これは９つ現在ございます国際開発学会の分科会の一つでありまして、現在毎回お知らせをお出しする人たちの人数が既に４０名を越えるほどになっております。月に１回のベースでさまざまな分野から講師をお招きして、開発についてのお話を伺い、お互いに情報交換しております。

昨年の５月から今年の１０月までに１６回の研究会が開かれまして、２度ほど同じ方にお話いただきました都合、１３名の講師の方にさまざまなお話をいただいたわけですが、その中から研究会の成果として、皆様方に今ご紹介できるのは、次のようなことになります。そのひとつは、上から下へというような形のトップ・ダウン方式の開発戦略ではなかなか効果を上げないのではないかということです。そうなると、草の根からの開発と言いましょうか、いわゆる下からの開発が考えられるのですが、その際に非常にネックになっ

38

ているのは、下からの開発を行なうための母体がどこにあるのか、あるいは下からの開発を考える際に人々の意向をどう組み上げていったらいいのか、どこにそのチャンネルがあるのかということを考えていかなければいけないということです。

それから、先程スティーブンズ先生のお話にもありましたように、女性に対する識字教育、この重要性というものも、お話の中に含まれておりましたし、さらには明日バット先生のお話の中で出て来るかと思いますけれども、女性の組織化の問題、組織を作ることによって、女性が力を統合して、そしてそれを地域開発なり、社会開発に押しつめていこうというその女性の組織化の問題ですね。ところがこれもなかなか難問でして、それではどうやったら組織化できるのか、非常にいいタイミングにきっかけを何か与えなければいけないのではないか、またどういう具合に、だれが、きっかけを与えるかなどが問題になってくると思われます。

それから講師の方の中に一人農水省のお役人をしていらっしゃる方がおられまして、日本の社会における農家改善の経験をお話してくださいました。農家の生活改善ですね。そのことが、現在の途上国の農村における生活改善に何らかのヒントになるのではないかということも言えるかもしれません。但し日本でやったことが必ずしも成功するとは限りません。日本でやったことをその社会に合わせるような形で、修正を加えるような形で持ち込まないと、それをそのまま日本のやり方をそっくりそのまま持ち込んだのでは必ずしも根付くとは限らない、というようなお話もございました。

それから先程のお話にもあったかと思いますけれども、途上国の人口問題ですね。いわゆる先進諸国が人口減少ということを問題にしているのと裏腹に、途上国においては人口の爆発的な増加ということが貧困を生み出す一つの要因になっているというような指摘があります。それをどういうふうに解決していったらいいか。この問題にしても、さあそれではじゃあ人口を減らしなさい、ファミリー・プランニングしなさい、家族計画を考えなさいということをすぐに実行できるかということなのです。先程のさまざまな文化における女性観が違うというのと同じように、さまざまな文化における子供の観念、子供に対する観念が違っているわけです。子供を持つことが老後の保障になるような社会の中ではファミリー・プランニングを行うことは難しいかと思います。

更に、女子労働者に対する保護の問題についての報告もありました。女子労働者に特別に配慮しなければならない保護の問題があろうかと思います。このことも我々は、今後考えていかなければならないかと思います。

以上のような研究会を踏まえまして、我々は今後、どういうことを考えているかと言いますと、この「開発と女性」分科会の活動目標は、広い分野から皆様のご参加を得たいということです。関心を持っておられる方々にはどなたにも開放されておりますので、どうぞご参加ください。特に、我々は男性の会員を多く募ろういうことを考えております。つまり女性の問題だから、女性が考えればいいのだと言われるかもしれませんが、女性の問題を女性の間だけで討議していたのでは堂々巡りだと、私は思います。男性が女性の問題を考えてくれるようにならないと、前進しないのではないかと思います。先程申し上げました１３人の報告書の中に、私達は４人ほど男性の報告を得ております。しかし実際、その報告を聞きに来てくださる方々の中には男性は毎回ちらほらと、１人か２人というような現状であります。ですから、このことも我々は広く働きかけて男性の会員数を増やしていきたいと思っております。

分科会は当初２年間ということで始まりました。１９９０年に国際開発学会が発足いたしまして５月に第１回の研究会がありましたが、この１２月に一応この分科会の第１期目が期限切れとなります。しかし我々はせっかく軌道に乗った分科会でもありますので、来年度以降も存続を理事会の方にお願いしておりまして、できれば来年度以降も続けていきたいと思っておりますので、ご関心のある方には是非ご参加いただきたいと思っています。

最後は宣伝になりましたけれど、この辺で終わりにしたいと思います。また詳しいことは後ほどの討議のところでお話したいと思います。ありがとうございました。

《セッションＩＩ》

「開発と女性」に係わる活動現場から

BEST COPY AVAILABLE

4. SEWAの経験

自営女性協会（SEWA）会長　イーラ・ラメシュ・バット

ご紹介ありがとうございます。今回、私をご招待いただきましたことに対し、また今日の発表の時間を与えていただきましたことに対し、御礼申し上げます。時間が限られていますので、すぐに私の本題に入りたいと思っております。

まず、おゆるしをいただきたいことがあります。それは、私の話はどうしても個人的な形でしか出来ないということです。

私はアーメダバードという所から来ていますけれども、ここはインドのマンチェスターと言われるように、テキスタイル産業の盛んな所です。

１９２７年にマハトマ・ガンディーが労働組合、すなわち繊維労働協会（ＴＬＡ）という労働組合を設立しました。これは信託という原則に基づいて結成されました。つまり労働者側、資本者側、そしてインテリたちが全部社会に対して責任を負うべきものであり、彼らは資本、労働、またその他の才能を持っている人たちのための受託者に過ぎないということでした。

１９５４年に私は繊維労働協会に入りました。私は大学で勉強をしていた時に、ガンディーの原則に大変感銘を受けたからです。そしてそこでテキスタイル労働者のための仕事を始めました。やがて私は、ゆっくりではありますけれども、だんだんと繊維労働者や生産工場に働く人たちが、労働条件においても、賃金においても、どの程度保護されているかを認識するようになりました。彼らは、いろいろな社会保障、例えば産前産後休暇であるとか、労災に対する保障であるとか、その他の保障を受けることができました。例えば、繊維労働者の指が切断された時、その人は２０００ルピーの保障を得ることができます。しかしながら、道路で手押し車を押している行商人は、交通事故に会って手足を折ったとしても、保障を全く受けることができません。この手押し車を押している行商人は、就労中であるにもかかわらず全く保障を受けられないということが認識されました。ま

た、自宅で作業をしている仕立て屋が指を切断しても、やはり保障がない。それから、農業労働者が出産をしたとしても、産前産後休暇を得ることができないというような状態でした。

私はこの大きな不公平に気がついたわけです。すなわち、特権を持っている労働者とほとんど保護を与えられていない労働者の間には、あまりにも大きな格差があることに、私は気がついたのです。同じ労働者でも、法律によって保護を与えられていない労働者は、あまりにも多かったのです。だから私は、２つの分野について働かなければならないと思いました。

１つが労働組合運動であります。私の国におきましては、９０％の労働者が未組織部門で働いています。未組織という言葉は使いたくないので、自営という言葉を使った方がいいと思いますけれども、これは技術的な区別です。

私は、労働組合の名にふさわしい活動が行なわれていないことを知りました。インドでは財やサービスの大半を生産するのは、未組織部門です。そして、労働者の９０％を占める未組織労働者の人たちを労働組合運動の本流に連れて来なければ、名前にふさわしい労働組合運動をすることはできないということを、私は認識しました。

２つ目が婦人運動です。インドの８０％の女性は、農村地帯で貧しく生活し、読み書きもできません。しかし経済的には、非常に活動をしているのです。従いまして、女性の運動をすることが必要であると私は考えました。これらの女性たちをインドの女性運動の中核にすべきであると考えたわけです。

労働組合運動と女性運動と、この２つを始めたかったわけですけれども、そのための青写真があったわけではありません。そこで、先程言いましたように私は繊維労働協会で働いていたわけですから、労働組合的な形で組織をすることがいいのではないのかと考えたわけです。これらの女性たち、自営労働者たち、自営で働いている女性たちを労働組合に組織するという仕事を始めました。それが先程紹介にありましたＳＥＷＡ、自営女性協会です。ＳＥＷＡとはどういう意味かと申しますと、自分で自分を雇う、つまり自営という

ことです。

１９７２年にこの自営女性協会（ＳＥＷＡ）を作りました。そして労働省に対して、労働組合としての登録を申請しました。まず労働組合の登録官は、「特定の使用者と被使用者の関係がないのに、どうやって労働組合を組織するのか。誰と闘うのか」と聞きました。私たちは、「労働組合の目的は、ただ闘うだけではない。その基本的な目的は、連帯を高めることである」と申しました。第二に、「一人も使用者がいないのに、どうやって闘うのか」と言いましたが、契約労働者というような人もいますから、契約者に対して闘うことができるし、またいくつかの政策についても闘うことができます。例えば、２世代、３世代にわたって、道路で露店商や行商をしている人がいるかもしれない。しかしながら、都市計画が行なわれたりして、新しい政策が導入されることによって彼らが追い出されるような時には、その政策に対して闘う必要があると言ったわけです。いろいろと話し合った結果、労働組合としてＳＥＷＡを登録することができました。

この発足当時から、私たちは大量の未組織のインフォーマル・セクターで働いている、限界的または周辺労働者たちを組織しました。すなわち、限界的に、あるいはインフォーマルな形で働いていても、実際に経済活動をしている人たち、特に女性を労働組合に組織したことが私たちの特徴です。活発な労働者を、インフォーマルとか限界または周辺労働者と呼ぶのは、よくないと思いますが・・・。

私たちはこのような概念的な抵抗から入り、ＳＥＷＡは今日までこの概念的な抵抗活動をしています。いろいろなレベルで活動をしているわけです。

ＳＥＷＡには３つの種類の組合員がおります。１つ目は、在宅勤務、または自宅で働いている人たち、すなわち、賃仕事をしている人です。この中には、衣料を作る人たち、タバコを巻いている人たち、食糧を作っている人たち、仕立て職人たち、職工たちが含まれます。この人たちは在宅労働者、または自営の人たちです。２つ目は商人や露店商です。野菜や果物や魚などを市場で売っている人たち、小さなキヨスクを道路に持っている人たち、バスケットを頭に乗せて、いろいろなものをその中に入れて売り歩く人たち、このような行商人や露店商が２つ目のカテゴリーです。３つ目のカテゴリーが労働者です。本当

の意味での労働者です。例えば、農業労働者ですとか、建設労働者ですとか、荷物の積み降ろしをする人たちですとか、ゴミやバタ屋ですとか、くず拾いですとか、森林の労働者つまり森林で採集活動をする人たちが、この分類に入ります。このように３つのカテゴリーから成るのがＳＥＷＡです。

ＳＥＷＡには、２０万人の組合員がいます。６州にわたっていて、その３分の２が農村地帯に住んでいる人たちです。また、３分の１がイスラム教、３分の１がハクジャン（不可触民）、そして３分の１がバックワード・クラス、つまり後進の階級の人たちです。

さて、我々の抱える問題は何と言っても経済問題であり、目立たぬ存在であるということです。組合員たちは、例えば牛の世話をしたり、牛の糞をまとめて燃料をつくっているかもしれない、焚き木を集めているかもしれない、バスケットやほうきを編んでいるかもしれない、農業に従事しているかもしれない。しかしながら公式的なカテゴリーでは、労働者として分類されていない、すなわち存在感がない、目立たない、認められていないということが一番大きな問題だと思います。

もう一つの問題はその所得が非常に低いということです。ほとんどが給与の支払われない家内労働者ですし、もし賃金が払われたとしても、非常に低い賃金です。ほとんどが未熟練労働者ですし、彼女たちがしている仕事は自動的に、技能がないと考えられています。例えばタバコを巻くなど、農村で働くためには技能が必要なんですが、しかしながらその仕事は、高い技能が必要だと考えられていません。特に読み書きのできない人たちが従事する仕事であるがゆえに、技能のない仕事だと思われ、低賃金しか支払われません。低所得が２つ目の問題です。

３つ目は資産がないということです。女性たちは自分の名前で資産を持つことができません。自分たちの名前で土地を登録してそれを持つことはできませんし、銀行口座も持てません。すなわち自分の名前での所有は許されず、結局子供以外は自分の所有物が全くないのです。しかも、子供たちだって大きくなると、お母さんのもとから離れてしまいます。ですから、３つ目の問題は資産がないということです。つまり、目立たない、低所得、資産がないという三重苦に悩んでいるといえるかもしれません。

さて、私たちが組織をしている時には、経済的な活動をするということ、そして自立をするということが、その目的です。完全雇用のための組織をしています。完全雇用というのは、長い間維持でき、生産ができ、そして所得が入るものです。所得、食物、そして社会保障がきちんと得られる場合を完全雇用を言います。独立独行でなければなりません。外に頼らなければならないのでは、自立とは言えないからです。ですからＳＥＷＡとしては、自立を目的とする活動をしています。

ＳＥＷＡの銀行についてお話ししたいと思います。ＳＥＷＡは７２年に設立し、７４年に協同組合の銀行を作りました。これは大変に良いことだったと考えています。７４年以降、すなわち銀行を設立してからは、ずっと他の所から資金の調達を得る必要がありませんでした。自営している人たちは、ほとんどの場合２つの問題を抱えています。１つ目は運転資金の問題です。野菜を売る人たちを例に採ると、朝５０ルピーがなければ、彼らは野菜を仕入れることはできません。だから金貸しから５０ルピーを借りたとします。すると５５ルピーを、夜返さなければならないわけです。そして低い所得の中からそれだけを払って、翌朝また５０ルピーを借りて、夜５５ルピーを返さなければならない。すなわち、常に運転資金が足りないという問題があります。

２つ目は生産の手段をいつも人から借りなければならないことです。例えば縫い子の場合には、ミシンの賃貸料を払わなければならないし、手押し車を押している人は、手押し車の賃貸料を払わなければならないわけです。

１９７２年に、インドの銀行が国営化され、地方銀行は小口の融資先を見つけなければならなくなりました。ところが銀行は、小口の借り手をどこで捜したらいいのかわかりませんでした。私たちは融資を必要とする組織ですから、銀行に頼みに行きました。このようにして私たちの組合員も、政府からローンを得るようになりました。

最初はいろいろと問題があったわけです。ある会合で、一人の組合員が私に言いました。「自分たちの銀行を持つことができればいいのに」私は答えました。「私たちは貧しいのです。でも協同組合銀行を設立するには、数百万ルピーが必要です。共同出資が必要

です」すると「でも、たくさんの人がいるんだから、ちょっとずつお金を出せばできるんじゃないでしょうか」、そして６カ月で必要な資金を得ることができ、最終的には１９７４年に協同組合の銀行を作ることができたのです。

また、協同組合として登録をしに行った際、また概念的な問題に行き詰まりました。政府に対して協同組合銀行の登録を申請すると、登録官が言いました。「読み書きもできない人たちの銀行なんか、どうやって持つのですか」「例えば銀行の取引だって、読み書きができなければ、できないじゃありませんか」更に、「組合員は皆女性ですね。でも財務関係では女は意思決定をするような立場にはありません」とまで言いました。この人は私たちに対して、中産階級のアイディアを押しつけたことになります。しかし、労働者階級では、このような考え方はしません。このように、初めのうち登録官は、私たちの銀行の登録を認めませんでした。

そこで私たちは、闘わなければなりませんでした。ＳＥＷＡの女性は経済的な活動をしているから、貯金も出来るしお金を借りる必要もあるということを説明しなければなりませんでした。確かに読み書きはできないかもしれないけれども、預金通帳に写真を貼り、それと同じ写真を元帳に貼ればなんとかできると。そうして私たちは、銀行を始めていこうとしました。そして配偶者である夫たちの助けをかりなくても、銀行との取引を始めることが可能になったわけです。それも夫たちの感情をいたずらに刺激することなく実現したのです。

このような形で１９７４年に銀行が開設されまして、今日では3万人が預金をしています。米ドルで１６万ドルが運転資金になっています。返済率は９６％です。しかし、農村地域の人たちから圧力がかかりました。６５の村に女性の貸付グループがありまして、自分たちで業務をしていました。

もっとも人気のあるのは、抵当に入れた土地を元に戻すことです。私たちは抵当に入った土地を取り戻す手助けをしましたが、ただしその土地が女性の所有になるという条件をつけました。そして女性が望めば第二の所有者として夫の名をつけ加えてもいいことにしました。また、家族に危機が訪れた時、まず最初に目をつけるのが妻の宝石で、それを質

47

に入れるという問題がありまして、この質に入れた宝石を取り返すことも、もう一つの人気のあるプログラムです。

ＳＥＷＡの銀行は、主に女性の蓄財の手助けをしてきました。女性が銀行預金や土地、ＩＤカードを持っているということで、彼女たちの地位が確立されました。私たちは国のレベルでもこうした活動を続け、全インドの女性のための全国貸付基金の設立を、今要求しています。また世界女性銀行もあり、これは去年日本にも、その支部が出来ました。このように女性のための銀行を通じ、女性のための資産作りを手伝っています。女性が経済力を得れば、より自立的な考えをしていくことできることが、今までにわかっています。

次に組合です。これは協同組合と労働組合との２つの形で女性を組織しています。タバコや衣服、繊維、皮革、製品などを作っている女性たちの組合を作ろうとしています。

一つの問題は最低賃金法が適用されていないということです。これらの仕事が職業として認識されていないために、全く何もないところから始めなければなりませんでした。そして２～３の業種で最低賃金法の法律の適用を勝ち得ました。

ここでも私たちは、家内労働というか、家庭で行う仕事について主に闘っています。しかも、この私たちの闘争は、現在では国際的なレベルにまで広がっており、日本の労働省の方や労働者代表の方にもお会いしました。私たちはＩＬＯの条約が、家内労働に従事している人たちを保護・認識するように要求しています。ＩＬＯ条約が発効されれば、条約を批准した加盟国は法律を施行しなくてはならないわけですから。家庭で仕事をしている人たちの法的な立場について、現在世界的に調査が行われています。この家庭で仕事をするという現象は、途上国に限らず先進国も含め、世界的に問題であると思います。

現在３つの国際労働組合と関係を持っているおかげで、それらの支援を得てＩＬＯに到達することができました。１９９３年のＩＬＯの議題の中の一つに、ホーム・ベース・ワーカー、すなわち家庭で仕事をしている人たちに関するものが入れられまして、非常に私たちは嬉しく思っています。使用者側は強く抵抗していますが。

全く交渉力がなく、非常に貧しく低賃金で働かされている私たちに、果たして労働組合など持てるんだろうかということがまず問題でした。そこで戦略として、協同組合と労働組合がいっしょになって闘うという考えを打ち出しました。協同組合という土台の下に労働組合が活動すれば、闘いやすくなると考えたわけです。

例えばある地域で、衣服産業で働く人がだいたい６００人位いたとします。そして、彼らが労働組合として出来高払いで働いており、賃上げ要求をしたとしましょう。賃上げを要求すれば、当然職を失う危険も大きいわけです。しかし、彼らが協同組合も同時に組織していて、６００人のうちの２００人がその協同組合から仕事を得ていたとすれば、その人たちは職が保証されるわけですから、残りの４００人の交渉力も自動的に増し、賃上げも実現しやすくなるといえます。まあごく単純化して、協同組合と労働組合が手をつなぐことの効果を説明したわけですが、交渉力があれば賃上げ交渉もすることができるということで、交渉力をつけることが必要でした。

もう一つの戦略は、雇用の創出でした。農村地域においては、ほとんど仕事がないのが問題です。どうしたら、仕事もない状態で、闘争や要求を目的とした組合を作ることなんかができるだろうかを考え、私たちの農村地域において、まず雇用を創出することを考えました。農村地域の女性は愚鈍であり、だから新しく雇用を作らなければいけない、現金収入を得るようにしなければいけないということではありません。彼らは技能があります。これまで生き残って来たのです。つまり、ひどい状態で生き残るための技術をきちんと身につけているわけですから、技能労働者と言えると思います。だから、その技能を使って彼らのベースで技能を伸ばすことを考えたわけです。すなわち、より良い技術を、またより良い道具を与えることを考えました。そして彼らが組織化されますと、だんだん力を得て、交渉力、解放市場、オープン・マーケットを持つことができました。家庭内で仕事をしながら、例えば家畜を得て所得を得れば、十分食べていくことができます。そうすれば、高利貸しから金を借りなくて済むわけです。このような形で、農村地域でも仕事を進めて来ました。

私たちは支援サービスを行っています。なぜなら、問題は経済の問題だけではないからです。貧しい人たちは多くの不利な条件、例えば所得・労働条件上の不利な状況を持って

います。それが支援サービスが無いが故に、更に悪化しているのです。だからサポートするサービスが必要であると考えまして、７つの支援、すなわちヘルス・ケア、育児、保険（全ての女性を生命保険に加入させる）、訓練、法律的な援助、住宅、コミュニケーションを行っています。そのうちの２つについてお話をしてみたいと思います。

まず、地域の保健プログラムです。これは簡単で安全、しかも安いプライマリー・ヘルス・ケアを与えるプログラムです。地元の若い女性たちを訓練し、彼女たちがヘルス・ケア・サービスを与えることができるようにしました。そして、現地での健康上の問題の８５％までは、その地元の人たちを訓練すれば対処することできることがわかりました。またロー・コストの大きな薬局を導入することにしました。薬の価格は５００倍も違います。貧しい人たちが一般の市場で、しかも医者に処方してもらって買うとしますと、薬は高いのです。しかし私たちは、一般的な薬は卸から直接買いますから、５００分の１の価格で買うことができるようになりました。だからこの現地の薬屋さんも、大変人気が出るようになりました。また、保健の分野に協同組合を導入しました。私が現在考えていることは、ヘルス・ケアの財源をどの程度まで我々自身で調達できるかということです。もし貧しい人たちに対してきちんとしたサービスを提供すれば、きちんとした価格を払うようにもなりますし、その払う能力も持っているのです。

その次にコミュニケーションの問題についてお話をしてみたいと思います。やはりコミュニケーションたるものは二方通行でなければなりません。一方通行であってはいけないわけです。しかしながら、情報にしてもアドバイスにしても命令にしても、いつも上から下へ降ろすような形のコミュニケーションばかりです。上にいる人たちは、下にいる人たちのニーズがわかりません。だから、私たちは二方通行が必要であると考えました。

そのうちの１つにはビデオ・ＳＥＷＡがあります。１９８４年に、私たちは１７人の女性を集めました。この１７人のうち３人以外は字が読めない人ばかりですが、この人たちに対して、ビデオの政策の訓練を行ったわけです。すなわち開発の道具として、ビデオを使うことにしたのです。このビデオの製作によって、組織の拡大を行いました。そして私たちのグループの訓練のためにも使ったわけです。情報の伝達、また文書化にも役立ちますし、更にこれらを政策決定者に見せることができます。「私たちはこういうことが必要

です」ということを、政策を決定する人たちに知ってもらうためにも、ビデオを使っています。ソニーと国連大学のおかげで、私たちはこのような人たちを訓練することができました。そしてまた、編集の技術も身につけることができたのです。私たちのカメラマンで一番腕のいい人は、野菜の行商人です。音響では農業労働者です。全く読み書きができないのです。でも目はいい、耳もいい。だからすばらしいものを作ることができます。テレビなんか見たこともない行商人が、すばらしいカメラの腕を持っているのです。しかも創造性と独創性が豊かで、すばらしい作品を作っています。このテープを売るわけではありません。もっとも若干は売りましたが。しかし、私たちは訓練その他に十分に使うことができます。

その他にもやっていることがたくさんあります。例えば、飢饉とか、洪水とか、暴動など、たくさんある人災、天災に対する救済や復興などに大活躍しています。いつも私たちはたくさんの問題を抱えているのです。

では「成果は何か」と聞かれるかもしれません。まだやるべきことは、沢山あります。私たちは農村の女性の人たちを目立つようにしました。今までいつもいつも隠れている人たちを目立つようにしました。またＳＥＷＡの組合員は、充分に食べることができるようになりました。そして今や契約労働者として、何かを搾取されたり、高利貸しから金を借りなくて済むようになりました。こうしたことが私たちの業績といえるかもしれません。

これまでの活動で、２つのことを学びました。１つ目は、もし女性が仕事を基にして組織化されれば、女性は初めて、自分を労働者あるいは生産者として考えるようになるということです。労働組合の中で、組合員が自分を労働者と考えなければ、組合を持つ意味は全くありませんね。このプロセスを通じて、女性は自分が労働者であることを自覚するようになったわけです。ということは、自尊心も高まったと言えましょう。自分は経済に対して、社会に対して、寄与しているのだと、何もしていない普通の人間ではないのだということ認識するようになりました。

２つ目はカーストとか、社会とか、宗教でずいぶん違いがあるわけですけれども、これらの違いを乗り越えて、お互いに協力をすることができるようになったということです。

例えば、危機があった時やストの時にも、協力することができるようになった。違いを乗り越えたということは大変すばらしいことだと考えています。そして、このような組織化のプロセスにおいて、女性たちは自信と勇気を持つことになりました。集団的な、団体的な勇気を持つことになりました。またマネージャーとして、管理者として、指導者としての能力を発揮することができるようになりました。自分の資産を持っています。自分の名前で資産を持っているわけです。

もはや、自分は運が悪かった、悪い星の下に生まれたなんて泣くことはやめました。問題があれば、「おおう、やってやろう！」と、自分たちの会議で問題を解決しようと、積極的な態度を取ることができるようになりました。今まで、服従で受け身であったのですけれども、それを捨て、社会のプレッシャーに、家族のプレッシャーに抵抗することを学びました。今や女性が一致団結して、積極的な形で、前向きに行動することができるようになりました。そしていろいろ革新的な形で、自分たちなりの形で、組織をすることができるようになりました。そして更に、権力構造に対してどうやって対処をしていこうかというようなことまで考えるようになりました。これは人を育てて行くということに他ならないので、時間がかかりました。今女性は、どんな開発をするべきかという意思決定も、自分たちで行っています。そして成果配分も自分たちで決める、更にどういう形で発展が必要かも自分たちで決めます。変化のリーダーは女性なのだということを、私は強調しておきたいのです。

最後の点についてお話をいたします。まとめを申し上げるならば、私は組織が必要だと考えているのです。組織化をするためには、近道はありません。早く組織化する処方箋はないのです。努力が必要です。闘って取らなければならない、これが組織化です。例えば、警察官が行商人を追い出そうとした時には、警察官に対して抗議しなければなりません。一つ一つ積み上げが必要です。銀行が女性に対して信用供与を与えない時、すなわちローンを出してくれない時、政策を変えなければいけません。また政府が、女性はただ福祉の対象、受け手だと考えている時には、抵抗し、その政策を変えていかなければなりません。国の開発において、男女は平等な立場で貢献するべきだと、請求しなければいけません。

全ての段階で闘いがあります。例えば、警察に対しての闘いは直接的なものでありましょう。契約労働者を搾取する使用者に対しても、これは直接的に闘っていかなければなりません。しかしそれだけでは不充分です。警官や使用者は、国家レベルの権威構造によって強化されているのです。一方行政的なレベルではどうでしょうか。例えば、銀行の役員であるとか、政府の労働関係の高官であるとか。その人たちに対しても、やはり闘いを挑んでいかなければならないのです。より良い政策を、より良い行為を生み出さなければなりません。全く違った概念で政策が作られている時、その概念を変えていくように努力をしなければなりません。

このように、直接的なレベルでの闘いがありますし、政策レベルでの闘いもありますし、国際的な、また国内的なレベルでの闘いもあります。私たちはいつも闘いを続けているのです。成否を問うものではありません。闘えば、必ず何か手に残ると思います。闘いから学び取れば、最終的には何らかのプラスの面を生み出すことができると考えています。組織化が大事だということを申し上げて、私の講演を終わります。ありがとうございました。

5. フィリピン官僚制度における女性の現状及び課題

フィリピン公務員委員会（CSC）会長
パトリシア・A・サント・トーマス

今日は公務員として働く女性の姿をご紹介したいと思います。その前に少し背景として、フィリピン全体についてのお話から始めたいと思います。

まずフィリピンのことを理解していただくためには、歴史から始めなくてはなりません。４００年のスペインの植民地化、それから１００年のアメリカの植民地化、そして、日本の下では５年という長い長い植民地としての歴史があります。この時期に関して、修道院で４００年過ごし、１００年ハリウッドに住み、そして５年間空手の国に住むというようなジョークもあります。

また、地理も少しご紹介したいと思います。７１００余りの諸島があります。つまり、海を隔てての島国ということです。そのため、私たちは非常に移動をする国民として知られるようになりましたし、また分断の国民とも言われます。

フィリピンの女性は強いとされています。実際に、開放運動に多くの女性が参加しています。また、その女性の中で最も著名人と言えば、アキノ大統領だと思います。ご主人が暗殺された後、女史はいろいろ指導的な役割を果たしてきました。

少し統計をご紹介したいと思います。２年前、フィリピンの人口は６２００万人でした。男性が３１８０万人、女性が３０２０万人です。１５歳以上の労働人口は２４００万人で、男性は１５４０万人、女性は９００万人となっています。しかし実際に経済活動をしている人、つまり働いている人たちは２２５０万人で、そのうちの１４７０万人が男性、そして８１０万人が女性です。

１９８６年の革命によって様々な改革が実行されました。人権擁護を唱える弁護士たち

が政治に参画するようになりました。政府の方針も変りました。女性も公職に就くようになり、選挙で票を獲得するようにもなったのです。不利な立場にあった人たち、これには女性も含まれますが、こういう人たちのための改善が実施されました。この一連の改革によって、女性の役割も増大したのです。またこのような状況が、フィリピン女性のための開発計画を生んだのです。

１９８７年に女性のための国内委員会、ナショナル・コミッション・フォー・ウィメンが再強化されました。それ以前は、女性は主として奉仕活動の目的でグループを結成していました。１９８７年、委員会の新指導部は方向転換を実現しました。それは女性の権利や主張を積極的に擁護し、女性に関する政策を立案し、女性のための計画や、プログラム、プロジェクトなどを、より参加型、より対話型に展開しようという試みでした。

その結果、１９８７年に一連の協議が始まりました。実際には、９つの部門別協議が開かれました。それがフィリピンでの、女性のための開発計画の幕開けになったのです。女性に焦点を当てたこのプロジェクトに対して、バンコクのＥＳＣＡＰから技術援助をいただきましたが、実務は国家経済開発当局がナショナル・コミッション・フォー・ウィメンとの連携で実行しました。そのほかにも、ＵＮＩＦＥＭが補助金を提供してくださっています。

やがてこの開発計画は草案され、１９８９年２月に政府の公式文書となりました。大統領令により実際に施行されたのは、１９８９年３月でした。従って今日では、フィリピン開発計画に類似する女性のための開発計画が、並行して実施されています。先の国家開発計画に比べて、女性の開発計画の方が少し長くなっています。特別に５つの章が追加されているからです。それは女性の移動、売春、女性に対する暴力、メディア、そして芸術と文化です。

女性のための開発計画はＧＯ（政府機関）とＮＧＯ（非政府組織）のパートナーシップという、新しい課題も浮き彫りにしました。それまで計画は、すべてトップ・ダウン、つまり上から下へのものでした。政府が人々に押し付ける政策で、国民はただ無言で受け入れるだけでした。アキノ政権は違ったアプローチを展開したのです。それは、もっと協議

を主体にしたプロセスです。簡単に言いますと、この協議のプロセス、いわゆるプラニング・サイクルはまず協議から出発します。その後政策立案、実施、モニタリング、年毎の修正、そしてまた協議にもどるサイクルになります。

この過程のあらゆる段階において、“プリンシパル・アクター”、つまり主要な役割を担う人たちが登場します。まず協議の段階ではＮＧＯが重要な役割を果たします。政府機関はスタッフを使っていろいろな事務を遂行しますが、協議ではやはり、ＮＧＯの人たちの参加による計画の詳細についての意見交換がないと、成果は得られないわけです。立案の段階では実際にプランを書面化しなくてはならないので、ＧＯが担当します。モニタリングは、ＮＧＯとＧＯ間での協力体制になります。修正段階では政府の方が主たる役割を果たします。そしてまた協議の段階へ戻ると、ＮＧＯが主体になります。

このプラニング・サイクルを見ると、政府の公務員があらゆる段階で関与していることが一目瞭然です。ただ単にプロセスの最初から最後まで関わっているだけではなくて、政府の役人が計画の大部分を立案し実施するのです。従って、官僚の人たちに着目しなくてはなりません。

ここで、フィリピンの官僚制度について、少し数字を使ってお話したいと思います。約２００万人の人たちが政府で働いています。そのうち５２．８％が女性で、男性は４７．２％ですので男性の方が少ないわけです。公務員に女性の方が多いのは、通常政府の賃金が民間部門に比べて低いからです。女性は“第２の稼ぎ手”として扱われ、低賃金に甘んじなければなりません。従って男性の方が少ないのです。

第一レベルは事務一般、手工芸、商業などに携わる初級公務員で、５２％が男性、４８％が女性です。男性の方が上回っているわけです。第二レベルの専門職や技術職では女性が多く、５９％を占めています。男性は４１％です。理論的には、この第二レベルが第三レベルである管理職クラスを支える“フィダー・グループ”に当たります。そして管理職クラス、つまり第三レベルでは、お察しの通り、７１％対２９％と圧倒的に男性が多くなってしまいます。無論、世界の公務員の割合に目を転じれば、２９％はそんなに低い数字ではないかもしれません。というのも去年カナダで、１９９１年に政府管理職における女

性の割合を１５％にするための運動が展開されているという話を聞いたからです。ですから、フィリピンはそんなに低くないかもしれません。ところが、第二レベルの女性は５９％もいるのに、第三レベルの管理職になると２９％と、ぐっと下がってしまいます。この差はあまりにも大きくて、統計的に見ても通常の理由では考えられないことです。

なぜこのように政府の女性管理者が少ないのでしょうか。まず考えられる理由として、伝統的な偏見、誤解や神話があります。女性は、肉体的に弱いのでオフィスで事務をして、現場は男性に任せた方がいい。また女性には月経があるので、精神的にも脆く情緒不安定になりやすい等々。女性には常に、このような神話がつきまといますが、すべて事実無根です。

その他に、構造的な障害もあります。女性には仕事と家庭の両立という二重苦が課せられ、いろいろな差別もあります。さらに政治的情実も不利な条件になります。フィリピンでは常に、西欧型の官僚制度を布いてきました。それはアメリカの占領下で導入されたものです。この何十年間、政権交代のたびに私たちは情実人事に慣らされてきました。私たちは公務員制度を、より“プロフェッショナル”にしようと努力して来ましたが、今だに成功していません。

それではこのような障害を踏まえて、政府で働く女性のために何ができるか、どういった改善が必要かということになります。まず、プロセス全体をより公平なものにすることから始めました。私たちは、なにも割り当て制度を要求しているわけではありません。女性は既に政府に参加していて、彼女たちが不利な立場に立たされている場合は限られています。私たちが要求していることとは、女性が能力に応じた役職に就けるような、より公平な公務員制度です。特別な処遇、待遇を要求しているわけではないのです。女性保護を目的とした法律が制定されていますが、往々にして逆効果になってしまい、男性に有利な結果をもたらしてしまいます。２つの例をあげます。１００人以上の女性が働く工場では、デイケアーセンター（保育所）を設置しなくてはいけないという法律が通過しました。しかし多くの工場では、保育所設置を逃れるために女性の雇用を止めてしまいました。また、女性の夜業（夜間の作業）を禁止したＩＬＯ条約を採択した結果、女性の雇用がやはり下がってしまいました。

私たちは、欠員情報の透明性も勧告しています。今まで、欠員が出てもその情報が容易に入手できませんでした。最近になって制定された法律のおかげで、今では欠員情報は3箇所に公示されるほか、新しく人を配置する前には、販売部数の多い新聞に必ず募集記事を掲載しなくてはなりません。これは女性にとってとても有利な改善です。

採用試験の頻度も多くなりました。この公務員の試験は、毎年ＣＳＣが実施しています。年間約６０万人が試験を受けて、１５万人が通過します。最近導入した新制度によって、だれでも好きな時に試験を受けられるようにしました。すべての人に公務員の試験を受ける機会が保証されたことになります。採点に関しては、昔は合格点が７０点でしたが、今は８０点に修正されています。興味深いことに、合格点を上げた結果、試験に合格する女性の数が増えています。

すべての役職が、人事配置と昇進委員会の審議の対象になっています。また、審議には雇用者代表が出席しなければならないと規定されています。現在私たちは、人事考課の改善に努めています。正当な評価制度を確立して、女性がもっと昇進できる人事考課を模索中です。その他に、苦情申し立ての機構も設立しました。

私たちが実施した対構造障壁の是正策を、ここで強調しておかなければなりません。私は、フィリピン公務員委員会（ＣＳＣ）委員長に、１９８８年に就任しました。その前は労働雇用省の次官でした。ＣＳＣの委員長になって、なぜ女性が中間管理職やそれ以上の役職に就けないのかスタッフに聞いたところ、答えは、女性は頻繁に遅刻したり休むからだと言われました。そこで、オフィスの女性たちとの対話を試みました。彼女たちの反論は、仕方なく遅刻をするのであって、遅刻しない方が不思議だということでした。朝は朝食を作り、子供の支度をして、いやがる夫の代りに自分たちが子供を学校へ連れて行かなくてはならない。当然遅刻する。また午後には市場で買物をするために、早くオフィスを出なくてはならない。女性には残業をする暇が無い。このような状況を是正するために、現在ではフレックス・タイムが導入されています。公務員は、７時から４時、８時から５時、９時から６時のどの時間帯でも選ぶことができるようになりました。これにより女性公務員は、過去の８時－５時の厳しい時間枠を守らなくても済むようになったわけで

す。

先週開かれた議会の公聴会である議員が、このフレックス・タイムは立法権の侵害だと私個人を攻撃してきたので、私はなぜかと聞き返しました。するとその議員は、勤務時間は絶対に８時－５時と決まっていると主張するので、私はこう言いました。「法的な規定は週４０時間、一日８時間となっていますから、立法権の侵害にはなりませんよ。まだ侵害だと主張なさるのでしたら、法廷に持ち込んで下さっても一向に構いませんよ」。法による明確な規定がない場合は、雇用者や女性に有利な解釈をすべきだというのが、私の信念です。

法律が特定していない箇所は、従業員に有利なように解釈し、女性は利益を得るようにすべきだと思います。フィリピンの公務員委員会は、その従業員のために保育園を設けました。また、女性の弁護士も仕事に徹することができないことがわかりました。例えば子供がうちに帰ったかどうかなどを電話でチェックをしなければならないことがわかりました。昔はメイドを雇うことができたけれども、家事労働者が香港や日本やサウジアラビアに出稼ぎに行ってしまったために、自分で家事をしなければならないわけです。そこで私は、女性が職場で家の事を心配せずに働けるようにするには、どうしたらいいかを考えました。

オフィスに保育所ができればいいわけですが、コストの問題があります。法律的に決まっていることではないため保育所のための予算がないのです。しかしながら、自由裁量基金というのがフィリピンにはあります。何らかの目的のために自由裁量で使える基金のことです。私はこの自由裁量基金の半分を保育所のために使い、あとの５０％はあなたたちがお出しなさいねと言いまして、保育所が導入されました。もう２年間運営されています。学校のある時には、１８人から２５人の子供がその保育所にいます。夏は、最大４０人の子供たちがいます。面白いことに、オフィスの女性が子供を連れて来るだけではありません。男性も子供を連れて来てくれます。お父さんも保育所に子供を連れて来るようになったのです。

６つの政府の役所が、このフィリピンの公務員委員会の実験に加わりました。「実験」

というのは、まだ法律で決まっていないからです。この他に“エクアド”、つまり「平等の主張」も導入しました。１４の地域で、性による、あるいは政治的な心情による、民族的な違いによる、またその他の心情による差別がないかどうかということを、指定された人が調査するものです。

性的いやがらせは官僚制度にもたくさんあります。これは表面立っていないのです。なぜならこのようなことは、フィリピンのような非常に丁寧な社会では口に出さないんです。フィリピンは男性的な文化の国なので、こうした性的いやがらせを当然のことと考える傾向があります。秘書だったある女性が、いろいろ性的いやがらせを受けたとして、苦情を申し立てたことがあります。私たちが担当したのですが、出頭した上役の弁護士が言いました。「公務員法を破っていない。性的いやがらせはしていない。この申し立ては有効ではない」これに対して私は、「侵害のリストを見なさい」と言いました。それには重大な違法行為や抑圧行為が含まれています。それに基づいて上役の責任を問いたいと言いました。性的いやがらせはないかもしれないけれども、その他にいくらでも、申し立ての根拠となるようなものがあると言いました。その人は結局解雇されたようです。しかし性的いやがらせがこれほど話題になる前にできたルールなので、その基準があまり明確でないのが実情です。

１４の地域で行われている“平等の主張”ですが、何をしているかと言いますと、いろいろな差別の申し立てを公聴し、必要ならば、訴訟を起こす手伝いをします。“平等の主張”に相談が持ち込まれると、まず通常の苦情申し立て制度に乗ることができるかどうかを考えます。そして必要であれば、訴訟に持ち込みます。

次に、仕事のスワップ・プログラムというのがあります。マニラやセブなどの大都市では交通事情が悪いし、また女性が仕事を変えることは難しいわけです。私は市のはずれに住み、私とは全く反対方向に住んでいる人もいます。彼らは２時間もかかってバスで通勤しています。バスは交通混雑でゆっくり走るし、暑さで汗まみれになって職場にたどり着くのです。ヘトヘトになって仕事を始めても、効率は上がりません。そこで仲介サービスを開始しました。すなわち、公務員がなるべく家の近くの役所で働けるようにして、職場をスワップ（交換）するというものです。このスワップ・プログラムを申し込むほとんど

の人は女性です。

また、私たちは政府部門でパート・タイマーを導入しようと計画しています。昔は、パート・タイムは政府では導入されていませんでしたが、私たちは初めてパートを導入しようとしています。女性の先任権を失わないようにというのがその目的です。子供を育てる間休職をしても、先任権を失われることがないようにと考えています。

また私たちは、役所内で女性がいろいろな組織をつくれるよう、女性に対するサポート・システムを導入するようにと言っています。女性は職場で虐待されたりいろいろな目に遭っているわけですけれども、恥ずかしがってそれを公表しません。しかし他の人たちも同じ経験があると知れば、恥ずかしがらずに、勇気を持って、積極的に関与するようになるものだということがわかりました。今では多くの組織が出来ました。例えば、“ＷＩＮＧＳ（公務員女性）”というようなものです。

それでは次に、管理職のレベルについてお話をしたいと思います。政府の活動では、管理職が重要です。政府の部門でも、管理職のレベルで意思決定が行なわれがちですが、女性の管理職は１８％しかいないのです。政治的な形で指名された人を加えますと２９％になります。しかし、キャリアの管理職の場合には、わずか１８％の女性しかいない。なぜ女性がそんなに少ないのかというのが当然の疑問です。女性を管理職に上げるためには、昔からの方法があるわけですが、１つは訓練です。３カ月から９カ月の一定の訓練を受け、その後で、キャリアの管理職になるわけです。

私たちの調査でわかったことは、様々なオフィスで女性は労働力であるが故に職場を離れることが出来ず、従って３カ月から６カ月の訓練を受けて昇進するのは、男性が多いということです。しかし既に制度を変えましたので、今年ようやく変化が起こりつつあります。訓練を受けて、キャリアの管理職になる方法から、これまでの成績を見てテストを受けるというやり方へ変更したのです。１年の職場内訓練を行なっていますし、それでも不十分であれば、例えばパブリック・スピーチが下手であれば、そのための訓練を行ないます。

しかしながら、キャリア・エクゼクティブ・サービス・オフィスは、管理職になってはじめてそのような訓練を得ることができます。

来年選挙が行なわれ、新大統領が誕生します。キャリア・エクゼクティブ・サービス・ボードの委員会（これは第３レベルの政策決定機関ですが）の委員長として、私は新任の大統領に有能なキャリアの管理職を提供したいと考えています。また、定期的に管理職の成績や、だれを昇進させるべきか、あるいはだれの首を変えるべきかというような情報提供をしたいと思っています。これからは、公務員のそれぞれのボスの意のままということではなくて、配置転換や移動の制度を設け、現在の職以外の職場に移る可能性を、提供したいと考えています。

更に私たちは、意思決定をする立場に、より多くの女性を据え、また選挙の候補者として、女性を立てることを目指しています。“ＷＩＮ”というグループがあります。すなわち、“国家建設のための女性”というグループです。

私たちがこのような運動に力を入れている理由は、より多くの政府機関に女性を入れて、女性の視点を含めた政策を導入したいと考えているからです。時間超過でなければ、もう少し話したいと思います。

海外雇用プログラムというのがありまして、私もこれに関与していました。私は労働次官補になる前に、その仕事をしていました。国内の失業を軽減して外貨を獲得するための一時しのぎの措置として、海外の雇用が考えられています。男性は、外貨獲得雇用創出という見地から海外雇用を見るようですが、女性の場合には、これを問題として考えます。

例えば、家族の崩壊があります。母親が香港に出稼ぎに行ってしまう。またはカナダに、アメリカに行ってしまう。メイドとして海外に流出するお母さんたちがたくさんいます。その結果、子供に対する虐待がよく行なわれていますし、近親相姦などの問題もあります。お父さんしか家に居ないからです。多くの家庭の崩壊があります。だから、政府もこれに対する解決策を見つけなければならないと思いますが、それだけのプレッシャーが十分に政府にかかっていないと思います。

もっと女性の保護が必要です。例えば、外国での職場における保護も必要だと思いますし、他の国のＮＧＯとのより良いネット・ワーキングも必要だと思います。政府は自分の国の労働者をうまく保護できません。政府はやはり外交的な手続きを取らなければならない。そのためには時間がかかります。その時間を取っている間に、だれかもう死んでしまっているかもしれないわけです。

また、多くの女性の労働の代表が、海外で必要だと思います。そうすれば、問題を抱える女性を助けることができると思うのです。女性が持つ問題について、理解を持っているのは女性です。女性が飛び降り自殺をした事件がありました。ホーム・シックでさみしくてたまらなくて、身投げをしたのです。大使館の男性の労働担当官にはわかってもらえない問題がたくさんあるわけです。

昨夜はたいへん楽しい夜でした。日本の方たちと懇親会の時に、ラウンジで話し合いをしました。その折、沖縄の女性の方が、「トーマスさん、開発ということをどういうふうに考えますか。今日のセッションでも話されましたね」とおっしゃいました。「女性として、開発というのは選択肢を与えられることだと思います」と私は答えました。開発、すなわち選択肢があるということです。昨夜話をした日本の方たちは、たくさんの選択肢を持っておられます。一人の方は、あまりお金はないけど時間があると言いました。だから仙台に来る外国人が道に迷わないように、また英語の話せる医師にかかることが出来るように、地図作りをしていますとおっしゃいました。また、多くの日本の女性が家庭の交換プログラム（ホーム・エクスチェンジ・プログラム）をやっておられるそうです。一人の方は、国際エンゼル協会の、即ちバングラデシュの孤児を養子にするというプログラムの会長をしていらっしゃるとうかがいました。

このように援助を、また愛情を自国以外の人に示すということは素晴らしいと思います。これは選択肢があるということです。日本の人たちはほかの人たちを助けるという選択肢を持っています。私も選択肢を持っています。私たちはみんな、非常に恵まれた人間と言えるのではないでしょうか。ここにいる人たちは自分たちで選択ができるという素晴らしい立場にあるわけです。恵まれた立場にいる私たちは、ほかの人を助ける、あるいは

ほかの人たちのより良い生活を生み出すためのお手伝いをするという責任を負っています。

私は、日本にいるフィリピンの女性に対する援助を訴えたいと思います。５万人ぐらいのフィリピン女性が日本にいると聞いています。時には、日本の警察に捕まることもあります。というのは、非常に脆弱な職業に就いている女性が多いからです。特に今回御出席のＮＧＯの方たちにお願いします。ぜひフィリピンの女性を守ってあげて下さい。フィリピンのエンターテイナーの人たちは全く選択肢がないのです。あなた方や私のように選択することが出来ません。選択の余地を持てないからこそ、この人たちに開発のチャンスを与えてほしいのです。これが皆さんに対するお願いです。どうもありがとうございました。

6. 自立への道程

バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰　馬上　美恵子

開発と女性を考えた時、女性の能力を引き出し、それを社会的にアピールしていくことが、とても大切だと感じています。それでは具体的にどのような活動をして来たのか、発表を進めていきたいと思います。

私はバングラデシュの純農村地帯におきまして、１９８３年から８６年の３年間、青年海外協力隊家政隊員として活動をしてまいりました。その３年間の活動がきっかけになりまして、今現在の仕事に結び付いたというわけです。協力隊というのは技術協力を目的として現地の人と共に活動し、現地の言葉を使ってコミュニケーションをはかるというところに特長のある、政府の機関の海外協力です。私の当時の仕事は、農村開発に関しての指導をし、農業協同組合、特に女性組合の女性組合員を対象に生活改善を目的とし、野菜、家政、畜産隊員と３種の隊員がプロジェクトを組み、活動をいたしました。

それではスライドを見ながら、お話を進めていきたいと思います。

バングラデシュの位置ですが、おそらく皆さんご存知かと思いますけれども確認をしたいと思います。インドに三方囲まれまして、ビルマ、今はミヤンマーですけれども、そこに一部国境を接している国、バングラデシュです。

バングラデシュは８５%がイスラム教徒で、その残りがヒンズー教とキリスト教あるいは仏教徒になります。

これはバングラデシュ全体の地図です。私が活動したジェソール県シャシャ郡というのは、ダッカから西南西３００キロメートル、カルカッタ方面の国境からほんの近い所にあ

りました。純農村地帯の地域です。首都ダッカよりどんどん村の方に３００キロ入っていきますと、すごく茂った木があって、すごく緑が深くて、行く前のイメージとは全然違いました。行く前は貧しいというイメージが非常に強くて、どんな所だろうかといろいろな思いがありました。

実際に村を回り、農村の中で女性組合員を対象とした、生活改善の仕事を与えられたわけです。私達が係った村というのはジェソール県シャシャ郡の中にありまして、ピンクの所が中央ですね、そこにオフィスがあります。村全体が農村で、そこに組合がありまして、その中での活動だったわけです。畜産隊員、野菜隊員、家政隊員と、この３種がそれぞれ関わりを持ちながら活動をしていったわけです。

実際に、どういう問題が起きているんだろうか。どういうことを当たったりしなければいけないんだろうかという具体的な要請は、現地の声としてはほとんどなかったんですね。じゃあ、どんなふうに村がなっているんだろうか、村の中を見ながら探っていくことにしたわけだけれども、村の中を初め見た時には非常に豊かな、のんびりとして、穏やかで、こんな中に本当に問題があるんだろうかと、いろいろな所から疑問が出て来たわけなんです。

ところが実際村を回ってみますと、ある時女の子がお弁当を抱えて歩いていきます。中を見せてもらいました。じゃがいも少しとたくさんの御飯とそれだけのお弁当。これをお父さんに届けるとのことでした。それから村の中を歩きますと、いろんな家族に出くわします。すごく家族が多いんです。子供が多いんです。そしてお父さんもそれからお母さんもいろいろな問題でなかなか現金収入が得られない。さあ、どうやって子供を食べさせようか、どうやって学校へ行かせようか、非常に大きな問題がたくさんあるわけです。

それから火傷のケアの問題です。すごくその状況も悪くて、こういう状態の子供をたくさん見ることができました。

それからこの男の子、１０カ月なんですけれども、衛生状態、栄養状態の悪さから、栄養障害を起こしました。足のリンパがピンポン玉のように腫れ上がって、皮膚が膿んで、

とても悲惨な状態を見ました。

それからこれも皮膚病の一種ですけれども、おそらくこれも栄養状態の悪さから来ているものと思われます。

それから甲状腺腫ですね。これは単にヨード不足からではなくて、全体的な栄養のバランスから来るものです。こういう年配の女性にも見られるし、当然、男性にも見られるわけです。

そこで私たちが接触をした農村女性、組合員、女性たちのリーダーたちに、トレーニング・センターで週１回の集まりを持ちまして、そこでさまざまな角度からいろいろ指導に入っていくわけです。生活改善には、一つには栄養改善の方から入っていく方法、それからもう一つには、現金収入を得る道程、つまり現金収入を得て、それを生活改善に生かしていくという方法があります。その二つの方法から、大きく分けて入っていったわけなんです。それで女性たちにいろいろ専門の分野からトレーニングをして、お話を進めていったわけです。

いろいろな働きかけやトレーニングを受ける経験がなかった女性たちにとって、どうやって楽しくトレーニングを受けてもらおうか、どうやって動機づけをしようかと悩み、ありとあらゆる方法で試みました。これはテストをして、点数をどんどん上げていき、表が上に行けば行くほどがんばっていることを示しています。それから男の人の組合にもいっしょに指導をしていくという試みもしました。

ここで一人、モドザン・ビビさんという女性との出会いがありました。モドザン・ビビという女性は私たちの食事を作ってくれたり、あるいは身近な世話をしてくれる女性だったのですね。ところが、本当にそういう背景の女性ですから、学校に行く機会もなかったし、読み書きもできなかったのですが、ものすごく探究心がある、いろんなことを知って、いろんなことを勉強していきたいという意欲がとてもあった女性なんです。それで最初、私たちの食事を作ってもらっていましたけれども、最終的には農村の女性の栄養改善のリーダーとして、いろんな所に進んで入っていったリーダー的存在の女性なんですね。

ところがこの女性はもちろん結婚していましたから、旦那様もいたし、子供もいた。イスラム教の女性でしたので、旦那さんが余計反対しました。外国人といっしょに活動することを周りの人が何て言うか、あちこち歩き回ったりいろんなことを言うこと、いろんな人から反感を買うんじゃないか、悪いことを言われるんじゃないかといういろんな思いから、このモドザンに、仕事はするんじゃない、うちにいろ、うちのことをしなさい、うちの御飯を作りなさい、子供の世話をしなさいなどと、しょっちゅう言っていました。そしてそれがモドザンに伝わらないと、たまりかねてモドザンを殴ったり、蹴ったり、そういうことがあったんですね。ですけど、モドザンを通して村の女性たちに伝わっていく意味を、彼女自身も知っていましたから、いろんなことがあっても、がんばって、がんばってご主人を説得して、そしてその仕事をやり通したんです。もちろん私もいっしょに旦那さんを説得するように努力しましたけれども、一番努力したのはこのモドザンだったわけなんです。

それから活動が大分定着して行きまして、栄養改善の一つとして、ダイズという作物に注目をしたんですね。これは大豆に限ったことではなくて、活動の一つとして大豆を取り上げただけの話なんですけれども、新しい近代的な作物を取り上げるということでとてもいろんな方の注目もありました。

そこで、イスラム教の社会でありながら、女性グループ、男性グループの意欲のある人、意識のある人、思いのある人を集めて、集中トレーニングをしたんです。いっしょに席を並べて、男性も女性も、組合員以外の意欲のある人も集めて、１５人いっしょにトレーニングをしました。「どんな問題になるかな」、「批判があるかな」、心配はありましたけれども、目的がこうなんだからということを説明してまいりました。ところが、お父さんもお母さんもとっても熱心に話を聞きました。そして大豆に対する問題意識にずうっと没頭して入っていったわけなんです。

野菜隊員は、１日目では大豆を作る方法、大豆の意味、これを説明しました。

それからさらに２日目は「調理実習しましょう」「大豆をどうやって煮るでしょうか」「さあ皆さん、調理の前に手を洗いましょう」手を洗うことから始めていきました。そし

てモドザンがこの時は料理の先生です。モドザンが説明をします。「まず、これを計って、お水を計って、これをこうやってやりますよ」男性たちは女性より先に前に進んで、「なるほど。こういうことか。ほほう」と感心しながら、積極的に参加していることが伺えます。本当に感心している様子です。

それから「じゃあ、実際に皆さん、それぞれ班に分かれて実習しましょう」この時も女性と男性と分かれるのではなく、いっしょのグループで、いっしょに調理実習したわけです。この時は豆乳を作りました。「さあ、こうやって搾るんだよ」、「熱い熱い」とか言いながら、「熱い時にはいつもこうやるのよ」と、女性はいつも調理に係っていますからヒントを出すんですね。「熱い時はちょっとこう冷たいとこ触るのよ」とかね、いろんなことを男性も女性もいろいろ体験し、交換し合うわけです、情報を。

さあ３日目です。皆さん大豆を植えてみましょう。どうやって植えるんでしょう。皆さんはもうキッチン・ガーデンをやっていますから、できますね。いろんなアドバイスを受けながら、やっているわけです。

さあ４日目の集中トレーニングが終わりました。本当に皆さん理解できたんでしょうか。たった３日間という短い間に理解できたんでしょうか。どこがわかって、どこがわからないのか、これはそのためのテストなんです。字が書けない方には口頭で、書ける方にはペーパー・テストで、こちらも根気良く諦めません。わかってもらうまで、説明をします。一生懸命やっています。「人の見てはいけません」「自分で考えて書くんです」

そして１週間後、またトレーニング・ホールに集まってもらいました。そして今度は反省会です。と同時にこれから、村のリーダーが１５人集まったわけですから、この１５人が村に帰って、実際に組合のメンバーたちに、お父さんはお父さんの組合員に、お母さんはお母さんの組合員に指導しなければいけないんです。「さあ、どういう方法で村に帰ってそれを普及しますか」それを一人一人発表してもらっているところです。

それで試験の結果が出ました。さあ、だれが一番だったでしょうか。お父さんたちは「当然、俺たちに決まっているよ。男の方が頭がいいんだから」ところが、結果、女の人

が一番で１００点満点でした。男性たちはびっくりしていました。「へえ、女性ってやるもんだなあ」本当に驚いていました。

それから村回りが始まったわけです。ところがちょうど雨季の真最中になったわけですね。雨季には比較的バングラの人は活動を控えます。雨が降って村回りが困難になります。しかし、私たち協力隊員は与えられた２年、３年の中で、やることをしなければいけない。雨季だからといって休んでいるわけにはいかないので、雨季の真最中でも、２０キロ、２５キロ歩いていきました。もちろんモドザンさんもいっしょです。そして村に行って、皆で調理をして、食べて、植え方を説明して、「さあ、これから皆さんが実際にするんですよ」というところです。

お母さんのグループですね。この時は、大豆をオカラにして、それをオカラボールにしたわけです。

それから、村のお母さんたちは今まで皆さんの前で発表したり、意見するという機会、チャンスがありませんでした。ですから、人前で発表することがとてもへたくそだったんです。ところが、これはいいんだ、これをやっていこうと思ったときに意見をまとめて、人前で自分の料理法として自信を持って発表できるようになったんです。

いろいろお料理が出てきました。ここで大事なことは、私たち日本の文化でお料理をするのではなくて、そこに住む人々の考えや伝統的な料理方法の中で、大豆を教えていくことです。それは私自身が現地の方から学んだことです。全て現地の方のお母さんのアイディアで、現地にある料理の中で大豆を置き換えて作ったものばかり。それを皆が村から持って来て、集めて、展示会をしたところです。

モドザンさんもしっかり皆の前で説明をしています。ですけど、この時はまだ旦那さんとの闘い、今日バットさんがお話していましたけれども、闘いがあったんですね。「行くな」「行く」「やる」「やるな」それがありながら、モドザンさんはしっかり皆の前で活動しているわけなんです。

お父さんも負けていませんね。お母さんががんばっている。それ以上、お父さんもやっています。

このお父さんは自分でお店を持っているんですね、ちっちゃな。そこで、これを売ってお茶菓子といっしょに売りたいという目的があるもんですから、もう必死にやっているところです。

さて、その雨季の真最中です。泥の中、もう膝小僧まで入りながら歩きました。私も初めて、モドザンさんも雨季の真最中、歩くなんてしたことがなかったそうです。もう一生懸命、歩きました。

それから、時々政府の役人、つまり私たちの上司が見に来るんです。役人さんはどちらかというと、村の奥まで入って状況を把握したり、指導するということはあまりしません。上から提供し、資金を出したりする立場なんですね。時々評価に来るんです。いい仕事してるかな。意味のあることをやっているかな。それを村人にインタビューするんですね。「どうだ、やっているか」「いい具合にいっているか」「これは意味のあることか」というようなことで時々、評価に訪れるというわけですね。

ですから、私たちがこの上司の方に、「こうやっていますよ」、「これが問題ですよ」、「こういうことが必要ですよ」、「こうやってほしい」ということを言っていかないと、上の方はわからないんですね。やっぱりお互いにお互いを知っているところから、意見を出し合うことがとても大事だと思いました。

それから大豆ができて、種大豆が穫れて、食用大豆が穫れるようになっています。

そしてモドザンさんに今年の３月に会いにいきました。相変わらず、料理指導も普及員の仕事もがんばってしていました。そしてすごくうれしかったことは、旦那さんが理解したことなんです。モドザンがそういう仕事をする時に、当然、御飯を作る人がいないのですが、なんとそれをご主人さんが、代わってやっていました。そして快く送り出してやるんですね。「おまえ、がんばってやってこい」そして、もう一つ驚いたことはいっしょに

家を造っていた。自分たちのための家を造っていた。以前、あることが問題で自分たちの持っていた土地を手放しちゃったんですね。ある人に売らなきゃならなくなっちゃったことがあったんです。もう８年ぐらい前の話ですけれども。でも、モドザンさんと旦那さんが気持ちを一つにして、がんばって、がんばって現金収入を得ることによって、その手放した土地を、「もともと自分たちのものなんだ」と認識して、取り返すことまで行ってたんですね。そしてお家を造って、そこでまた新たな活動をしたいという意欲的な顔を見ることができました。

それからもう一つ、現金収入の話に触れましたけれども、それも本当に大変な道程でした。現金収入というのはお金を得ることだけが目的ではなかったわけです。お金を得て、それを生活に還元していく、そして、どんな生活改善していこうか考えるようになる。その目的の為、もともと伝統的にあった、伝統刺しゅうに着目をして、現金収入の道作りをして、女性たちの中からリーダーを作って、そのリーダーを中心に活動を進めていったわけなんです。

そのリーダーが、オンジョリ・バシコさんと言って、ヒンズー教の女性なんです。初めて婦人たちの手工芸品を売ってお金になった時、その時の喜びは大変大きなものであると同時に、大きな自信となって私たちに返ってきました。今、手を合わせている方がオンジョリ・バシコさんです。モドザンさんとちょっと場合が違いました。最初からご主人はとても理解がありました。外に出ることもすごく賛成していたし、「がんばれ」って言ってました。そして、現金収入を得ることによって、女性たちまたは女の子たちはそれで学校へ行けるようになりました。

それから、病気の時はどうしようという不安はいつもあったけれども、お金を貯めておくことによって、例え病気になっても、それで薬を買うことができる。とても精神的にも安定感が出てきたわけなんですね。

オンジョリさんはさらに村での女性たちのグループを作って、最初１６人で刺しゅうの仕事を始めましたけれども、今現在では８００人以上に増えています。最初からオンジョリさんの旦那さんは理解がありましたけれども、ある日こんなことがあったんです。「お

まえはいいなあ。いつもダッカに商品を納めに行って、町が見えてゆっくりできていいなあ」と、言ったんですね。するとオンジョリさんは「あなた、何を言うの。私はどんな思いで皆の代表で仕事を持って、ダッカへ行ってお金を持って来るか、その大変なこと、あなたはわかっていない。それだったら、あなた、私といっしょにダッカへいらっしゃい」と言ったんですね。そうしたら旦那さんが「よおし、じゃ行ってやろうじゃないか」ということで、２人でダッカに行きました。

オンジョリさんはナイト・コーチ（夜行バス）で１日かかってやっとダッカに出て、休む暇もなく製品を納めて、「しみがあるじゃないの、糸の始末が悪いじゃないの、こんなのでは売れないわよ、直しなさい」そう言われて、１００枚納めた商品が全部返って来てしまうんです。そしてもう眠る暇もなく一晩中一生懸命直すんですね。そうすると旦那さんがそれを脇で見ていて、「ああ、おまえの仕事はやっぱり大変だったね。すまなかった」と言ったそうです。それからオンジョリさんに対する旦那さんの支援はいろんな面で多くなったそうです。今は仕事を納める前にオンジョリさんが苦労しなくて済むように、きちんとチェックをするそうです。そして一つ一つアドバイスをして、製品のチェックを進めています。

これは去年の写真です。オンジョリさんはますますいろんなことを考えながら、本当に現金を必要としている女性たちに、もっと仕事を広げたいんだという思いを込めて、ますます顔は鋭くなって皆に平等に仕事が与えられるように努力していました。

これは今年行った時の話です。長くやればいろんな問題が起きて来るんです。その問題に一つ一つに応えます。私も訪ねる度に、私の立場からアドバイスをするなり、方法を提供します。そして共に考えながら、「さらにいい方向にしていこうね」と努力をしています。

私が３年間係ったことが今現在の仕事に基づいていると言いましたけれども、日本・バングラデシュ文化交流会ロシュンというのはそういう私たちの見てきた現地のお母さんのがんばりや努力を紹介し、そして私たちがどういう係りをすれば、共通テーマが見つけられるのかな、どういうふうにすればいい方向に行けるのかな、あるいはもっと身近なとこ

ろでバングラデシュのことを、開発途上国の人々の生活を伝えられるんじゃないだろうかということで、これはお料理を通して、日本のお母さんお父さんにバングラデシュの文化を説明している写真なんです。更にベンガル語を通して、あるいは講演会を通して、あるいはナチュラルファーム体験セミナーを通して、日本の多くの方々に知ってもらいたいという思いで始めた会なんです。

いろいろお料理を紹介しているところです。

はい、じゃあ電気をつけてください。

私の３年間の活動で、ものすごくポイントとして思ったことは、モドザンという女性は本当に草の根レベルの人です。偉い人でも何でもない、もともとリーダーでも何でもない、本当に普通のおばちゃんだったんですね。そのおばちゃんが努力して、生活改善を自分のこととして受け止めてやろうと思えば、男の人の前に立って指導もできる、それからご主人に対する理解を求める努力を惜しまず続けてきたことで旦那さんの理解も得た。それから、地域から一目置かれるリーダーにもなった。ですから、夫の理解を得ること、努力してやることがすごく大事だということを感じたんです。そしてオンジョリさんはオンジョリさんで、ヒンズー教という立場の中で旦那さんの理解はあったけれども、さらに理解を深めた。ですから、これらの活動はどうしても男の人、男性との関わり・協力がなければできないことだったんですね。

そしてもう一つ言いたいことは、私たちが私たち日本人の立場でこれから係っていく場合に、もっともっと身近に係れる具体的なことを積極的に見つけて、実行していくべきだということです。だけど私たち日本人はすぐに「何ができるか、何ができるか」そればっかりに捉われて、「あっ、だめだ」ってなっちゃうんですね。もっと、積極的に具体的なところから進めて行かれるといいと思うんです。ただ単に「何ができるか」、「何ができるだろうか」という受け身的に、消極的になるということではなくて、まず現実を知ってから、前進するためにどういう具体的な行動に移していくか、そこにこれからの大きな係りの価値があるんじゃないかと私は思います。

私は生活改善の指導でバングラへ行きましたけれども、いろんな所でバングラデシュの人々から教わることがものすごく多くて、もう逆にいろんな刺激を受けまして、生きることはどんなことなんだろうかと、一生懸命考えながらやっている毎日なんです。

きのう皆さんとお話をしました夜、ある方が私にとてもいい質問をしてくれました。「馬上さん、あなたにとってバングラデシュって何なんですか。あなたをそこまで深く考えるに至らせたのは、いったい何なんですか」と非常に熱心に質問してくださいました。私がしつこいくらいに、バングラ、バングラという理由は今お話した中に全部含まれていることなんですね。

以上です。ありがとうございました。

NATIONAL FORUM ON INTERCULTURAL EXCHANGE

Extract from its proceedings

October 29-30, 1991

NATIONAL WOMEN'S EDUCATION CENTRE

JAPAN

BEST COPY AVAILABLE

Foreword

The National Women's Education Centre held its International Forum on Intercultural Exchange on October 29 and 30, 1991 on the theme "Women in Development: towards global networking." The purpose of the Forum was twofold: to undertake internationally a broad exchange of views on socio-economic development, focussing on the present condition of women, their role and their perspectives; and to conduct detailed discussion on international cooperation reflecting women's solidarity on a global level.

The following are extracts from the proceedings at the Forum, including the chairperson's address and the presentations by the six experts in Sessions I and II. Having been prepared from transcriptions of the original taped recordings of the speeches and their simultaneously rendered interpretation, it will be understood that the Japanese and Engligh versions may not always exactly correspond.

March 1992

CONTENTS

< Address by Chairperson > ---------------------------------- 81
Dr. Yoriko MEGURO,
Professor, Sophia University

< Session I: Approaches to 'Women in Development' > ------------- 87
1. Theoretical approaches to understanding the relative positions of women and men in societies undergoing rapid social change ------------------------------------- 89
Dr. Kate YOUNG,
Executive Director, WOMANKIND
2. Rural women: partners in development --------------------- 102
Ms. Alexandra STEPHENS,
Women in Development Officer,
FAO Regional Office for Asia and the Pacific
3. Japan's approach to 'Women in Development' - From the viewpoint of cultural anthropology - ------------ 115
Ms. Kyoko KIKUCHI,
Associate Professor, Tsuda College

< Session II: Field Report on 'Women in Development' > ---------- 125
4. SEWA experience -------------------------------------- 127
Ms. Ela Ramesh BHATT,
General Secretary,
Self Employed Women's Association (SEWA)
5. Women in the bureaucracy: The Philippine case ----------- 140
Ms. Patricia A. Sto. TOMAS,
Chairman,
Civil Service Commission (CSC)
6. The path to independence ----------------------------- 154
Ms. Mieko MAGAMI,
Organizer,
Comprehensive Cultural Exchange Programmes between Japan and Bangladesh

Address

by Chairperson

BEST COPY AVAILABLE

ADDRESS BY CHAIRPERSON

Dr. Yoriko MEGURO
Professor
Sophia University

Thank you very much for the introduction. Since this concept of WID or Women In Development is still only about to burge on in Japan, I would like to take this opportunity as the chairperson's remarks to give you the general background of the concept called Women In Development.

Ordinary citizens began to show their interest in international assistance and exchanges around the time when the so-called Internationalization of Japan became a slogan emphasizing the aspect of human exchange rather than the flow of goods and services. Particularly the outbreak of the Gulf Crisis in the summer of 1990 has made the issue of Japan's contribution to the global community a dinner-table topic. Japan's position vis a vis the rest of the world and Japan's contribution in the form of international assistance has become a topic for everyday conversation.

ODA, or Official Development Assistance, has not been linked to WID in the past. Overseas NGO representatives have been critical of Japan's ODA policy and so have been the Japanese NGOs which have experiences in developing countries. When the notion of WID was introduced to the Japanese public, it readily arouse the interest of those concerned though small in number.

Now, the area of international assistance has paid attention to WID since about twenty years ago and has also stimulated various events and activities based on acknowledgement or recognition of the importance of the concept of WID. There were two lines of committment to WID: one, by the Committee on the Status of Women at the U.N., two, the Development Assistance Committee of OECD.

At the United Nations, with the increased participation or membership of the developing countries, there was an increasing interest in the relationship between national development and women. Member nations began to share the notion that poverty was to be eliminated in order to enhance the status of women.

The interim meeting of the U.N. Decade for Women, held in 1980, was the beginning of the third U.N. Decade for Development and women became the target of attention. In the final year of the U.N. Decade for Women, the third World Conference was held in Nairobi where they proposed the Forward Looking Strategies. It pointed out that despite development assistance efforts women's status has not been enhanced and it urged to include political, social, and cultural as well as economic dimensions in the concept of development. Thus an alternative development was to be sought.

As for DAC, they began to deliberate on WID in the 1970s, and in 1984, formed its own committee on WID and in 1985 with the Forward Looking Strategy, DAC too began to establish its own policies for the future and work towards various administrative streamlining as well as supportive measures in line with WID. Japan is a major member of DAC but neither has as yet made any guidelines for WID, nor has made much administrative efforts. It was only recently that Japan International Cooperation Agency organized a research committee on WID, which presented a recommendation report to JICA. This, in fact, was the first step forward Japan's national committment to WID.

Seventy-seven percent of the world population, or 4.1 billion live in developing countries, and more than a half of them are women. Therefore we cannot think of development without a consideration for women. Although there has been a mounting interest in the role women play in development, it was recognized at the 1985 Nairobi World Conference that the awareness or the consciousness about women's issues had risen but that women's situations remained the same or worsened.

The needs and the situation of women of course vary depending on the political, economic, social, and cultural systems of each country, and on the social class, the geographical location and the occupation within a country. Although there is a great deal of development assistance in terms of quantity, women's situations remained poor. It is because the needs of women were not very well grasped and also because women were not incorporated in the development plans and programs.

The past development theory was based on the idea that when a pie became bigger, all parts of a society would have a chance of sharing it. This theory no longer was found tenable and was reviewed in the 1970s. The modified theory was still gender-blind, bringing about a higher concentration of poverty on women and increasing dependency of women on men.

Women were considered marginal and never in the mainstream like men in various development programs. Development based on such programs have resulted in environmental problems, poverty, and population explosion which are all on the global scale and which women are sharing the major burdens. Women, therefore, do not make up a separate area or a field but rather a key concept cross-cutting other areas such as the environment, poverty and the population. WID is a perspective viewing women not only as the recipient of the fruit of development but also as a full participant in development processes, supporting women to become independent decision-makers on their own lives, aiming at the empowerment of women.

During the International Decade of Women, we may say that both the Japanese government and the NGOs have worked on Equality, not so much on Peace and Development. There was a sudden uprise in the interest in Development since last year, and a new section on

WID was added in the New National Plan of Action. There are some local governments and NGOs working actively on this theme now.

Why are we so suddenly interested in this theme of Women In Development? It is because equality and development share the same root and this perception is shared by many women. It is also because many women have come to form global networks in solving various problems in the past 15 years.

It is a fact, however, that the majority of women in Japan are not really interested in Women In Development. In the two-day discussion I really hope to deepen understanding about Women In Development and thus make our efforts toward further global networking. This is the very reason why I am here today and I am sure this is also the reason why you are here today. Thank you very much.

[Session I]

Approaches to 'Women in Development'

BEST COPY AVAILABLE

1. THEORETICAL APPROACHES TO UNDERSTANDING THE RELATIVE POSITIONS OF WOMEN AND MEN IN SOCIETIES UNDERGOING RAPID SOCIAL CHANGE.

Dr. Kate YOUNG
Executive Director
WOMANKIND

Thank you very much for inviting me to this International Forum. As Dr. Meguro said, the study of women and development is now over two decades old. The literature is enormous and the approaches numerous, so a great deal of simplification will be required for this session which is only to last thirty minutes. Roughly speaking we can see three distinct approaches to the problematic of women within rapid social change.

The first and best known is the one mentioned by Dr. Meguro which is Women in Development, otherwise known as WID. Initially, this perspective started from the premise that women were not benefitting from development because their contributions were being ignored and their concerns left out of the development process. In large measure, the ignorance was about their economic roles.

It was argued that women were treated by the almost entirely male development fraternity as if they were only housewives. In charge of family welfare, of cooking and childcare and so on, but not involved in economic activities such as farming, trading, fishing, making handicrafts and so on. And yet in reality, women in most developing countries were farmers, fishermen, handicraft producers as well as mothers and carers. The WID activists argued that in order to overcome the problem much more information was heeded. That the neglect of women was due to lack of understanding on the male planners part and if they learned about what women did, then automatically women would be included. And indeed numerous studies did show not only the extent of women's involvement in the rural and urban economy, but also the importance to family survival of women's economic contributions.

The studies also showed the extent of the difference between men and women's activities, how the sexual division of labor was an important economic operator. It allocated different tasks to men and to women. And although this allocation differed from country to country, in fact, and in some countries men did what in other countries women did, in almost all cultures, studies showed that men had overall control of production because they owned and controlled the main means of production, and by that I mean land in most rural situations. They also had major control over the allocation of labor, including women's labor, and lastly they had the major control over the benefits of production, and particularly with the development of a cash economy, it was men who largely controlled the cash.

It also became very clear from these studies that men and women have different priorities in how they allocate time, labor and the benefits of production. Men prefer to work on forms of production which give them a cash return, that they seek out forms of income generation which give them rewards to heightened productivity. Lastly students showed that men had a clear sense that what they earned did not belong to the family, but that they had unrestricted rights to their earnings. In other words, they used much of their wage or the cash they earned for personal benefit.

Men's pattern of work was also different from that of women. Men's work pattern tends to be unbroken by other responsibilities, and certainly in the agricultural sector, it was often seasonal, allowing men long and uninterrupted periods of rest and relaxation, particularly for example in the growing season or the rainy season.

Women's work schedules were different. All economic activities were fitted around an already very heavy schedule of domestic work considered by economists as non-work. In other words, fetching wood and water, processing and cooking, caring for children and adult males, caring for the sick and the elderly, cleaning and repairing. In addition to domestic work, women often had an obligation to work in their husband's fields when he required such work.

Lastly, women had their own economic activities. In many areas they grew crops, in the literature frequently referred to as gardening rather than farming. They cared for livestock. They processed crops for the market, spun and wove cloth, made household utensils, and were traders, handicraft makers and so on. Their annual pattern of activity differed markedly from men's in that their daily level of activity was always higher - they got up earlier and went to bed later. It was more constant, with a much higher level of activity throughout the year and no periods of extended relaxation or rest because domestic chores, unlike agricultural chores, have no seasonal offpeaks.

Lastly, when women earned cash, in those cases when they weren't obliged to hand it over to the head of the family, they spent most of it on the family. It is quite rare to find in the literature that women appropriate a large amount of their earnings for personal benefit.

These studies in sum show that development, that is the development of a modern economy, had largely benefitted men. That is to say, it was men who got the agricultural training, the better tools, improved seeds, the right to get credit to buy hand pumps, dig wells or buy tractors.

Women, if they got any attention at all, were taught how to be better mothers, how to be more efficient cooks and nutritionists. Often the home economist instructors didn't question where the women were to get the better food from. Increasingly, of course, women were urged to limit their family size by using contraception. Women didn't get improved tools or agricultural extension or access to credit because development practitioners concentrated on their domestic responsibilities, ignoring all too often how very burdensome domestic responsibilities are, and what heavy work they entailed.

Development practitioners held a view of the family in which the head of the family - a male - was the economic provider; he was ably, and willingly of course, supported by the female who looked after the children and whose main responsibility was family welfare. The children themselves were non-workers as well. Now, this picture of this ideal family in most cases was entirely erroneous.

Viewing women as domestic creatures had particularly dreadful effects in sub-Saharan Africa, where women in most cultures were considered to be and had traditionally been considered to be independent economic actors and who, even when married, were expected to maintain their own children through their economic activities. In sub-Saharan Africa, polygyny, that is having multiple wives, is quite widespread and a man's chief responsibility is for the welfare of his lineage or clan and not necessarily his children. Indeed, the concept of child is often much wider than we are used to, meaning any young member of the lineage.

When undertaking development projects, WID activists argued that what planners should do was to ascertain the allocation of tasks by the sexual division of labor and to ensure that whatever the development project was going to do, it would neither increase women's burden of work, without giving them reward for that work, nor downgrade their status as economic actors while giving men greater access to resources.

The expectation that women would put in extra 'free' labor into development projects was very common and largely sprang from development practitioners' belief that women had time on their hands. Practitioners also believed that men as farming heads should have the ultimate responsibility for disposing of the resources generated by the development projects.

WID activists argued and remonstrated and found eventually that the best way to get resources to women was through funds for women focused projects. These funds of course, were very very small as a total percentage of the funding going into development, but nonetheless they often enabled women to get into income-generating activities. It was felt that access to cash, even very small amounts, was what women most needed. WID activists also demanded that women be brought into all levels of decision-making so that women's voices and concerns be central to development planning.

The WID approach then was to help women in practical ways when it was possible and to urge development practitioners and planners to take awareness of women's vital econimc contribution to society. They urged statisticians and planners actively to seek more data on women, to ask about women's economic activities in national censuses and household surveys, and they even began to demand that economists take into account women's domestic work, arguing that it was in itself a contribution to the welfare of society. Indeed, this last point about domestic work and the enormous amount of women's labor that goes into reproducing the next generation has been taken up by one of the major U.N. agencies, UNDP, argues that development must in fact be thought of as the development of human capacity. As such any process of development must benefit and enlarge and enhance human capacity, not merely the physical and material structures of the economy, for example, factories, roads, and railways.

Now while WID was being developed and fought for, a second perspective was also being developed and this perspective is known as the Gender and Development (GAD) perspective. It started from the premise that women are not neglected by development planners, but that women and their work from the outset had been built into development thinking but that the role assigned to women was one that was subordinate to that of men. As a result, it was necessary to focus not only on women, but to make a comparative analysis of the ways in which the modernization of economies was strengthening or weakening the social, economic, and political position of women as against men.

In the Gender and Development perspective, the relationship between men and women has historically been one characterized by both cooperation and conflict. One in which men on the whole, strive to have women as their helpmates, but not their equals, and strive to ensure that most of the day to day ephemera of life are taken care of by someone else - woman.

Gender and Development proponents viewed the social and economic changes introduced by modernization, as being in the long run inimical to women, that is for the vast majority of women. It was well understood, of course, that some women would benefit from the modernization process. This because the form of development being proposed was based on an acceptance that social classes would benefit unequally, although it was always proposed that individuals through effort and merit could themselves rise through the system.

From the outset, the GAD proponents argued that the division in economics between productive and non-productive work and the social value given to productive work as against the lack of value accorded to private work, that is personal or familial, and the work of reproduction, bringing up and caring for human beings, was a division that actually replicated the division between men's world and women's world. Men's world, the world of the public, of production, of politics. Women's world the private world of the family, of caring for children and so on. And that economics has accepted a culturally specific way of doing things, elevated it to a discipline, claiming that this is a universal pattern, unchanging and changeless.

So in order to understand how development was or was not affecting women and men or how women and men responded to the development process, one had to look not just at what was happening in the economic sphere, but one had to understand what was happening in the sphere of reproduction as well, the sphere of the family. And the argument was that concentrating on women's economic activities, denied women's major contribution to society. And this contribution was not merely to family wellbeing, but also to community welfare.

Ignoring this double burden of women, led to women being further overburdened even by those who wished to benefit women by pointing to their economic contribution and trying to support and stress that contribution. Now one of the main points of the GAD perspective is that it sees the sexual division of labor not only as a division between men and women, the allocation of separate tasks, but a form of connection between them. Through it, men and women are woven into a web of interdependence, but on certain terms.

By producing different things, men and women are made dependent on each other and have to cooperate with each other. The terms of cooperation however, are ones which are built into not only the contract that is established between individual men and women in the family, but also within the wider social sphere. And this contract of interdependence is negotiated, is culturally created and understood, but it is also negotiated and modified by each generation.

From this perspective then, the question of getting more data on women, or getting more statistics on women is not the key question. The key question is how we conceptualized that work and how we think about that work, and what value we give to that work.

I hope it has become clear then, that the GAD perspective is one in which the politics of the relationship between men and women is a very central question. Now this power relation between men and women is seen to be on a par with but not reduceable to the set of relations between the social classes. It is a relationship expressed both in private and in public, that is a relationship whic is expressed within the family and within the community and within the state.

In order to understand the relationship of difference and why development and the modernization of economies tends to harm women, you have to understand the relation of power between women and men at all those levels of society, not merely the personal level, but the state level as well and that means that you have to make an inquiry into the structures of the state.

GAD, I think one could say fairly, questioned much more the aims of development as well as the processes of development than did the WID. As such, it was not approved of at all by the development fraternity and was very largely ignored. It remained much more an academic, critical inquiry than WID which has been much more adopted by the development agencies.

The third approach is what is called Women and Development. I know the difference between 'women in' and 'women and,' appears small but nonetheless the distinction is important. The WAD approach has been largely promoted by a quite well-known group of women from developing countries called the Dawn Group. The approach takes elements from both WID & GAD and questions elements within both. The major difference is that it places a great deal more emphasis on the inequality between nations, between those of the North and the South, and argues that positive development for women can only come about when power differentials between nations are eradicated.

I am being very brief on this point because I know I have not very much more time. Since the late sixties, early seventies when the Women In Development and the Gender And Development approaches were being developed, there has been a much closer, a much greater approximation between the three perspectives. I would say nowadays, certainly all three perspectives are united in their wish to see a more equal society as between men and women. I think all perspectives are questioning development although the questioning is more profound and critical in the Gender and Development and the Women and Development than in the Women in Development approach. And of course, everybody nowadays is searching for the magical formula for sustainable development.

Nonetheless, I think one could still argue that for WID the question remains how to get women greater access to resources that the development offers, how to get them access to training, to credit, to information and so on. How to get them access to land and valued social resources. For GAD, the question of how you produce a society where inequalities between the classes is not a critical variable is crucial because as long as differences between classes exist you will continue to have differences between the genders. For WAD, the question is how to get a redistribution of resources at the global level to the poorer countries.

Within all three approaches there is a debate about how best to support women and ensure that women's views are going to be represented at international and national levels. The debate centres on the concept of empowerment. One of the very great difficulties in this field now is what I call the appropriation of language, critical language, what might be called feminist language. Over the past decade there has been a very great appropriation of that language, such that everyone now uses the word gender although they mean sex most of the time or women. Everybody talks about the empowerment of women yet the meaning given to empowerment varies considerably.

For many, and I would include here the World Bank and most of the official aid agencies, empowerment is giving people, especially women, the responsibility to achieve individual advancement. The language used by many of these agencies is very reminiscent of the language of early entrepreneurial capitalism. Self-help. Pulling oneself up by one's bootstraps. The individual using all the creative and entrepreneurial skills at her disposition for her own betterment. There is little discussion in this discourse about making demands on the state and society or recognition either by the state or society of women's critical role in the reproduction of the future generations.

For others, and I would include here women's groups and feminist activists, the importance of empowerment is that it is collective. That women, particularly those who are poor and socially undervalued, should be supported in such a way that they can gain both individual self-esteem and self-worth and collective strength. And that this collective strength will grow from having examined the present state of things and discussed a range of alternatives and come to an agreement about the ways of going forward. It is not a method of working in which everything is pre-determined, but rather, in the process of collective strengthening of women, there will always be space for reflection, respect for reflection, and respect for the need to change; to change opinions and to revise strategies.

Now, by the collective empowerment of women I don't mean to suggest that there should never be any individual women who rise to positions of power. Of course, we should support as best we can women striving to become members of Parliament, members of the government, high court judges or even bishops. But it does mean that those individual women have to be accountable to a larger body of women, whether those women are organized or not. It also means that the views of women in their variety and distintiveness should form a central part of any way forward, any thinking about what the future might contain, about the course of development of a country or indeed of the world as a whole, because we have to recognized that in this late Twentieth Century, individual countries are of lesser importance and regional groupings and indeed international groupings are of ever greater importance.

The empowerment of women of course, it is easy to talk about and extremely difficult to achieve. Why? Because of course women are not the same. We are not unified. We do not have a single theory about why we are in a subordinate position in our societies. We are divided, as men are, by race, by caste, by class, by religion. But I think one of the key elements of any strategy of empowering women is to recognize and respect difference.

Now there is a rather fashionable current consensus about the way how we should work on women's issues. There is a distinction made between women's practical needs, or interests, and their strategic interests. These practical needs are thought to arise from the day to day working of the sexual division of labor and women's socialization into and acceptance of certain activities, economic or social. For example, mothering, wifeing, wifeing isn't really a word in English, but being a wife is something we spend a great deal of time thinking about and doing and trying to do well. We also spend a great deal of time as I said before, on holding the community together and of course on economic activity to earn an income for our families.

Now in most developing countries, any development practitioner will tell you that if you ask a woman what she needs, she will tell you at once. It is not that women don't know what they need, they need water, better tools, training in how to mend and maintain pumps, stoves, grinding tools, they need credit, they need access to land, they need knowledge about the wider society. These are all very very easy to discover. These are what we would call women's practical needs.

But when we start asking about strategic needs, it requires a different way of thinking. It also requires getting to know the women very well; then they will talk about their powerlessness, their fear of male violence, their frustration at not being listened to, their anger at having to bring into the world yet another child when they can't even care for the ones they've got. But powerlessness, lack of control over our bodies, the silencing of our views, these are the bedrock of women's strategic interests.

But they are not interests that spontaneously come to mind and they are not that easy to get women to fight for as a collectivity, precisely because we are as divided by our differences as we are united by our similiarities.

In thinking then, about strategies of empowerment and how to struggle for women's strategic interests, we have the very difficult task of recognizing the challenge, and accepting the challenge that we are different. That, because of our cultures, because of our religions, our races and so on, even because of our ages, we have different perspectives and different priorities. And yet we have to accept the challenge of finding through this field of difference a path which will allow us to respect difference, but find commonalities that we can work on together and to create a vision which we can hold on to, which enables us to create partnership among women as much as partnership between men and women.

This is a task which is most challenging for those of us who are educated. Partly because we share some of the power of our male colleagues, either because of our class or because of our achieved status, it is difficult to recognize that power is something that must be seen as a responsibility, not as a right. This requires that we ourselves must change and transform ourselves. That we have to challenge our own attitudes and even question our own values, and that we certainly rid ourselves of attitudes and values which permit us to watch other women who live in poverty and powerlessness without moving to work with them and for them.

So those starting to study women and development have to recognize that there are different perspectives, which put different emphasis on certain aspects of the economy or society. But, for those who have women's interests at all at heart and in common, the importance of meetings such as these, of international networking, is not to come to a false consensus of solidarity and agreement, but to a true recognition of difference and yet commonality.

Thank you very much.

2. RURAL WOMEN:
PARTNERS IN DEVELOPMENT

Ms. Alexandra STEPHENS
Women in Development Officer
FAO Regional Office for Asia
and the Pacific

Thank you very much. I would like to thank NWEC for the opportunity to come and speak to you all today, and for the wonderful arrangements that have been made for us as guests in Japan.

My topic on rural women is based more on practice than on academic situations. I graduated from a university, but I have not worked in academic circles. I have had 24 years of working in developing countries in the South Pacific, in Africa and in Asia, so what I say will emmanate more from what I have learned from that experience.

The Population Crisis Committee in Washington, D.C. in the U.S.A. compiled statistics about women worldwide, and after analyzing those statistics, they described women as poor, powerless and pregnant. In Asia and the Pacific, where I now work, based in Bangkok, we have seen tremendous success in food production, but at the same time we have seen tremendous growth in poverty.

Asian countries are mostly self-sufficient in rice and wheat, but they are home to 400 million malnourished people and 700 million people live below the poverty line. When we look at women's share of the world as a whole, if you would take a look at the chart on my right, your left, women's share of the world was analyzed for

98

the U.N. Decade for Women.

They form about half the population of the world, but they work about three quarters of the work hours, because they take care of children, they fetch and carry water, they clean the house, they take care of livestock, they care for sick people and old people. And all this work, is not given any economic value by economists, nor is it reflected in the statistics that we analyze when we look at the role of Women in Development.

In terms of world income, women earn only about ten percent of the world's income from the formal sector. And in terms of property they own in their own name, about one percent. The World Bank and the IMF have recently conducted their global meeting in Bangkok, and they continue to urge what they call "structural readjustment", on developing countries - structural readjustment in the face of huge debts that developing countries have been running up in recent years. And there are many countries such as the Philippines where forty percent of their gross national budget is spent simply on servicing the debt that they owe.

So when the World Bank, and when the developed countries like mine and yours, urge countries to undertake structural readjustment, the governments of the developing countries have to cut spending, and the places where they cut are the places that affect women most. They cut social services. They cut education. They cut health. And these have very serious impacts on women.

At the same time, many countries are suffering environmental degradation and rural women who have to grow the food for their families are finding it more and more difficult to cultivate sufficient food on the small areas of land that they control. In Asia particularly, there is a land crisis because of the numbers of people trying to live off the land. And it looks as if it is going to get a lot worse in the countries that are already the poorest.

The countries that are the poorest in Asia and the Pacific, as in Africa, are often the ones with the highest birthrate. I was recently in Iran. The population growth rate is over 4 percent per year. Pakistan is 3.8 percent per year. And many of the poorest countries still have growth rates of over 3 percent per year.

If you take a look at the second picture on the board, you will see the difference in population structure between a developed country like yours, like Japan, and a developing country such as India, Sri Lanka, Bangladesh, the Philippines or Thailand. Where in developing countries birthrates are high in general, so the red colour at the bottom shows the tremendous number, the base, of young people under 15 years of age. The red color represents the numbers of children under 15.

In an industrialized country like Japan or Sweden, the children born are so few, in fact far less than before and getting smaller and smaller year by year. Some countries like mine, which is New Zealand, are not even replacing its population. The population is a negative growth. In the blue color you see the youth, aged 15 to 24 years old and again you see the difference between the industrialized countries and the developing countries. A lot of young people coming every year out of schools, out of colleges into the workforce. No jobs. In industrialized countries, in many of the industrialized countries the numbers are actually declining and in some, labour is even in short supply. You cannot get people for all the jobs that you have.

On the other hand, and I didn't have a chance to make a poster to show this, but last night I used the beautiful envelope that I was given from NWEC, to show you (is it visible?). This paper shows the agricultural population. In fact I can just tell you, if you can't see it doesn't matter very much. But the industrialized countries in 1950, had about 315 million people dependent on agriculture for their livelihood. By the year 2025, that number will have declined to 29 million. And yet the productivity will remain very high. As these countries mechanize and as they use new biotechnologies to produce agricultural products with highly intensive forms of agriculture, such as you have in Japan, you can have fewer people working in agriculture with tremendous production.

So you may say, this is a model for the developing countries, but it cannot be for many reasons. In the developing countries, the opposite is going to happen. In 1950, they had about 1,312 million people dependent on agriculture for their livelihood, and by the year 2025, this number will almost double to 2,460 million people. And in this part of the world, in Asia, there is no more land. So this doubled number of farming people is going to have to farm on the same amount of land. And we already have in Asia, tremendous problems of soil degradation, soils that are being over-utilized without proper farming practices to preserve the soil fertility.

Women growing food for their families are unable to increase productivity on this land without a lot of help. And yet they don't get that help. In Asia, about forty percent of the farmers are women, and year by year the number is increasing because agriculture is not an attractive career for young men. It is the lowest paid sector in a country like Thailand. And it is boring. It's hard work, and it is poorly remunerated.

So the result is, in Korea it is already happened, the men have gone to industry or the service sector and the women are left on the farms. There is no more land to expand and in the agricultural extension services there are very, very few women available to provide services, information, all the things that women need to improve their farming, and in many countries cannot get because they are not allowed to approach male extension workers.

Only 0.7 percent of the agricultural extension workers in Asia are women. So there is a big problem for women as farmers. They don't know how to improve their practices. They have limited access to agricultural colleges. Many countries still have a very small percentage or quota for women. In Papua New Guinea where women do 90 percent of the agriculture, they only allow 10 percent of the students to be female in the agricultural colleges. In Thailand last year, in the veterinarian college, the top ten places were taken by women and the government said 'this is no good, we have to limit the number of women coming in' and they put a quota now. Only five percent of the students coming in to the faculty of veterinary science are allowed to be women, so that this doesn't happen again.

Now another big problem, there are a lot of policies being made to address the problems facing agriculture in the world today. But women are not there in the fora where the decisions and the policies are made. And women farmers are not recognized as farmers. People normally talk about the "farmer and his wife". In fact, it should be the farmer and her husband, in many cases. So women's issues in agriculture are still not being articulated in the fora where policies are made.

If you look at the third chart there, if you can see it, I think it is rather small, but it illustrates that in the world's parliaments, 9.7 percent of members of the world's parliaments are women. Less than 10 percent are women. But if you look down below that, at the band of yellow, you will see that for the Asia and Pacific region, the numbers of women at ministerial level is the smallest in the world, 1.6 percent. Africa has more. Latin America has more. Europe has more. The Soviet and Socialist countries have more. Asia is very slow to bring women into those top policy and decision making bodies. It is the same in the private sector. If you look at corporations, women are not there, in the managerial positions.

So the issues in agriculture that affect women are simply not being addressed at the top levels and yet women are coming into agriculture in larger and larger numbers. I believe in Japan it is the same. You have more women farmers today than ten years ago. The proportion of men leaving agriculture is higher, and women are being left to manage the farms.

One of the big problems in policy making is attitudes, and that has already been mentioned by, I think, Dr. Young, but anyway, as you must know, laws, legislation itself doesn't change the situation of women. And men's attitudes in Asia particularly, lag behind changes in policy. They are very reluctant to let women come into the active decision making process.

Now in the rural areas of Asia, women's work day is very long and we have been monitoring it in the last ten years, and we find that year by year it is increasing. The chart on the left, the red color, shows that the average man, and this is a selection of some countries in Southeast Asia, it is not representative of the whole region, but we found men work an average of 49 hours a week and rural women in the same households, work an average of 61 hours per week. This would not count all the childcare because childcare can be a 24-hour job. But in work, as defined by the ILO, the International Labor Organization, women are working a much longer week. In the Republic of Korea, rural women are now claiming that their work burden has become intolerable. It is too long, and they say they can't manage it. They have no leisure time.

If you look at the next picture, you will see the difference in another situation where women are leaving the household and going into fulltime employment. And this is also something that is happpening in every Asian country, African country, everywhere in the world. Women who are housewives, have about 33 percent of the time per day as their own. Women with a job outside the home have about 24 percent and a man with a job has about 34 percent.

But the interesting part of those three circles, I think, is the red color, because a woman who is a housewife spends about 66 percent of her time on unpaid work. The red color represents unpaid work. Whereas a woman with a job comes home after spending 40 percent of her time at work, comes home and proceeds to spend another 31 percent doing work in the house. And at the bottom, the man with the job comes home and spends only 11 percent of his time doing work in the house.

And I have carried out studies in China, both in Tibet and in some provinces of China, where this is exactly the pattern and the women were claiming that their workday has also become unbearably long. No matter how much the Chinese government has campaigned for men to do more housework, they are refusing to do it. There has been almost no change since the Communist Revolution of 1949, in the amount of housework men do. The Soviet government tried the same kind of campaign. The Vietnames tried the same campaign. The results are the same. It seems to be something men are extremely reluctant...nobody wants to give up privilege. How do we make them do it? We have to wrest privilege away from them, somehow.

Women's wages are always less than men's, even in countries where you have equal pay legislation. It is very easy to find loopholes in the legislation. Piecework, what women do at home, is often paid "peanuts", as we say in English. They get so little money it is like throwing peanuts to a chimpanzee. And women are not organized. Tomorrow you will hear from Mrs. Ela Bhatt, about how she has been organizing women. I believe she has a key to solving some of these problems.

But in general still, in most countries I have worked in, rural women are not organized, and they are willing to take any kind of work just to get a little more money to meet their family's needs. We did an interesting study in Nepal. It was called 'business development' for the men, but 'income generating activities' for the women. It is the same situation as men being farmers or agriculturalists and women being gardeners.

But anyway, the idea was that both men and women would be given the chance to earn more money, to help the poorest of the poor families. And we found that women in Nepal spent 80 percent of the extra money to meet the needs of their family, whereas the men spent 20 percent of the extra money for the family, and 80 percent on themselves.

Another point I would like to make is that the gap between the rich and the poor is increasing in a very worrying way. It is increasing between the rich countries and the developing countries, and it is increasing within developing countries as the rich élite command more resources, and get more control over the factors of production, and over the poorest in those countries. I can again show you (if you can see this).

In 1976, in Thailand, the top 20 percent of the population earned 49.3 percent of the national income, whereas the lowest 20 percent earned 6.1 percent of the national income. By 1989, that gap had widened so that the highest 20 percent now have 55 percent of the national income and the poorest have declined to 4.5 percent. This pattern is for Thailand. We can see exactly same thing in almost every country in the world. In New Zealand as well. And how far can this gap be allowed to go on growing? And who is the victim?

Among the poorest populations, women are the main victims of poverty because women are the ones who are closest to their children, who see them crying, who hear them crying with hunger in the night, who have to take care of them when they are sick. They have to get medicines. They are the ones who are most profoundly affected by poverty. So this increasing gap between rich and poor I find very worrying.

And if we could turn the last chart over, please. This is another major problem for women. We have had a Decade for Women. We have had the International Literacy Year, and yet we find in southern Asian countries such as Bangladesh, Sri Lanka, Pakistan, India and Bhutan, that three quarters of the women over 25, represented by the green color, are illiterate. And if women are illiterate, they are prisoners of ignorance. They cannot get the information they need to better their lives.

In Southeast Asia and East Asia, the figures are better, but still for women, far too high. A little more than a third of women in the East and Southeast Asian countries are illiterate. In both cases, these figures are double the rates for men. Men have far greater access to primary education in nearly all the countries. Boys, I am talking about. And without women's literacy improving we are not looking forward to too much change for them.

Now one of the things (I have to end rather soon I think) one of the things that we are trying very hard to do in FAO, is to improve our knowledge about rural women. Our databases are totally inadequate. We can't tell from the statistics what are the problems facing women. They are not even reflected in the statistics. When the statistics say 'farmers,' they are counting only the men.

The Thai government doesn't even recognize that there are such things as women farmers. The women's groups in Thailand are fighting for the recognition of women as farmers in their own right in order to allow them to be able to obtain credit from the bank. Until they have the title 'farmer' they cannot get credit. They are labelled as 'housewife' although the man may be in the city, driving a taxi in Bangkok, the woman doing all the farm work, but she is still labelled as 'housewife.'

So this is the kind of legal issue that has to be faced first of all. Women must be recognized as producers, as providers for the family. They may not be in name 'head of house,' but when researchers go to the household to interview the family about their problems, their life situation, and they ask to interview the 'head of the household,' it is nearly always the man who comes forward. And that man is assumed to be knowledgeable about all the members of the family. If a woman comes and gives information to the researcher, they mostly think that she speaks only for women. They don't think that she knows about what men do, and yet they assume that the man knows about the women.

So we have been doing some studies that we call 'participatory research' with groups of women, so that the researchers and the researched subjects work together as partners to study their own situation. And this grew out of a programme that we had with small farmer families in nine Asian countries, and we had what is called 'participatory monitoring and evaluation' of the programmes that were under support from FAO.

In the groups of small farm families, we began a process of participatory research in order to build up databases on rural women. The difference between conventional research with an interview and participatory research where people study their own situation is that in participatory research you have a dual, a double objective.

In the first case, you collect data and build databases in simple ways like that, that provide the basis for women to discuss their own situation. In the second case, it is an educational process because the process of gathering data and analyzing it right there in the village is a tremendously conscientizing process for women. Some of the problems we have had with this, is that the men want to be involved. They are curious to know what is exciting these women so much. And once the men join the group, there are certain subjects that women will not talk about. Family planning for one, and household money, because many women keep a secret, a little secret jar out the back and the husband doesn't know about it. So these things cannot come out in the group discussions when the men are present. However, it is an exciting process and for those of you who read English I have books that I can mail to you on the subject--three or four different ones--that we have used that show the practical experience in some of the countries.

The second thing that we have done is to try to carry out research which counts women's work more accurately than when you have conventional agricultural census data. Every ten years, every country conducts an agricultural census. They collect data on who is doing what in the rural sector and they compile these statistics for the United Nations Statistical Office.

We want, in the year 2000, which is the next agricultural census, that women's issues will be addressed through the agricultural census. And in order to prepare for that, we have been conducting pilot surveys in four countries, in India, Malaysia, Pakistan and Thailand. Testing new research instruments, new ways of counting, not using the ILO definitions of work, but defining our own with the women, being sure that we use statistically valid frameworks and that we use indicators that would be acceptable at any level, from international down to the village.

We found interesting things from this. Briefly, I will tell you one or two of them. One is that if a male interviewer asks a woman farmer about her work, he gets very misleading data. If a female interviewer asks a woman farmer about her work the accuracy of the data improves somewhat, but not entirely. We found the greatest accuracy comes when we have an observer working, living with the family for between 24 hours and 72 hours. We tried different periods of time. We have to make it cost-beneficial of course. If we do things too elaborately, the governments are going to say "It is not realistic. We can't do it."

But we have proved now, that for very small samples, but carefully stratified, we can get a profile of the real situation of women's work in agriculture and in rural development. Fetching water, fetching fuel wood, growing food for the family, taking care of livestock, and so on. And what really validates this data is that we put it into charts that non-literates can understand and in group discussions feed the data back to the women who provided it originally, and have them analyze and correct it. And we found, particularly in Pakistan where this has been carried on for some time longer than the other countries, that the enrichment of the data is fantastic.

All sorts of things come out in this discussion which may not be sent up to the national statistical office, but is so enriching and changes the quality of intellectual functioning at the village level. So I am very excited about this program. We want to continue. We have had meetings last year and this year. We'll have another one next year. A lot of people are interested and we would like to make partnerships with aid agencies around the world who would support this kind of activity. Not done by foreigners. Done by indigenous people who know the customs, the culture of the country, can speak the language of the people, and foreigners, except for supporting roles, keep out.

Thank you very much.

3. JAPAN'S APPROACH TO 'WOMEN IN DEVELOPMENT'

-FROM THE VIEWPOINT OF CULTURAL ANTHROPOLOGY-

Ms. Kyoko KIKUCHI
Associate Professor
Tsuda College

Thank you for the introduction. As we have been listening to speakers for an hour already, I am sure that you are all tired, but I wish you will bear with me for a little while longer.

Today, I would like to discuss the reason why Japan ought to tackle the question of "women in development" from the perspective of cultural anthropology, my field of expertise. Dr. Meguro has already spoken on the concept of WID and its development and on how it has gained attention. The other two speakers have mentioned how women are linked to poverty in all its economic, political and social ramifications. So it is in this connection that I submit the following argument.

Why should we link women with development? I don't think NWEC has ever sponsored a forum on "men and development" or on "children and development". Perhaps, "children and development" warrants some thought, but I doubt if "men and development" will ever be taken up. The predicament of children in the process of development may even be a possible theme for our future fora.

Now, why should it be women in development, not men? I am sure that there are many different definitions of the word development. My definition is that development is a process of reforms which enhances and improves our society. But as Ms. Stephens mentioned already, development can actually worsen women's situation. And that is a total negation of the original purpose of development which is to improve one's condition. Thus the purpose and the significance of WID is in trying to correct the course of development, back to its original objective.

Again, we're back to the question of why women should be specifically focused in terms of development. You may wonder what the urgency is. There may be many reasons why WID or the role of women in development is considered critical. One such reason may be that in our long history, women have not played direct roles in society. Women have always contributed to society through their spouses, their parents, and even through their children. There was always an intermediary and that in fact has made women's contribution to society an indirect one. Furthermore, the evaluation accorded to such partial contributions was never justifiable.

I think this historical fact has been reflected in Ms. Stephens' presentation. Whether in cottage industry or in agriculture or in fishing, women were only considered as "farmers' wives" or "fishermen's wives". This was the classification accorded to women, even if they worked just as much, if not more than their husbands. And of course, their labor was not satisfactorily reflected in the wages that the women earned. That being the traditional norm, women were unable to cut ties with poverty.

In pre-modern societies, men had the responsibility of feeding their wives and their children. In other words, women and children were his dependents. This in turn implies that men were in control.

In cultural anthropology, we speak of the patriarchal society, the matriarchal society and the society which is neither of the two. A patriarchal society is one that is familiar to us in Japan. It is a society where only the male lineage have the right to succession and inheritance. In such a society, women and children are completely dependent on the men.

The percentage of matriarchal societies in the world is small.

112

A matriarchal society, moreover, is not the exact opposite of a patriarchal society. That is because in a matriarchal society, women are dependent on their brothers. So the male members of the family feed and "control" the women - their sisters - and the children.

Finally, we have the non-unilineal society which is neither patriarchal nor matriarchal. The most familiar example would be our Civil Code, which is currently based on this non-unilineal concept. Take the example of inheritance rights. Locally, women are guaranteed of their right to inherit their parents' estates, even if they're already married. This inheritance right is based on the concept of a non-unilineal society. And children - whether male or female - are not subject to restrictions concerning inheritance.

Nonetheless, we still see many remnants of the traditional family system in Japan. For example, the Civil Code does not have stipulations on women changing their surnames after marriage. But in reality, with the exception of men marrying into the women's families, over 90% of the women adopt their husbands' surnames. Despite the fact that there are no legal stipulations, this custom is rooted in Japan. It is a male-dominated society, whereby women are relegated to precarious positions, socially, economically and politically, and where women are referred to as "second rate citizens."

Within the context of the development process, improved quality of life - including the enhancement of the female status - is the prioritized objective. But at times, there are digressions. In fact, when we focus on women, the situation gets worse. The concept of "women in development" emerged, therefore, from the need to enhance women's role in development and to improve their conditions. It is high time we took this issue seriously and to try our best to develop plans and measures and then to implement them towards our ultimate objectives.

WID, in that respect, is one viable strategy in enhancing the social status of women. In considering social development in the future, we ought to think of women as valuable human resources. Women must be perceived as human resources worthy of recognition, appreciation and due credit or evaluation. In addition, we must strive to increase awareness of women's contribution to society and to ensure that women will be qualified for equal benefits from society as men.

Now going back to the question of ultimate development objectives, I don't think that we are searching for monolinear or uniform evolutions. In other words, our ultimate objective is NOT in the reproduction of advanced industrial nations in the West, including Japan. Cultural diversity and pluralism are called "cultural relativism" in my field. The principle of cultural relativism gives due credit and respect to each culture. It also maintains that traditions and customs that may seem strange in different cultures all have valid functions and that they must not be belittled in the process of development. The direction of development, therefore, is not towards the emulation of our present advanced, industrialized countries. Each society has its own values, be they values of time, accumulated wealth or diligence. The Japanese, of course, originally were an agrarian race, so that hard work within alloted time, frugality and savings are considered virtues in our society.

But there are many other cultures in the world where savings or accumulating and storing goods may not be considered virtuous. One exapmle may be an agrarian society that depends on the slash-and-burn method. Another example may be nomads. There the idea is NOT to save or store things. For the sake of mobility, nomads need to travel light. They avoid storing goods and carry minimal furniture with them. So the same value system does not apply to all cultures.

In the Japanese society, we all work very diligently and we are used to the idea of accumulating wealth. But there are other societies where such values are not considered as virtues. Differences exist and we must proceed with our development efforts by recognizing different value systems in the world. We need to plan and implement development policies in line with such diversities that exist in the world.

However, when we look at the world trend, whether it be Europe, the United States or Japan, it looks as if many countries are trying to emulate such industrialized economies. The fact that this kind of a forum is being held that there is an improvement of infrastructure, that the bridges are built, roads are constructed, - these all indicate that the world is moving in one and in the same direction.

It's extremely difficult to reverse this trend. Can we stop the operation of nuclear power plants because they cause pollution? Can we go back to the days when people used lamps, and not electricity? I don't think we can. There is a small group of people, for instance, the Amish people in the United States, who totally deny depending on the facilities of civilization that appeared after the 18th century. They have opted to live in the conditions that people lived in in the 17th and 18th century. But except for these minor cases, most people want electricity. Most people want a good traffic system. They want a good communication system so that they know instantly what's happening in the United States. We are able to see in Tokyo how the sumo wrestlers are doing in London. We have a televised sumo game from London. We can watch it in Tokyo. So we can't reverse this trend. We can never go back.

So given the situation, in pursuing this trend, one must contemplate on how best the benefits of development can be distributed evenly to the people throughout the world. This becomes a challenge and the issue of development began to be addressed from this perspective. And when we think of women, as I mentioned earlier, there are different perceptions of women depending on each society. And the picture of an ideal woman really varies from society to society.

In Japan, traditionally, I am not talking about the recent three or four years, but the time when we were girls, women were not expected to vocalize, or verbalize a hundred percent of what they think. It was not considered a virtue for women to express and asset themselves. But as we came in contact with other cultures of the world, we also began to think that women should also express themselves fully, otherwise we are not able to understand each other. So also in school education, whether it be boys or girls, they've come to be encouraged to express themselves and to articulate their views precisely.

For ourselves, I feel that whenever we attend this kind of an international forum, we tend to be silent. Of course, this is partly due to our language barrier, but that is not the only reason. We feel deep inside a self-restraint not to express ourselves a hundred percent, that we are not expected to be articulate. This is the kind of culture that we were brought up in and perhaps this might be something difficult for the foreign panelists to understand, but if we are to deal with the people from cultures different than our own, we must also learn how to express themselves. Later in the discussion period, I would really not want to see you remain silent but would like to see you raise your hands and really actively participate in the discussion.

So this is also the kind of thing, the cultural element, that we should take into consideration when we address the problem of development. There is this notion about what constitutes an ideal woman which is different from society to society and development is being pursued around this image. This is fine, but we should not remain there. This is what I wanted to say in the outset but I think I already used up half of my time, so I would like to go into the latter half of my talk.

In Japan, last February there was Japan Society for International Development established. It was launched with the following background. As you all know Japan has become a major donor nation but there is much criticism towards Japan's aid. Although I do not believe that Japanese aid is entirely wrong. We have to revaluate the kind of assistance we are giving foreign countries because our assistance has not been really welcomed by many countries. We, as taxpayers regret that, in spite of the fact that we are contributing huge amounts of money to the international community, what we are doing is receiving so little credit.

So in order for Japan to learn how she can live up to the expectations of the world community in the area of development, a forum to reassess Japan's assistance was considered necessary. Our assistance programmes have so far been developed giving top priority to economic needs. We have only engaged economists in developing assistance programmes and therefore now we think that we should make the door open to a wider group of people with different experience. So this Japan Society for International Development was formed in February, and in November, just about a year ago, a formal list of 650 participants was produced. I think we now have more than 650 people. This society is unique in that it does not simply focus on inter-disciplinary, studies.

Traditionally, only those people in the academic community tended to be involved in discussing the issue of assistance, but the society believes that the policy planners as well as the private industries that take part in the development process should also take part in the discussion of how to make our assistance more appropriate. So the society is different from the existing academic circles in that the door is widely open. Thus the Japan Society for International Development has as its members professors, government officials, those working in aid agencies, people from consulting firms, also people involved in the area of development assistance in private firms. So all these different peoples with different professions will get together to study about development.

In the society there is a subcommittee on Women in Development which is one of the nine subcommittees established in the Society. We send out notices to more than forty people for the meetings on a monthly basis. Lecturers from different fields are invited to discuss development and to exchange information. Between last May and October a total of sixteen study meetings were held, inviting thirteen speakers. That is because some speakers spoke on two different occasions.

And what I can report to you here as the results of such study meetings is that a top-bottom approach to development had not proved to be very effective and if so perhaps a bottom-up approach or development from the grassroots is necessary. However, what we see here as a problem is the question of who is going to undertake such a development from the grassroots. How are people's views, and opinions to be taken up? Where do the channel exist? And as Ms. Stephens mentioned, teaching women how to read and write is crucial. And tomorrow I believe Ms. Bhatt will touch upon how women can be organized. How women can unify their forces by organizing themselves, and thus represent themselves more strongly in social and regional development. This comes yet as another great challenge. How can it be practically achieved? Good timing and an impetus is necessary. How, and who will provide that impetus?

And there was one lecturer from the Ministry of Agriculture and Forestry who talked about how the lives of the farmers were improved in Japan which I believe could in turn provide a hint to improving the lives of farmers in the developing countries. Of course, what was successful in Japan may not always be successful in other countries. Often times things have to be modified to suit the local situation. He said that a direct transplantation will not always prove to be effective.

Furthermore as was mentioned earlier, the population problem in developing countries was addressed in one of the meetings. While industrialized nations face the problem of dwindling population the developing countries suffer from the explosive growth of population, which is one factor they say contributing to increased poverty. How should this population problem be taken care of? We cannot simply tell people to do family planning and to control population.

Just as the ideal figure of womem varies from country to country people's notion about children differs from country to country. In countries where children are considered assets and an insurance for old age, family control is different to introduce. There was also a report on the problems of protecting women workers. There is special consideration needed, I believe, for the protection of female workers. This is also something we must address.

So we've conducted a series of such study meetings and what we are looking forward to, in the subcommittee on Women in Development is that there will be many, many more people who would attend the subcommittee meetings. Especially we want more men to participate in these meetings, because we don't want to simply leave the women's issues in the hands of women. We believe that we will really get nowhere if it is only the women who are discussing the issues of women. We believe we need the participation of men in these kinds of fora for us to more forward.

So I mentioned that there were thirteen speakers and four of them were men, but very few men really come to listen to the talks. Only two to three men actually participate in the study meetings. So we would like to have more men's presence. This subcommittee was initially launched for a 2 year period, so in December, the last subcommittee meeting will be held. But since this study meeting got on track, we strongly wish to see this study meeting continue further on 'til next year. We are now asking the Board for permission. So if you're interested please do come. Perhaps I've tried to advertise our subcommittee, but I think this is where I should close. The details will be left to the discussion period.

Thank you very much.

120

[Session II]

Field Report

on 'Women in Development'

BEST COPY AVAILABLE

4. SEWA EXPERIENCE

Mrs. Ela Ramesh Bhatt
General Secretary
Self Employed Women's
Association (SEWA)

Thank you very much. I sincerely thank you and the organizers for inviting me to be with you and make this presentation. As the time is short, I will straightaway go to the subject.

Please pardon me when I am personal, because I can't help it. Without being personal, I cannot describe what I would like to do. Now about the place from where I come, is a city of textile mills. It is known as the Manchester of India and it was Mahatma Gandhi in 1927 who formed a labor union, called Textile Labor Association, TLA, on the certain principles. He meant on the principle of trusteeship, where the labor, the capital and the intelligentsia all are responsible ultimately to the society and they are only trustees of their labor, of their capital or of their talents. So on this principle, TLA was formed.

In 1954, I joined the TLA because I was very much influenced by the Gandhian thinking while I was studying in the University, so I joined TLA and I was working for the textile workers. While working for the textile workers, everyday, gradually, slowly, I realized more and more that how much these textile workers are protected and the industrial workers are protected in terms of their working conditions, in terms of their wages and also covered by various social security schemes like maternity benefits, childcare, workmen's compensation.

You know, if a finger of a textile worker is cut, he is entitled to thousands of rupees by way of compensation. But a cartpuller who is pulling a loaded cart from one place to the other, and on the road, on the way, if she meets with an accident and breaks her limbs, then she is not entitled to any compensation though she was on duty at that time. Or a garment worker, a tailor, who is stitching the garments in the home for a contractor, and if then, her finger gets cut, she is not entitled to any such compensation. Or, an agriculture worker, when she gives birth to a child, she is not covered by any kind of maternity benefit scheme.

So therefore, this was a gross injustice it was realized by me. I also realized that there was such a big gap between the workers of the formal sector who had privilege of protection, and, the workers who are a vast workforce who still remain unprotected, uncovered by protective legislation. So gradually, it became more and more clear in my mind: One was about the labor movement. That, in a country like ours, where 90% of the workforce is engaged in the so-called unorganized sector. I don't like to use the word 'unorganized'. I prefer to call them 'self-employed,' but it is a technical distinction.

So what I realized is that there is no labor movement worth its name, in a country like ours where most of the production of goods and services is done by the unorganized sector. So unless this workforce, i.e. 90% of this workforce, who is in the unorganized sector are brought in the mainstream of the labor movement, there is no labor movement worth its name in our country.

Secondly, about women's movement. Who are the women of India? 80% of women in India are rural, poor, illiterate and economically very active. So if we want to have a women's movement in India, I realized, it is these women who should be playing a leading role in the women's movement of India.

Only these two things were clear in my mind. There was no blue print or a plan of how to go about it. As my background being of a trade union, as I was working in a textile labor union, I thought that our organizing form should be that of a trade union, so I started organizing these women, self-employed women workers, in a trade union that is called SEWA, Self-Employed Women's Association. The meaning of SEWA in my language, I suppose, is the same as the meaning in your language. SEWA means to provide service, to serve, to take care, to help.

So SEWA was formed in 1972. We went to the Labor Commissioner to register it as a labor union. The registrar of the trade unions said that 'How can you have a trade union where there is no specific employer-employee relationship? Against whom are you going to agitate?'

We said, 'First of all, the purpose of a trade union is not only to agitate. The basic purpose of a trade union or a labor organization is to build all the workers in solidarity. And secondly, yes, we do not have one employer to fight against, but we have certain systems, like the contract labor system, against which we have to fight. We have to fight against certain policies like town planning policy. Vendors and hawkers who have been selling their wares in the downtown market and are thrown out of the market though they have been selling there for two or three generations. So the urban planning, the town planning, are the policies against which we have to fight. So ultimately we convinced the Registrar after a great struggle, and we were able to register ourselves as a trade union.

Now I think that what was unique, to start with at that time, was to bring the vast, unorganized, or so-called informal, or peripheral or marginal (these are all negative terms to describe such an active workforce of a country) workforce, especially women in the mainstream of the labour movement.

So this was a conceptual kind of resistance that we have faced and that kind of conceptual resistance we have been experiencing, facing all throughout till today at various levels.

SEWA has three categories of membership. Those who are home-based producers who have been working on their own or who have been working as piece rate workers and these are the garment workers, the bidi rollers, i.e. the cigarette rollers, food processors, weavers and tailors, and the like.

Then, the second category is of those who are petty vendors and hawkers who have been selling vegetables, fruits, eggs, fish, in the market, some with a small kiosk at the corner of the street, or selling with a head load, a basket of vegetable on the head and selling it in the streets. So these are the hawkers and vendors, or selling sitting in the downtown market.

And the last category, the third category of SEWA membership is the laborers, pure laborers, like loaders and unloaders, head loaders and cart pullers, the agricultural workers, construction workers and those who are, we call them ragpickers, or the minor forest produce--collectors from the forest. These three categories form the membership of SEWA. In total, we have about 200,000 members cutting across six states trade wise. Two-thirds of the membership is rural. And community wise, one third membership is Muslim, one third membership is Harijans, and one third membership is backward class.

Our major problems are economic problems. The first problem is the invisibility of the women workers. Their work is not considered as work. A woman is attending the cattle at the home or she is making cowdung cakes, or she is collecting the firewood from jungle, or she is making baskets and brooms at home or she is in the agriculture. All of this work under definition, official definition, is not classified as work. This kind of invisibility, or non-recognition of women's work is the biggest problem.

The other problem is that though she is working, her income is very low. Most often she works as unpaid family labor, and then the wage she is paid is very low because mostly it is unskilled. So often that the kind of work a woman is doing is automatically considered unskilled, though it is not unskilled. E.g. to roll a bidi or a cigarette is not unskilled work but as that work is being done by illiterate women, poor women, so it is classified as unskilled work and they are accordingly paid low.

The third problem is their assetlessness. Women don't own assets in their own name. They don't have the ownership. They don't have any land that is in their name or a bank balance or anything in their own name, except their own children. And the children also do not remain their own when they grow up. So these are the three economic problems faced by a majority of the women in India.

While organizing, our main objective is economic self-reliance. We are organizing for full employment and full employment that is sustainable, productive. By full employment we mean employment with the security of income, security of food, and then social security. That is a full employment. It has to be self-reliant meaning that we do not have to depend on the outside economy. So this has been our general approach in organizing the women.

Let me talk about the SEWA Bank. SEWA was started in '72, and soon we had to start a cooperative bank of our own in '74, so soon. And I feel that was the wisest thing that we did. So that we do not have to stretch our arm before anyone. These women being self-employed face two most common problems.

One is that they are short of capital. A vegetable vendor who needs 50 rupees in the morning to start her business, has to go to a neighbor or a private money lender to borrow 50 rupees. She has to repay 55 rupees in the evening from her little income and the next morning again, she has to borrow the same amount. So this is a problem which is really common, the shortage of capital. Second is that their means of production are not their own. They are hired, so she has to pay the rent for a sewing machine or for her handloom or for a hand pushcart.

At that time, i.e. in 1972, all our Banks were nationalized and there was a continuous pressure from the Center to the local banks to go to small borrowers. At that time these Banks didn't know who the small borrowers are. And here we were a recently organized group of potential small borrowers in need of credit facilities, so, we went to them. Thus our women were provided loans by the government banks.

In the beginning, of course, we faced practical difficulties. I remember, in one meeting, our members said to me in public, 'Ben (meaning Sister), why can't we have our own Bank?' I said 'we are poor. We need thousands of rupees to start a cooperative bank. We need to have share capital.' They said ' yes, we are poor, but we are so many.' And I must say, that in the next six months they could collect the necessary share capital and we started our own Cooperative Bank in '74.

Again, we were confronted by the conceptual block of understanding. When we went to the registrar of cooperatives and said that we want to register a cooperative bank, the registrar says 'How can you have a bank of illiterates? How are you going to have the banking transactions with the illiterates?' Then he said they are all only women and that women are not the decision-makers in terms of finance. Of course, that is a very middle class idea. Registrar did not know that it is not so in the working class. And so he refused to register our Bank in the beginning.

Again we had to struggle and fight against the concept and convince him saying that these women are economically active, therefore they can save, they also need to borrow and that borrowing is going to be as viable as any other business. And then, we said, 'Yes, they are all illiterate. Okay, we will have her photograph on her passbook, and a copy of the same photograph in the ledger book of the bank, and, this is how we will have the banking operations.' And very non-violently, her husband was eliminated from the whole banking operation process. So there is no danger of forgery at all, because she has to come herself with her own bank passbook with her photograph. That is how we started our bank in '74.

To give you just a profile of our Sewa Bank, it has today 30,000 depositors, US$160,000 as working capital, and 96% is the repayment rate. Recently there was pressure from our rural members, so now in 65 villages, there are small credit groups of women that operate almost on their own, and linked with Sewa Bank for credit facility.

The most popular program of the Bank in recent days is of recovering of the mortgaged land from private money lenders. The bank helps through credit to recover the land with the condition that the recovered piece of land will be in the name of the woman. And if the woman so chooses, the second name on the land record will be of her husband. Thus many of the rural women depositors have pawned their own jewelry. As soon as there is a crisis in the family, the first thing that comes in the sight of the family is the woman's jewelry that is being pawned. So the recovery of the pawned jewelry, is also another popular program.

Mainly, SEWA bank has helped the members in building up their assets and as soon as a woman has asset in her name, it may be a bank balance, a land, a bank passbook, an identity card, a right to vote in her coop or somewhere, her status definitely goes up. We have taken up this program also at the national level and we are demanding a National Credit Fund for Women for all of India. There is also Women's World Banking, an organization, an affiliate of which also exists in Japan since last year. So banking for women is a movement which directly helps asset building for women. And I must say that, as we all know, that as soon as women have economic strength, she is able to think about her future in a more autonomous way.

Organising is our main objective in SEWA. On one side we are organizing our members into cooperatives. On the other side, we have been organizing men into unions tradewise. Our bidi and tobacco workers, garment workers, textile and leathercraft workers are organised into unions. Their main problem is, they are not covered by minimum wages Act.

First of all, those occupations themselves are not recognized as occupations so our fight is from the scratch. We have been successful, to get minimum wages enacted in two or three of the trades. Our major fight again here is on this issue of home-based workers. I also happened to meet the labor leaders and the government officials in the labor ministry in Japan because our fight has turned into an international campaign.

What we are demanding is an ILO convention for home-based workers for their protection and recognition. We are demanding international labor standards for home-based workers. So as you know that once it becomes an ILO convention, then each member country is obligated to form enactment. Simultaneously, global research is going on on the legal status of home-based workers in various countries -- developed countries and developing countries as well.

Home-based work is no more a phenomenom of the developing countries, of the traditional economies, of women only. It is a global phenomenom. And as we are affiliated with three

International Trade Unions, we have a family's support, we have allies with whose strength we have been able to reach all the way to ILO, and I am very proud and happy to say that on the agenda item of 1993 of ILO, home-based workers is likely to be accepted as an item for discussion, though there is strong resistance from the employers.

Our members have no bargaining power. They are so poor, so underpaid, so destitute, that how can you have a trade union where there is no real bargaining power. So as a strategy, we have adopted as a goal, joint action of union and cooperatives.

When we organize them on the basis of cooperatives, they gradually gain strength to fight the exploitation. To give just one example: There are 600 garment workers in one area who have been working on piece rate and who through their union are demanding higher wages. Naturally they have every fear of being victimized, if they demand higher wages from the contractors. Along with raising demand, they have a coopertive of them, too. Two hundred of the garment workers are in the cooperative that provides them regular work. The rest of the 400 automatically get a bargaining strength, they have a lever to pressurize the employers to give higher wages. So in a very simple way I tried to explain the joint action of union and cooperative.

Another strategy is to create more employment. In rural areas, as you know, there is very little work. That is the main problem. How are they going to have a typical union kind of fights or demands when there is no work available? So, we are trying to create more and more employment opportunities in rural areas.

Not that the people in rural areas and women in the rural areas are dumb and that you have to create some new employment, income-generating activity then put them in their hands. No. They are skillful. They have survived because they had the best strategy to survive in the desolated parts for so long so they have the skills. We try to build up on their existing skills and then help develop at their own pace, provide better technology, better tools and as they get organized, they slowly get the strength to bargain in the open market. And this how then they have sources of income from land, from home-based work and from cattle. Now they have sufficient to eat and come out of the clutches of the private money lenders. This is our approach in rural areas.

We also have the supportive services. Supportive because only economic activities is not the only thing in poor women's lives. It so happens that poor women's disadvantages in earnings and work conditions are compounded by the lack of supportive services. And it also helps in organizing. We have seven kinds of supportive services, healthcare, childcare, insurance--all women are covered under the life insurance, then training, legal aid, housing and communication. I will just quickly mention only two.

One is about the community health program that provides simple, safe, and low-cost primary health care to the members. The young members have been trained to take care of the health services of their community. We have found that almost 85% of the health needs of the local people can be catered by the local people themselves if they are properly trained.

We are also running a small low-cost drug shop. The difference of price of drugs between the open market and our low cost shop is sometimes 500 times. The pill you get in the market, that the doctor prescribes is very high, while if you buy from the SEWA shop will be 500 times less as we buy generic drugs from the manufacturers directly. So this is a very popular program. SEWA has formed a cooperative of the health functions and what I am trying to find out is how far, to what extent healthcare can be self-financed in the case of poor women. We have allways formed that the poor are very good payers. If they get quality service, they are ready to pay a proper price to the service that they receive.

The other cooperative is about communication services. Communication, as you know, has to be a two-way flow of information and knowledge. What happens all the time is that there is always a top-down flow of information and advice and orders, but those who are up hardly care what is coming out from below. We have several ways of commnication, but one way that perhaps you may be interested is the video SEWA.

In 1984, we had a group of seventeen who were trained in video production. Except three, the rest were illiterate working women members. We have seen video as a tool of development. Our video production is being used to mobilize, to organize, more members in SEWA. Video Sewa is very successful in training, the information dissemination and also documentation. We have found it useful in convincing the policy makers, and showing them our side of the story on certain issues. And I must tell you that thanks to Sony equipment and thanks to the Trainer, that the video Sewa team is now well trained, including trained in editing. See, our best of the camera person is a vegetable vendor, and the best of our sound recordist is an agricultural worker. Illiterate women have such good eyes! The way they 'see' the things and events. Mind well, they have never seen even TV before but still there is so much of creativity and originality in their video production!. And, of course, we are not there for selling these tapes though we have sold a few. Besides the two programmes that I described, there are so many other programmes. We have to face crises like riots, communal riots, floods, famine and then disaster, we have to be efficient and prudent during the disastrous days and be an expert in relief and rehabilitation work.

You may ask me 'What did you achieve in SEWA? I think it is a long way yet. What we have achieved, is that SEWA has made these women visible to the society and policy makers. SEWA members have at least now enough to eat and have come out of the clutches of private money lenders, contractors, middlemen. This much achievement certainly has been done, if I may say so.

The lessons that we learned are mainly two things: That, as I understand, when women are organized on the basis of work, then for the first time women start perceiving themselves as workers, as producers. And in a trade union, if a member doesn't realize oneself as a worker, then how can you have a trade union? So this process makes them for the first time realize that they are workers and producers and in the process her own self esteem grows. That she is a contributor to the economy, to the society, she is not just an ordinary person, is realised by herself.

Secondly, that those differences of caste and community and religion, start melting into a sisterhood where they help each other at the time of strike, at the time of any crisis and I think this is very important. In the process of getting organized, of course she gets self confidence. She gets courage, collective courage. She builds up her own capabilities as manager, as leader. She builds up her own assets. She has something of her own.

No more she is crying on her fate -- saying 'I am unlucky.' No. If there is a problem, they would now say 'Come, let us have a meeting.' They have learned to shed their traditional submissiveness and withstand family and community pressures. They have begun to work together to improve their lot and gaining strength from each another. They have searched for innovative forms of their own innovative organizations, of their own cultural forms of organizations and have learnt how to cope with the power structures at their level.

This took a very long time because this is building up a human stuff. The women want to now decide what kind of development, what kind of pie they want. And here it is the women who are the leaders of change.

So my last point in summary is -Organizing of poor women. You know, I am very strong believer in organizing. There is no short cut, short way to organizing. There is no quick recipe for organizing. Wherever there is injustice, it has to be fought against. When a policeman kicks a vendor, the policeman has to be stopped. When a middleman exploits, he has to be opposed. When the bank denies loans to women, that policy has to change. When the government treats women as welfare objects or only as beneficiaries, no, that has to be resisted. Such policy has to be changed and state that wemen are equal partners - they are the active participants in the development of the country.

This means obviously that there are struggles at every level. There are struggles at the direct level, say, with the police or with the contractor. But that is not enough, because those police and the contractors are being strengthened by the authority structure at the state level. At that level is, say, the labor commissioner or the municipal commissioner or the bank officer. So, at that level, also we have to wage a struggle. That policy, and that Act, the laws have change because there is totally a different conceptual framework at the policy level. So, at that level also you have to struggle.

You have to struggle at direct level and also at the policy level, say, national, international. In struggle, of course, there is nothing like success or failure. We always gain by struggle if we are smart enough to learn from this struggle and make it into our benefit. But again, the ultimate message is about organizing. Thank you.

5. WOMEN IN THE BUREAUCRACY:
THE PHILIPPINE CASE

Ms. Patricia A. Sto. TOMAS
Chairman
Civil Service Commission (CSC)

Today I will talk to you about women in the government service and to do that perhaps I ought to give you a little background of the Philippines. To understand the Philippines, perhaps we should take a very quick look at its history.

We have had 400 years of colonization by the Spanish. 100 years under the Americans and 5 years under the Japanese. Many people in the Philippines jokingly refer to these periods as 400 years in the convent, 100 years in Hollywood and 5 years in karate country.

I think you must also understand our geography a little bit. There are 7,107 islands in the Philippines and we are divided by bodies of water so that we are an archipelago. In a sense this has made us a very mobile people. It has also made us a very fractious people.

We also have a long tradition of having strong women. Many of our women fought with our men in our various wars of liberation and perhaps the latest and the better known of these women would be Mrs. Aquino who took up where her husband left off after he was assassinated.

Let me give you some statistics about the Philippines. Two years ago, there were about 62 million Filipinos -- 31.8 of whom were men and 30.2 million of whom were women. 24 million of us are in the labor force, many of those fifteen years old and over. 15.4

million of that are men, 9.0 million are women. And the economically active population, which means those who are in fact working, is 22.5 million, 14.7 of which are males and 8.1 million are females.

These statistics plus the revolution of 1986, the EDSA revolution, which brought into government many human rights lawyers and street parliamentarians; the change of orientation of the government; the appointment of a number of women into appointive positions and the election of a few of them into government office, articulated the cause of the disadvantaged, which usually includes women. All these prefigured a greater role for women in the Philippines. And this was also the inspiration behind the setting up of a Philippine development plan for women.

In 1987 we had a revitalized National Commission for Women. Before that essentially what we had were many women in clubs trying to do good for other people, but the new leadership of the National Commission for Women felt that the orientation must be beyond doing good. Rather, the new thrust was to be a more active advocacy, a more active influencing of policy and a more participative and more consultative process of evolving plans, programmes and projects that affect women in the Philippines.

So in 1987, a series of consultations, nine of them in fact, gave birth to the Philippine Development Plan for Women. This was a project which was technically assisted by ESCAP in Bangkok. The work was actually done by the National Economic Development Authority of the Philippines in consultation and coordination with the National Commission for Women and through a grant from UNIFEM.

The plan eventually was drafted. It became an official document in February 1989. It was launched by the President in

March 1989 and today as a companion piece to the National Develoment Plan of the Philippines there is a Philippine Development Plan for Women which parallels the National Development Plan except that the Philippine Development Plan for Women has five additional chapters. It is longer than the National Development Plan because there are special chapters on women and migration; on prostitution; on violence against women; on media; and a special chapter on arts and culture.

The Philippine Develoment Plan for Women also highlighted a new and growing phenomenon in the Philippines -- the partnership between the GO's and the NGO's or the Non-government Organizations with government. For a long time before, our planning was top-down. It was dictated by people from the government and everybody else simply had to accept what the plans were and have it implemented. The Aquino government opted to choose a different approach and therefore it opted for a more consultative process.

In a very simplified form, the cyclical process begins with consultation, goes on to formulation, goes on to implemenation, monitoring, the annual modification and back to consultation again. In every stage of this process, we see principal actors.

For instance, in the consultation process, we see the NGO's as the primary actors because while there is a government agency that provides the staff for all these procedures, the consultations deliberately seeks out non-government organizations to hear their views about specific aspects of the plan. At the formulation stage, which is essentially a writing down process, the principal actor is the government organization, the GO. At the implemenation stage, it becomes a NGO-GO partnership. At the modification stage it becomes essentially a government task and then back to consultation which is again basically NGO.

When we examine this plan cycle, we found out that for the most part you have government officials involved in every step of the process and we felt there was a need to focus on the bureaucrats who were principally responsible not only for taking care of the process from beginning to end, but also for implementing and formulating much of the plan.

Let me therefore talk to you about the Philippine bureaucracy, the employees of government, and give you an idea about how many they are. There are about two million people working in government. We have more females in government: 52.8% of them are female while 47.2% are male. Let me explain to you that women are dominant in government jobs because government has traditionally paid lower wages than the private sector. Since they are perceived as secondary bread winners, women have consistently gravitated to the lower paying jobs and that is the reason why there are fewer men in government.

At the first level, which is really your arts and crafts group, tradesmen, clerks, general utility persons, the males predominate: 52% are male and 48% are female. At the second level which is the professional-technical group, the females predominate: 59% are female, 41% are male. The second level is theoretically the feeder group, the one that feeds into the executive class, which is the third level. And at the third level, as may be expected, 71% are male and 29% are female.

Now when you look at it across the different governments of the world, 29% is not such a bad figure. I was in Canada last year and they told me that for 1991, they are aiming to reach a level of 15% women executives in government. So on that basis, the Philippines is not so badly off. But when you look at the fact that women predominate at the second level, the feeder group, you wonder why they suddenly drop from 59% to 29% at the executive class. The margin of preference I would like to think is too high and cannot be statistically due to normal forces.

And so we look at why the level of women executives in government is so low. Of course there are the traditional biases, the myths and the misconceptions about women workers. We are weak. We cannot do physical work and that is why we should be relegated to office jobs while men are allowed to go to the field. We have monthly cycles and therefore we have imbalances in moods and behavior. Sometimes, we are erratic. These are the myths that continue to be said about women. And you and I know that these are not exactly true.

We also have the usual structural barriers. We have double burdens as women. We work at home. We work in the office. We have the usual discrimination working against us. Finally there is political patronage.

The Philippines has a basically Western-oriented kind of bureaucracy. We got the bureaucracy as a legacy from the Americans and we have always believed that every time a winning party comes in, the new leader brings with him a new set of officers altogether. This has been happening all through the years. We have made some efforts to professionalize the civil service but with not much success.

And so we said "Okay, we'll take a look at all these barriers and we'll find out what it is that we can do to make life a little better for women in government."

And for starters, we said "We are going to make the process fair." We are not for the moment asking for quotas because to begin with, we predominate in government and it is only in certain parts of government that we feel we are disadvantaged. We are simply saying that the process must be fairer so that women stand a better chance of getting where they deserve to go.

We are not asking for special treatment either because very often well-meaning legislation acts as a protectionist measure for men instead of protecting us. Let me give you at least two examples.

We passed a law that says all factories that have 100 or more women should have day care centers. The result: in many parts of the country they stopped hiring women so they don't have to put up day care centers. There was another ILO provision we adopted which prohibited night work for women, and again, employment for women dropped.

We also recommended that there be transparency of vacancies in government. Very often, people especially jobseekers, do not know where the vacancies are and recently a law was enacted that required all vacancies to be posted in three places and to be published in a newspaper of general circulation before it can be filled up. I think this is working to the advantage of most women because now they have better access to government employment opportunities.

We have also speeded up the frequency of testing for entry into government. The Civil Service Commission does annual tests for those who wish to enter government, and annually we test about 600,000 people. About 150,000 of them eventually pass the test. But now we have instituted a system of walking in to take your examination. This way, anybody who feels that he or she wants to enter government at any particular point in time is not deprived of that opportunity for as long as she passes the test. Now, people can simply walk in and take an examination, thanks to the magic of computers.

We've also raised the passing mark from 70% to 80%. The interesting thing is that we have more women coming into the civil service with the higher passing mark. We have decreed that all offices must have selection and promotion boards that must have an employee representative in all its deliberations. We are working towards better job performance appraisal so that women can be given further mobility through a proper evaluation and assessment of their performance. And we have set in place a machinery for grievance settlement.

But what I find more interesting are the things we have done to correct the structural barriers. I assumed the chairmanship of the Civil Service Commission in 1988. Before this, I was a career official as Undersecretary of the Department of Labor and Employment. And when I talked to my staff members at the Civil Service Commission, I asked them why aren't there very many women moving up to middle management or executive positions. And my Personnel Officer said "Ma'am, that's because women are very often late or they are very often absent."

And I asked "Why?" So we had a dialogue with women in the office and they said "Well, how can we be not late? We cook the breakfast in the morning. We bathe the children and take them to school because our husbands don't do that. And in the afternoon, we have to go marketing then cook the evening meal. That is the reason why some people say that women don't work overtime because they have to rush out of the office every so often."

Thus, we set up flexi-time work schedule for government employees in the Philippines. Now government employees can choose between, 7 to 4; 8 to 5 or 9 to 6 shifts, with the only condition that they work eight hours a day. This way women would not feel so hard pressed about trying to keep an 8:00 to 5:00

schedule which was what it was before.

I was in a Congressional hearing last week and one of the Congressmen said "Mrs. Sto. Tomas, your flexi-time schedule is a usurpation of legislative authority."

"Why?" I asked.

"Because the law says you should have an 8:00 to 5:00 day."

And I said, "Mr. Congressman, the law says 40 hours a week, 8 hours a day. I do not think that our flexi-time policy is a usurpation of legislative authority, but if it is, I am sure you will be perfectly happy to bring me to court." My sense is that if the law does not specify, then we ought to interpret things in favor of the employee and eventually the woman who is advantaged by such a policy.

We have also initially set up a day care center for our own employees in the Civil Service Commission. We had noticed that our women employees, particularly the lawyers had very low output and when we looked into it, we saw that they were often on the telephone checking on their children at home. We used to have the luxury of maids in the Philippines, but not anymore, because many of those who opt to do domestic work are shifting to places like Hong Kong and Saudi Arabia, and some of them are in Japan, in fact.

And so we proposed to set up a day care center right in the office to put the women's minds at peace while working.

The problem of course was money. There is nothing in the government's budget that provides for day care centers because it has not been legally imposed. But all heads of office in the Philippines have what we call a discretionary fund and so I checked with the budget officer, "Does this really mean what it says, that I have the discretion to disburse this?" and he said "Yes, fine."

I told the women in the office we are going to spend half of my discretionary fund for the day care center but you must put in the other half, and they did. That day care center has been working for the past two years. During school days, we have between 18 to 25 children in there, but during summer we have a maximum of 40. The interesting thing again is that it is not just the women in the office who bring in their children. The men also do likewise.

There are now about six government offices which have followed the Civil Service Commission's experiment on the day care center. As I said, this is an experiment. We have not legislated this into place.

We have also set up what we call 'Equads' or equality advocates. 'Equads' are designated persons in the 14 administrative regions of discrimination because of either gender, political affiliation, ethnic origin, or religious belief of some people.

There are many cases of sexual harassment in the bureaucracy and part of the reason why these have not surfaced is because they are not something that are usually talked about in a polite society. We have a very macho culture in the Philippines, and many people think that this should be taken as natural. There was one secretary who was fondled by the boss repeatedly, and she finally found the courage to complain of sexual harassment. When they were before us, the lawyer for the boss who did it, very proudly told me. In our list of violations of civil servce rules, there is no such thing as sexual harassment."

And I said "Yeah, there is no such thing."

"Therefore there is no case against my client."

I said "Look again at the list of violations. It says there 'grave misconduct.' It says there 'oppression' and that is what I am charging your client of. There is no sexual harassment, but there are other things in the books that we can throw at your client." That man has since been dismissed. But the rules are not all that clear because they were made during a period when sexual harassment was not something you talked about.

The equality advocates in the 14 different regions are there primarliy to listen to cases of discrimination and find out whether we can help victims along by filing the necessary cases. In consulting the equality advocates, everything is held in confidence. Only when the aggrieved party agrees to file a formal complaint that identities and other details publicity surface.

We have also started a swap work program. The traffic in greater Manila and other big cities like Cebu is very bad, and again women have difficulties going from one place of work to another. I live and work in the northern end of town. I have employees coming from the southern end and it takes them about two hot and torturous hours by bus. When they get to the office, they become somewhat weary and they can't really work all that much. So what we did was a sort of a brokering service. We look for a government office near your place of work and we exchange you with somebody who lives near your place of work to make life a little easier for both and also other government workers. Again, most of the applicants have been women.

We are in the process now of allowing part-time work for government workers. But part-time work is something that has never been allowed in government and we are about to try it for the first time. And this is for the purpose of seeing to it that women in particular don't lose seniority rights even if they have to look after growing children.

We have encouraged women to organize in different offices to act as support systems. For the most part, Filipino women are very shy. They will take all kinds of abuse and not really talk about it. But when they feel there are other people going through exactly the same thing, then they get a little more courage, they become a little more emboldened to speak out. There are now a number of organizations in various government offices called "WINGS" for Women in Government Service.

Let me get very briefly back to the executive level because that is a critical point in government activities. Most decisions are made at the executive level in government and women career executives constitute only 18% of the entire conplement in this level. When you add the political appointees, that goes up to 29%, but at the career level, the proposition is very low. And again we asked, "Why?" Well, the old system for getting women into executive positions is through training. People go through a training period anywhere between three to nine months after which they become career executives in government.

What did we find out? We found out that in the different offices because women cannot be allowed to leave precisely because they are the workhorses and therefore it is the men who go to the three to six month training courses and consequently become the executives. Very unfair no matter how one looks at it. We have since changed the system, and in fact the change is taking place just this year, from a training-based career executive service programme to a performance-based and testing-based programme. We train you when you are already a career executive on the job, and we look where you are inadequate. Let's say you have problems with public-speaking, then we train you in public-speaking, but only after you have become a career executive service officer.

Next year is an election year. We are going to have a new president. As chairman of the Career Executive Service Board, which is the policy making body for third-level positions, I am about to present to whoever sits as president a folio of competent career

145

executives. We will provide the new President with regular feedback as to how their executives are doing, including those who need to be promoted and those who need to be retained and those who need to be thrown out, which means they will no longer be at the mercy of their respective bosses. And we will provide for a system of rotation and mobility so that people get exposed to other aspects of the job other than the one they hold right now.

We aim for more women in decision-making positions. We aim for more women in elective positions and there is another group that is working for getting more women elected to posts. This is "WIN"-- Women In Nation Building. And part of the reason we are pushing this very hard is because we feel that there ought to be more people in government who understand women's viewpoints when it comes to policies.

Let me discuss with you, if I am not beyond my time yet, the overseas employment programme which I had the privilege of handling when I was Under-secretary of Labor. The overseas employment programme was set up as a stop-gap measure to relieve local unemployment and the scarcity in our foreign reserves. That is how most men think of it. As an additional dollar earner for the country. As an additional job generator.

But more women see it as a possible problem. We break up a lot of families in the Philippines when their mothers go to Hong Kong, to Canada, to the United States to work as maids. Now we see a great incidence of child abuse and incest because sometimes only husbands are left at home. We see a great incidence of broken homes. And while government is really hard pressed in looking for solutions for this, my sense is that they are not pressing hard enough.

There is simply a need for more protection for women while they are on the jobs in other countries. We feel there is need for better networking with NGOs of other countries because governments are terrible when it comes to protecting their own workers. They go through a lot of diplomatic song and dance. This song and dance takes quite a bit of time and in the meantime somebody has already died, gotten abused or maltreated.

We also feel that there should be more women labor representatives in foreign countries so they can take care particularly of women who get into trouble, because you cannot always expect men to understand the problems that women face. We have had incidences of women jumping out of windows because they go mad from the loneliness of being away from their families. Many of our male labor attaches do not understand that very well.

Let me conclude by saying that last night I had a delightful evening with some of our Japanese colleagues. We sat down in the lounge and talked. And one of them, a lady from Okinawa said "But Patricia-san, what do you think is the meaning of development, because that has been raised in session yesterday?"

And I said, "You know, development to me as a woman means being able to make a choice." Many of the Japanese women I talked to last night had choices. One lady said she didn't have all that much money but she had time and so she was making maps for foreigners who come to Sendai so they do not lose their way and know which doctors speak English. That's fine. Many of them were involved in home exchange programme on international exchange. One lady was head of an international angels foundation which took care of orphans in Bangladesh.

I was warmed by all this display of affection and assistance for other people somewhere else. And that is what I mean by having a choice. You have a choice. You have a choice to help other people.

I have a choice too. We are all privileged here in this room I think to have that kind of choice to be able to have a life good enough. But having a life good enough entails the responsibility of helping others build a life that is better for them.

Allow me to make a particular plea now for Filipino women who are in Japan. There are 50,000 of them more or less, who work as entertainers. They occasionally do get into trouble with your police because they are into occupations which are particularly vulnerable. I appeal particularly to the non-government organizations who are here this morning to extend to Filipino entertainers all the help that they can because these are women who have no choice. They do not quite have the kind of choice that you and I have and for that reason alone I hope you will give them the chance at development that I think they deserve. Thank you very much.

6. THE PATH TO INDEPENDENCE

Ms. Mieko MAGAMI
Organizer
Comprehensive Cultural
Exchange Programmes
between Japan and Bangladesh

When I think of women and development, how to harness the ability of women, and make that known to the society I believe is really crucial. Let me share with you the activities I have undertaken and I would like to describe those in specific terms.

In the rural areas of Bangladesh, for 3 years from 1983 to 1986, I worked as a Home Economics expert of the Japan Overseas Cooperation Volunteers and the experiences I had in Bangladesh have lead me into the work that I do now. The volunteers' work is to provide technical cooperation by working with the local people and communicating with them in the local language. It is a government sponsored volunteer activity. The agricultural cooperative members and especially the women members were the people I worked with. Our mission was to improve the lives of the women members of the cooperative. The volunteers worked on the three projects of farming, animal husbandry, and household management.

Let me explain using the slides. This is the location of Bangladesh, I am sure you already know, but let me once again reconfirm where it is. It is surrounded on three sides by India and Myanmar. 85% of the Bangladesh population are Muslims and the remainder are either Christians, Buddhists and Hindus.

I was active in Shasha, Jessore District which is about 300 kilometers west south west of Dacca. It is very close to Calcutta, right near the national boundary. It is a purely agricultural region and if you go 300 kilometers into the village, the trees are very lush. The scenery I saw was totally different from what I expected. I expected this area to be a very poor area and I was really struck by the lushness of the area.

Our work was to improve the lives of the female members of the agricultural cooperative. The village we worked in is in the Shasha, Jessore District and the area in pink is where the office was located and the surrounding areas are all agricultural. The livestock husbandry experts, vegetable experts and the household management experts helped each other.

We tried to identify the problems but we hardly heard voices from the local people about their problems so we had to go into the village and search for ourselves. As we walked around the village, we had the impression that the village was so rich and had hardly any problems. But one day when we were making our tour at the village we met one girl who carried a box lunch. She showed us the box lunch and it contained some potato and lots of rice. She was on her way to deliver the box lunch to her father.

I met different families. They were big families with many children, and due to physical problems the fathers could not work. The mothers had problems, too. They and the families could not earn cash income. But they had a big family to feed. They did not know how to put their children to school. We found that there are lots of problems.

Then they did not know how to take care of the burns that the children suffered. This is a ten-month old baby boy - because of bad hygiene and malnutrition, he came to have problems. The lymph nodes were swollen on his leg, his skin formed pus and his health was in a miserable condition. This boy is suffering from a skin disease and I believe that this is also due to malnutrition. This is goiter, this is not caused by a simple lack of iodine but is caused by overall malnourishment. This is one of the elderly women suffering from goiter. Men can develop the same disease.

These are the female leaders of the agricultural cooperative. We had these members come to the center once a week to discuss things. Improvement of life and nutrition was the theme. Their lives could be improved by two ways. One is to improve the nutrition situation and the other is to increase cash income. And we explained these to the women.

We tried to give training to the women. For these women, it was the first time for them to receive training, so we had to explore ways to motivate them to make them enjoy the training. Here they are given a quiz and thier scores. The taller the bar, the better their scores. This is how we motivated. We also involved the male members in the activity, and gave them training.

This is Mrs. Bibi who prepared food for us, and who took care of us. She never had the chance to receive schooling. She could not read or write but she was eager to learn. She was really enthusiastic about learning things, so first she was preparing food for us, but gradually she learned about nutrition and eventually became a leader in the area of nutrition. Of course, she was married. She had a husband. She had children. She even had grandchildren.

She was a Muslim and her husband was totally opposed to her being active with foreigners, walking around the villages with us. What would the villagers think of her? He was afraid that the villagers might criticize her, might not like her, so her husband told her to stay home and to cook food for the family. And when his frustration came to a peak, he beat her and kicked her. But she really tried hard to convince her husband so that she can pursue her work and I also joined her in her efforts to convince her husband but she was the one who tried the hardest and her activities became known widespread.

In improving the nutrition situation soybeans was one thing we focused on. Of course, soybeans was just one vegetable amongst different others we dealt with to improve the nutrition condition. In Muslim society, that both female and male members sat together in one room was something new. Intensive training was given to fifteen Muslims, both men and women. We were afraid of the reactions and criticisms that might arise but nothing had to be worried about. The mothers and the fathers were totally absorbed in the topic of soybeans.

The first day we explained the meaning of soybeans and how to grow soybeans. And the second day we taught them how to cook soybeans, and of course we did not forget to teach them to wash hands before they begin cooking. Mrs. Bibi, the cook, was of course the leader here and she demonstrated how to measure water, cook soybeans and the audience seemed to be really impressed by the demonstration that she gave.

Then the members were separated into different groups to do the cooking themselves. We didn't divide the men and the women. They cooked together. Here we made milk out of soybeans. It was fairly hot and the women were teaching the men what to do when it's hot. Both men and women taught each other. And now the third day, they actually planted soybean seedlings and they of course, already had experiences of planting and working in the fields.

After three days of intensive training, could the students learn from and understand the programme? We gave a test as to how much they comprehended the course. For those who could read and write, we gave a written exam. For those who could not read and write, a quiz was given orally. They're trying very hard. Of course they cannot cheat.

And after a week, again they were asked to come to the training center to review the things they learned. The fifteen members who received training, when they go back to their respective cooperatives must teach their own members and their neighbors about what they learned. So here they are giving a presentation of how they would teach their people.

The results of the exam are given. Who got the top score? The men thought that they were the best performers, but it was a woman who got the highest score of 100 points, and men were impressed by women's capability.

Then we started visiting different parts of the village. But the rainy season came and people are not so active in the rainy season. We had some difficulty visiting different parts of the village. But in the two to three year period we're given we must fulfill our duties so even in the rainy season we walked and walked for twenty to twenty-five kilometers. Of course Ms. Bibi came with us. At every place we visited we explained how to plant soybeans, and how to cook. This is a group of mothers to whom we taught how to make okara balls from soybeans.

Many mothers never had an opportunity to make presentations in front of people. They weren't good at speaking in front of people first, but they tried very hard to prepare and explained to the group of people their cooking methods. This is traditional cooking. They introduced soybeans into the traditional recipes. So this is what is important. I learned that the soybeans should be integrated into their culture. The mothers offered their own ideas. The mothers found ways to substitute the traditional ingredient with soybeans. The dishes are displayed.

Ms. Bibi is explaining in front of all the people. But at this time she was still fighting with her husband who insisted she shouldn't go there. The fathers tried hard to compete with the mothers. This man runs a small store and he intends to sell this with other cakes, so he is trying very hard. We were right in the midst of a rainy season. It was muddy. We were soaked in the mud to our knees. It was the first time even for Ms. Bibi to walk in the rainy season like this.

Sometimes government officials would come to the village to observe what we were doing. The government officials rarely come this deep into the village. Normally they provide us with ideas, money and assistance. But from time to time they come to evaluate the activities. They showed up to see how things were going on. So the people explained to them. Unless we do that, the top people will not understand, so there should be a two-way communication. We thought it was really important that the people voice their needs and explain the conditions.

So this is the soybeans in the harvesting season. I went to meet Ms. Bibi this March and she was still active as a cooking expert and as an extension worker. What pleased me most was that her husband now shows understanding about her work. Now when she is busy he takes care of the cooking and he sees her off to the door when she leaves for work. And another thing that surprised me was that they were building their house. About 8 years ago they had to sell their land. But the two worked hard, earned cash income and bought back their land. So now they were constructing their house on that land. The two seemed very happy and eager about their new life on the land.

I did mention cash income. Cash income, of course, doesn't come easy, but it was not pursued simply for the sake of earning money. What is really important is to get enough money so that you can become independent and improve your quality of life. So that is the ultimate purpose of earning cash and that was the reason why the village women took to making and selling their handicrafts. And there was a leader of course, around whom the women gathered to produce handicrafts and to earn their income together.

The leader was Mrs. Onjoli Bhashco, a Hindu woman, who really began to spread the idea of handicraft production. This was a major step for the villagers which in turn gave us a lot of encouragement and confidence. Here, we see Mrs. Bhashco, the leader of the village. She is a Hindu. From the outset, her situation differed from that of Mrs. Moduzan. Her husband, that is Mr. Bhashco, was very supportive of his wife from the beginning and he kept encouraging her all the way.

So, with the cash income, women as well as the girls began to be able to enjoy educational opportunities. And when people became sick, fear almost always accompanied the illness. But because they now had their savings, they could buy medicine. In fact, the alleviation of fear may have been a more important factor in providing the women psychological stability.

Mrs. Bhashco organized the women in the village. They began with only 15 people but this group has grown to 800 members now.

Mr. Bhashco, as I said, was very understanding from the beginning. But one day, he told his wife. "You know, you're lucky. You always get to go to Dacca to sell your products. You must be enjoying your trips to Dacca." His wife immediately responded. "What are you talking about? Do you know all the hard work that goes into it? Why don't you come along and see for yourself?" So he did and there he saw that his wife wasn't enjoying herself at Dacca at all. She had a very busy day at Dacca and she even had 100 products retruned to her for various reasons, such as improper sewing. In fact, after returning home, she had to stay up all night mending the returned products. And Mr. Bhashco realized his folly and apologized to his wife. Since then, the collaboration between the two has become even more enhanced. Nowadays, they check the products to make sure that everything is alright before they're delivered to the retailers.

Apart from the inspection of the products, Mrs. Bhashco also provides pertinent advice to the women. She is always full of ideas - ideas on how to increase the cash income for women who really need the earnings. She also tries her best to be as fair as possible in her leadership. But the longer you're involved, the more chances there are for you to encounter problems. It is also the same with Mrs. Bhashco, who counsels and helps women with their problems personally. Whenever, I visit her, I also try and advise Mrs. Bhashco so that together we may be able to come up with ways to promote cash income business for the women.

It is really heartwarming to know that what we began there has started to blossom into tangible results. So the organization that I launched, the COMPREHENSIVE CULTURAL EXCHANGE PROGRAMS BETWEEN JAPAN AND BANGLADESH, is one effort in continuing what I have begun in Bangladesh. I wanted to help provide information about the life and the people of Bangladesh -- as well as other developing nations -- to as many Japanese as possible. My organization promotes diverse activities, such as cooking classes, language classes on Bengali, lectures, etc. Through these encounters I have been trying to share the experiences I've had in the past.

In my three years in Bangladesh, what impressed me the most was the fact that an average woman can become a true leader, if she sets her mind on it. A woman like, Bibi, for example is a grassroots person. She was never a leader before and she is just an ordinary middle-aged woman. But the fact is that she took it to her heart to take the initiative. She learned to cope with men. She was even successful in convincing her husband for support - after hard-won negotiations. So, she became a true leader, a leader that the villagers began to look up to. Undoubtedly, getting your husband's understanding and support is crucial.

In Onjoli's case, she did have her husband's full support from the outset. But as she developed her leadership qualities, she was also able to strengthen her marital relationship. So the point may be, that you need all the support you can get from your male counterparts.

One other point I'd like to make is that as Japanese, our involvement can start from our immediate surroundings. There is always something that we, as individuals, can do. The Japanese people tend to say, "What can we do? What do you want me to do? It's hopeless. I can't do anything on my own....." We tend to take a pessimistic view. But I urge you to take the initiative. Don't be just a passive onlooker or a questioner. Questions don't get us anywhere.

Progress comes from action. So the first thing you should do is to take the initiative - through concrete action, no matter how small and minor it may seem. I went to Bangladesh as an instructor of Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV), but I think I have learned so much more from the people there. I came back enriched and I feel very grateful for the opportunity.

Yesterday I met a lot of people during the reception and one person asked me a very important question. "Mrs. Magami, what was Bangladesh to you? What drove you to Bangladesh and what have you gained from it?" I hope I was able to answer all these pertinent questions in my presentation today.

Thank you.

平成３年度国際交流フォーラム
International Forum on Intercultural Exchange

「開発と女性」－国際的ネットワークを考える
‘Women in Development: towards global networking’

平成3年10月29日（火）～10月30日（水）
OCTOBER 29-30, 1991

国立婦人教育会館

NATIONAL WOMEN'S EDUCATION CENTRE
JAPAN

BEST COPY AVAILABLE

はじめに

この資料は、国立婦人教育会館が主催する「平成３年度国際交流フォーラム」のために作成したものです。

当会館はこれまで、国際交流に関心を持つ各地の団体・個人を対象に、全国レベルの国際交流集会を開催してきました。

本年度は、インド、フィリピン、英国及び国連食糧農業機関から４名の専門家を招へいして、「『開発と女性』ー国際的ネットワークを考える」をテーマに討議を行うものです。この資料が、国際交流フォーラムに出席された方々ばかりでなく、広く国際交流・異文化理解に関心を持つ方々の参考になれば幸いです。

終わりに、国際交流フォーラムに参加し、本フォーラムのために快く執筆をお引き受けくださった専門家の方々にお礼を申し上げます。

平成３年１０月

国立婦人教育会館長
前田瑞枝

もくじ

Ⅰ　平成３年度国際交流フォーラム開催要項 ―――― 1

Ⅱ　議長・パネリストのプロフィール及びコメント ―――― 9

Ⅲ　発表要旨 ―――― 41

《セッション　Ⅰ：「開発と女性」へのアプローチ》 ―――― 43

1「急激に変貌する社会における
男女のありかたに対する理論的アプローチ」 ―――― 45
ウーマンカインド代表　ケイト・ヤング

2「農村の女性：開発におけるパートナー」 ―――― 46
国連食糧農業機関（ＦＡＯ）アジア太平洋
地域事務所開発と女性担当官
アレクサンドラ・スティーブンズ

3「日本における『開発と女性』論への取組み
―文化人類学的視点から―」 ―――― 49
津田塾大学助教授　菊地京子

《セッション　Ⅱ：「開発と女性」に係わる活動現場から》 ―――― 51

4「ＳＥＷＡの経験」 ―――― 53
自営女性協会(SEWA)会長
イーラ・ラメシュ・バット

5「フィリピン官僚制度における女性の現状及び課題」 ―――― 59
フィリピン公務員委員会(CSC) 会長
パトリシア・サント・トーマス

6「自立への道程」 ―――― 61
バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰
馬上美恵子

Ⅰ. 平成３年度国際交流フォーラム開催要項

BEST COPY AVAILABLE

平成３年度国際交流フォーラム開催要項

１．趣旨

社会・経済の開発における女性の現状及びその役割、女性の視点を入れた開発について国際的な広がりを持つ意見交換を図るとともに、地球レベルの女性の連帯を意識した国際交流や国際協力、さらに生涯学習等のあり方について討議を深め、あわせて同分野における国際的ネットワークの形成に資する。

２．主題「『開発と女性』一国際的ネットワークを考える」

３．主催・会場　国立婦人教育会館

〒355-02　埼玉県比企群嵐山町菅谷 728
TEL:0493-62-6711(代)

４．期日　平成３年１０月２９日（火）～３０日（水）　1泊2日

５．パネリスト等

日本の専門家　　３名

・目黒依子氏（議長）	上智大学教授
・菊地京子氏	津田塾大学助教授
・馬上美恵子氏	バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰

海外からの専門家　　４名

・イーラ・ラメシュ・バット氏(ｲﾝﾄﾞ)	自営女性協会(SEWA)会長
・アレクサンドラ・スティーブンズ氏（FAO）	国連食糧農業機関(FAO) アジア太平洋地域事務所開発と女性(WID) 担当官
・パトリシア・サント・トーマス氏(ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ公務員委員会(CSC) 会長
・ケイト・ヤング氏（英国）	ウーマンカインド代表

６．使用言語　日本語及び英語（同時通訳付き）

７．参加者数・人数

（１）国際交流・国際協力・異文化理解等の活動をしている団体・グループのリーダー、同分野を専門とする行政担当者及び研究者、その他同分野に関心を持つ者。

（２）定員約１００名

８．申込方法・決定通知

（１）申込方法

下記について、別紙申込書に記入の上、返信用封筒（６２円切手貼付）を同封して、国立婦人教育会館情報交流課に申し込む。

(ｱ) 氏名、性別、年齢、住所、電話番号、職業

(ｲ) 関係している団体・グループ名

(ｳ) 当日に国際交流関係の資料（団体の活動紹介パンフレット、刊行物等）の配布を希望する場合は、その旨を記載する。

（２）申込期限　　平成３年８月３１日（土）

（３）決定の方法

申込多数の場合は抽選を行い、参加者に直接通知する。

９．所要経費

（１）参加費は無料

（２）交通費、宿泊費及び食費は参加者負担

★　宿泊費：１人１泊　820円　（前泊・後泊は１泊 1,300円）

★　食　費：１人３食　2,500～3,000 円程度

（各自カフェテリア方式の食堂で現金払い）

★　懇談会（10月29日の夕食を兼ねる）：１人　3,090円（消費税を含む）

（３）なお、引き続き「開発と女性」にかかる懇談会に参加される参加者の旅費（居住地からの交通費、日当、宿泊費）は主催者が負担する。

１０．日程及び内容

第１日　１０月２９日（火）

（１）受付　【12:10 ～ 13:10】

（２）開会　【13:10 ～ 13:50】

⑺ 主催者挨拶	国立婦人教育会館長
⑷ パネリスト等の紹介	国立婦人教育会館職員
⑼ 議長挨拶	目黒依子氏　上智大学教授

（３）セッションⅠ：「『開発と女性』」へのアプローチ【13:50 ～ 17:00】

『開発と女性』に関する視点や方法について、諸外国の経験と情報を通じて理解を深める。

◆報告（13:50 ～ 15:20）

・ケイト・ヤング氏　ウーマンカインド代表

「急変に変貌する社会における
男女のあり方に対する理論的アプローチ」

・アレクサンドラ・スティーブンズ氏
国連食糧農業機関（ＦＡＯ）アジア太平洋
地域事務所開発と女性（ＷＩＤ）担当官

「農村の女性：開発におけるパートナー」

・菊地京子氏　津田塾大学助教授

「日本における『開発と女性』論への取り組み
－文化人類学的視点から－」

《休憩》（15:20 ～ 15:40）

◆討議（15:40 ～ 17:00）

（４）懇親会【18:00 ～ 19:30】

第２日　１０月３０日（水）

（５）セッションＩＩ：「『開発と女性』に係わる活動現場から」

【9:00 〜 12:00】

女性の地位向上に資する開発のあり方について、実践現場から報告を受け、同分野に係る国際的連帯の現状と課題を探る。

◆報告（9:00〜10:30)

・イーラ・ラメシュ・バット氏　　自営女性協会（ＳＥＷＡ）会長

「ＳＥＷＡの経験」

・パトリシア・サント・トーマス氏　ﾌｨﾘﾋﾟﾝ公務員委員会（ＣＳＣ）会長

「フィリピン官僚制度における女性の現状及び課題」

・馬上美恵子氏　　バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰

「自立への道程」

《休憩》（10:30 〜 10:40)

◆討議（10:40 〜 12:00)

（６）セッションＩＩＩ：「全体討議」【13:30 〜 15:00】

セッションＩ及びＩＩを受け、『開発と女性』に係る問題や課題についてパネリスト・一般参加者の参加による討議を行う。

（７）閉会【15:00 〜 15:10】

165

日程表

	10月29日（火）		10月30日（水）	
9:00				
10:00			セッションＩＩ： 「『開発と女性』に 係わる活動現場から」	大会議室
11:00				
12:00	受付（大会議室前カウンター）		昼食	食堂
13:00	開会	大会議室		
14:00	セッションＩ： 「『開発と女性』への アプローチ」		セッションＩＩＩ： 「全体討議」	大会議室
15:00			閉会	
16:00				
17:00				
18:00	懇親会			
19:00				
	自由交流			

II. 議長・パネリストのプロフィール及びコメント

BEST COPY AVAILABLE

目黒依子(めぐろ よりこ)

現職：上智大学教授

略歴：ケイス・ウェスタン・リザーヴ大学大学院博士課程修了
社会学博士

専門分野：社会学

著書・論文：『リーディングズ現代家族』（共編）（1987）
『個人化する家族』（1987）
『女役割―――性支配の分析』(1980)
など

コメント

国際協力や国際理解は、ヒトとヒトの交流を通してこそ、その目的にかなうのではないかという考え方は、日本の国際援助のあり方についても影響を与え始めているこの頃です。「国際社会における日本の貢献」が茶の間の話題になる中で、政府開発援助（ＯＤＡ）についても批判があり、特に昨年あたりからは、ジェンダーの視点が欠けていることが明らかになってきました。遅ればせながら、ＯＤＡ実施機関としての国際協力事業団（ＪＩＣＡ）では、「開発と女性」援助研究会を発足させ、私もそのメンバーの一員として、「開発と女性」（ＷＩＤ）についての日本の立場・考え方の検討に参加しました。

「開発における女性」にはいくつかの側面がありますが、一応、開発途上国の女性の現状分析に基づく地位向上ということを考えてみると、１０年以上も前に、経済先進国の中で日本の女性の状況を分析していて、途上国の女性の問題を理解することなく先進国の平等の問題に接近することがいかに不充分であるかということを感じました。それ以後、途上国の女性については、４年程前にモントリオールで開かれた会議で、抑圧された状況にある女性たちについての報告を聞き、認識を新たにした経験があります。その間、世界経済システム論や従属論など南北構造を分析する枠組みの検討が盛んになり、「開発」の意味が問い直されてきましたが、そこでも欠落していたのがジェンダーの視点だったといえるようです。

開発援助については、国際機関を中心に「開発と女性」（ＷＩＤ）は女性の地位向上達成と結びついて積極的に推し進められてきており、そのインパクトを日本政府もＮＧＯも受け止めようとしているようです。

研究者として考えると、この挑戦的なテーマに取り組む準備が、今ようやく出来てきたような気がしています。

ケイト・ヤング(Kate YOUNG)

国籍：イギリス

現職：ウーマンカインド代表

略歴：1976年　　ロンドン大学社会人類学博士

1970年　　ロンドン政治・経済大学社会人類学大学院ディプロマ

1989年　　ウーマンカインド開所(3月 8日)

1988年　　サセックス大学開発研究所を２年間休職し、発展途上国の婦人団体支援を目的とする慈善団体ウーマンカインド（世界組織）を設立

1977年－1990年　サセックス大学開発研究所研究員、以下の各テーマに関する講義、会議、ワークショップ、セミナー等を担当。

開発の過程　における女性の恒常的な従属的地位、カリブ海地域における女性の社会的生産、児童の労働、東南アジアの観光・輸出産業における女性労働、フェミニスト研究の現代的課題、農村婦人研究の諸方法、女性、男性及び開発、性と開発。

主な研究実績：

1987年	政策過程における利点と障害（英連邦事務局）
1986年	新興工業国における女性の雇用と技術（ＩＤＲＣ） （研究助手　Ｆ・ヘンウッド）
	家庭内労働分担における性の問題：ザンビア北部州における農業システムの変化。（ＯＤＡ：ＥＳＣＯＲ） （研究担当官　アリソン・エヴァンズ）
	第三世界の家計予算（ＥＥＣ指導員訓練プロジェクト）
	女性の参加促進のための政策：福祉と公平の問題 （英連邦事務局）
1985年	国、地域、地方レベルにおける計画への女性の問題の組み入れ （ユネスコ）
	働く女性への支援策（英連邦事務局）
1982年－1985年	フィールドワーカー及び活動家に適した研究方法論の研究
1982年－1984年	工業国及び新興工業国における過去及び現在の下請けと職場外作業に関する文献研究
1979年－1980年	いわゆる非公式部門における女性の参加に関する文献研究
1978年－1982年	過去及び現代の社会における出産パターンの変化に関する文献研究

1975年	小作農経済に対する女性の経済的貢献に関するメキシコ、オアハカ州シエラ・デ・フアレスでの現地調査。
1971年－1972年	小規模小作農及び零細商品生産の地域からの国内移民の原因に関するメキシコ、オアハカ州での現地調査

主な著書：

1991年	『差異の世界』（マクミラン、ロンドン）
1990年	「人口：女性の過酷な現実」、『コンサベーション・ナウ』第１巻４号
	家庭資源管理：性と世界の開発のモジュール６；ＥＥＣ／ＬＤＳ指導員訓練プロジェクト
	「現在から２０００年までの女性の雇用機会と制約」、『開発』、１号（青年女性に関する特別号）
1989年	『２人の主人に仕えて：開発における第三世界の女性』（編者）（アライド出版　インド）
1988年	『女性と経済開発：地方・地域・国家計画戦略』（編者及び序文）（ベルグ／ユネスコ、1988年）
	家庭労働の分担における性の問題、ＯＤＡの海外研究のための経済・社会委員会（ＥＳＣＯＲ）へのレポート

1986年

『女性の問題と計画：地方・地域・国家計画への女性の参加促進のための方法論的アプローチ』（社会・経済研究１３号）（編者及び序文）（ユネスコ、パリ）

「女性、男性、開発」、ア・ラオ編『開発訓練への性の問題の組み入れ』所収（人口委員会東南アジア地域事務所、バンコク）

「政策過程における利点と障害」（英連邦事務局）

1984年

「生殖と性による階級」、社会的不平等と性による階級に関するＳＳＲＣワークショップでの発表論文

「見えない存在には戻らない：８０年代の実行可能な研究戦略」、ＣＵＳＯジャーナル

「ＩＤＳ女性グループの将来の緊急評価」、『ＩＤＳブリテン』第１５巻第１号（１月）

1983年

「家庭労働、工場労働」、ベトナム、ハノイでの女性・雇用・家族に関する討論会発表論文

「あらゆる女性のジレンマ」、ユーゴスラビア、ドゥブロブニクの大学交流センター大学院の講座女性と労働での発表論文

「女性と労働と人口変化」（シーラ・スミスとの共著）、ロンドンでの社会主義経済検討会議における発表論文

「相対的余剰人口の創出：メキシコでのケース・スタディー」、Ｌ・ベネリア編『女性と開発：農村社会における性による分業』所収（プリーガー、ニューヨーク）

	「西洋のフェミニズムと開発：英国の場合」（シーラ・スミスとの共著）、セネガルのダカールで開催されたＡＡＷＯＲＤ／ダグ・ハマースクジョルド財団の会議女性参加のもう一つの開発のための論文。「女性の不利益：英国における資本主義の発展と社会主義の代案」という題で、『開発のための対話』1982年 1号、 2号に掲載される。
1981年	「働く児童たち：国際的視点から」（Ｖ・ゴダードとの共著）ＩＤＳ／奴隷制度反対協会の児童の労働に関するワークショップのレポート。後日『開発と変化』の特別号（1982年13巻 4号）として出版。
1980年	「資本主義農業と女性の役割の変化の分析に対する方法論的アプローチ」、『農村開発における女性：極めて重要な問題』（ＩＬＯ、ジュネーブ）
1978年	「分配の方法」、Ａ・Ｎ・ウォルペ、Ａ・クーン編『フェミニズムと物質主義』所収（ルートレッジ＆ケガン・ポール、ロンドン）
1977年	「女性の賃金」、『新国際主義者』（オックスフォード）

コメント

女性と国際協力

まだ学生だった頃、私は「人間は誰一人として自足している島ではない。全ての人間は『大陸』の一部なのだ」という有名なジョン・ダンの詩の一節に非常な感銘を受けました。それは、その詩が人間の能力全般について歌っていたからではなく、私の深層での深く感じるものに訴えていたからでした。今こそ女性は社会に根付いて、他の人々と結びついていると言う意識を、男性は経験しないような形で強く体験していると言えましょう。

人生体験を通して、私はより大きな全体に帰属しているという意識を強めてきました。そして、自分を懸命に向上し、また、他の人々の躍進のために働いている世界中の女性に会うとき、特別な喜びと畏怖の念を同時に覚えます。喜びを感じるのは、その人々との間には、文化、年齢、階級、または人生における大きな差異が存在することがあるにもかかわらず、互いに結びついているのだという意識を経験するからです。畏怖の念を覚えるのは、その人々が、多くの場合、社会的にも、経済的にも、乏しい資金しか有していないにもかかわらず、優れた独創性とヴィジョンを持って、大きな不平等と闘っているからです。いつの場合にも、女性の持つねばり強さ、勇気、静かな知恵から必ず何か新しいものを学んだことに気づきます。理解したいという熱意から、ときには憤慨の原因を作っていることもあるかもしれません。が、私にとって、人々との接触は欠かせないことであり、それによって、女性たちの主張を再確認しているのに気づきます。言い換えれば、気力が増し、希望がよみがえってくるのです。

国際的な出会いは豊かな交換の場となる可能性を秘めていますが、メキシコ大会以降の出来事は既に周知のごとく、大きな意見の衝突の場ともなり得ます。そうです。互いに聴くことによってだけではなくオープンに、差違に根ざした悪意を持たずに話すことによって気持ちを共有できるのです。互いの相違点と代替意見を探究すること、尊重しあうのでなければ、国際的な出会いの場はフラストレーション、時には怒りの気持ちを残しかねません。

今日は混乱した時代であると言えます。道を示す星は光が失せ、理にかなう、人類平等主義の発展が比較的簡単にもたらされるであろうという初期の希望はくじかれてしまいました。地球規模の連帯が中心的な役割を担うような新しい未来のヴィジョンが強く求められています。私は、女性たちが既にそうした新しいヴィジョンに向かって手探りで進み始めていると信じます。が、それを一生懸命に発展させ、受け入れられ実施されるように、国際的レベルで組織しなければなりません。そうでなければ、世界各地で、貧困の中に暮している何百万人もの人々には未来が明るいものではありません。実際には、以前にも増して悲惨な大虐殺や災害がもたらされる恐れがあります。つまり、消耗と、顧みられないままあたら命を失う数知れない女性、充分に栄養を取ることができずに、むざむざと死を迎える何百万人もの子供、互いに殺戮しあう戦争の犠牲となる男性が後を絶たないことになります。

ジョン・ダンの詩は次のように結んでいます。「人の死は、私自身にとっての損害である。なぜなら私は人類の一部だから。それゆえ、誰がために鐘が鳴るのか問うなかれ。そは汝のために鳴れり。」

アレクサンドラ・スティーブンズ(Alexandra STEPHENS)

国籍：ニュージーランド

現職：国連食糧農業機関（ＦＡＯ）アジア太平洋地域事務所　開発と女性担当官

略歴：

1974年	英国レディング大学農村社会開発学修士
1967年	ニュージーランドにて教育学・中等教育教授学大学院ディプロマ
1964年	ニュージーランドオタゴ大学家政学学士
1984年－現在 (6年間)	ＦＡＯ地域社会学専門官・開発と女性担当官。農業・農村開発への女性の参加促進のためのプログラムに対して技術支援、プロジェクトの立案・策定モニター・評価を行なうとともに、小規模農民開発プロジェクトや草の根参加プロジェクトへの技術支援や訓練を行なう。
1984年	パキスタンにおける食糧損失防止プロジェクトの社会学面でのコンサルタント。ＦＡＯアジア太平洋地域事務所で２カ月間農村開発と女性担当官コンサルタントを務める。
1980年－1983年 (4年間)	国連職員５人、リベリア人スタッフ６人のチームによる、リベリア東部における国連ＤＴＣＤ自助村開発プロジェクトの

	主任技術顧問。予算３００万ドルという小規模総合農村開発の自助プログラムへの草の根の参加を促進する先駆的プロジェクトを指導。
1979年－1980年 (1年間)	ローマのＦＡＯ本部にて、小規模総合農村開発プロジェクトのプログラム・プランニングならびにプロジェクト・デザインを行なう。タンザニアで２カ月間、人口・農村生活開発の成人教育カリキュラム開発に従事。スリランカとリベリアで各１カ月間、食糧損失防止プログラムのコンサルタントを務める。
1975年－1979年 (4年間)	パプア・ニューギニアにおけるＦＡＯ農村生活開発プロジェクトのチーム・リーダーを務める。このプロジェクトは、ディプロマ・レベル、サーティフィケート・レベルの農業大学に農村生活開発の講座を開設し、農業エクステンション・サービスに女性を組み込み、現在のエクステンション・スタッフに農村生活開発のための現場訓練を行なうことを目的とするものであった。
1970年－1973年 (4年間)	マレーシアでのコロンポ計画に連邦土地開発局顧問として参加。マレーシア半島全域にわたる１００余の入植計画において土地入植者の扶養家族（女性と子供）に対するエクステンション・サービスの確立、職員訓練、計画、組織化活動を行なう。
1968年－1970年 (2年間)	フィジー医科大学にて栄養チューターとして、ニュージーランド政府の海外ポランティア活動に従事。（フィジー、スバ)

1965年－1966年　　ニュージーランド、ワイミア大学にて中等教育に従事。

(2年間)

コメント

女性であることの喜びを讃えるのは易しい。重荷と悲しみを和らげる行動を計画するのははるかに難しい。全ての国でまず行なわなければならないのは、女性の問題を明確にすることである。もう一度言うが、問題を明らかにすることである。なぜなら問題を正確に把握することによって、それらに取り組むカギを用意できるからである。明らかにすることによって、その問題に焦点を絞り、それに関する情報を収集し、それに立ち向かうことができる。女性が直面している多くの問題がまだ明確にされておらず、目に見えず、定義されず、認識されていない。この状態が続く限り、我々の問題を解決するために必要な行動を取ることはできない。

一例を挙げると、女性に対する暴力がある。女性に対する暴力は、「家庭争議」「セクシャル・ハラスメント」「夫婦間の緊張」等、間違った名前で呼ばれることが多い。女性に対する暴力についての正確なデータはどの国にも全くない。多くの形の暴力が暴力と認識されておらず、名前がなく、殴打される女性自身さえ認識していない場合が多いからである。より実際的で日常的な例としては、女性の労働がある。現在の情報は女性が行なう労働の僅かな部分しか反映していない。女性の家事労働は「労働」とは呼ばれない。家庭で働く女性は「失業者」「扶養家族」「福祉の対象者」である。失業者の統計ではこうなっており、我々は長年これを甘受してきた。我々は国勢調査やその他の調査の用紙に「主婦」と記入することによって、自分が「失業者」であると認めてきた。友人と話す時、自分は「働いていない」と言ってきた。男性は自分の妻が「働いていない」と自慢する。

これによって、女性は目に見えない存在になる。女性は、国の「公認の労働者」を無料に産み、育て、維持する、物言わぬ勤勉な労働力であり、その過程でより満足感の得られるより生産的な貢献のチャンスを捨てるのである。これが「問題」である。これは女性にとって問題であるが、世界の進歩を望むすべての人にとっても問題である。

文化交流は、ネットワーク作りと団結によって、女性の可能性を否定することでそれを圧迫、抑圧する勢力に立ち向かう一助になり得る。これを論理的に行うためには、女性はまず、女性および女性の役割に対する文化の影響を理解しなければならない。世界中の女

性がそのセックスとジェンダーを理由に不利な立場に置かれているということは既知の事実であるが、女性の立場を不利にする問題に取り組むためには、それらの問題の根源を、個々の文化、宗教、農業生態学的生活様式の文脈の中で、農村または都会の文脈の中で、そして政治・社会・経済的枠組みの中で知る必要がある。そうして初めて、世界の人口の半分を占めるグループである我々女性は、団結して互いに支え合いながら抑圧の根源に立ち向かうことができるのである。

我々一人一人が小さな貢献をすることができる。これが集まれば革命になろう。フィリピンではフェミニストたちはこれを「静かな革命」と呼ぶ。他の国では騒々しい場合もあるだろう。これが真に国際的な勢力になれば、大きな轟きとなろう。人生のこの時点での私自身の貢献について述べさせていただきたい。私は自分の所属する機関、食糧と農業に関する統計データの収集、編集、分析を行うＦＡＯという機関で革命を起こしたい。これらのデータには女性の農業従事者あるいは農村女性に関する情報は事実上全くない。人口、保健、教育の分野の若干の統計が性別に分類されてはいるが、統計は一般に男性が何を持っているが、何をしているか、農村の男性がどれだけの所得を得ているかを示している。私の仕事の中で、私は農村女性が何をしているか、何を持っているか、どれだけの所得を得ているかを知りたいと思う。

これらの問いに対する答えを見つけるために、我々はアジアの数カ国で試験調査を行ってきた。既存の統計はひどく間違っており、大きな誤解を招くものである場合が多いからである。新しい調査手段と新しいデータ収集法を使った調査が、インド、マレーシア、パキスタン、タイで実験的に行われた。これは既に小さな革命である。なぜなら我々が発見したことは、男性ならびに女性が女性の労働について語ることと大きく異なっているからである。我々はこの新しい情報を直ちに女性グループにフィードバックし、これらの女性グループがさらに、この新しいデータで小さな革命を起こすのである。

女性に関するこの新しいデータのすばらしい点は、どの国においても普通の女性が自己の状況に対する理解を深めるのに役立つということである。これはデータ収集システムであると同時に意識覚醒の教育プロセスでもあるため、これから出発してさまざまな文化全体にわたっての理解を深めることが可能になる。

情報は力を与え、力は女性の前進のカギであると言われる。しかし、今までは女性に関する情報の多くが不正確で誤解を招くものであったため、力を与える可能性は限られていた。世界中の女性について研究するための新しい調査手段によって、その可能性が解き放たれ、世界が変革されるに違いない。

菊地京子(きくち きょうこ)

現　　職：津田塾大学・学芸学部・国際関係学科　助教授

略　　歴：1979年　東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程中退
1973年　東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了
1970年　フィリピン大学大学院人類学研究科留学
1968年　上智大学大学院文学研究科修士課程修了

所属学会・研究会：日本民族学会　国際開発学会　アジア政経学会　比較家族史研究会

専門分野：社会人類学

著書・論文：「フィリピンからの国際労働力移動」、『社会科学討究』 106号
（早稲田大学社会科学研究所、1991）
「開発における女性の役割」、『外交フォーラム』 4月号
（世界の動き社、1990）
『東南アジアの社会学』（共著）（世界思想社、1989）
『女の文化人類学』（共著）（弘文堂、1982）

コメント

アメリカやイギリスのデパートやスーパーマーケットで売られている商品の中に、韓国や台湾、香港などのアジア・ニーズの製品をはじめ、マレーシア、フィリピン、インド、パキスタンといった「第三世界」の製品の多いことに驚かされる。ブランド物のみ扱う高級専門店へ行けば、made in USA にも made in UK にもお目にかかれるのだろうが、そうした店にはウィンドショッピング以外にはあまり縁のない庶民としては、買物の対象として出会うのは香港製のＴシャツであったり、韓国製のスニーカーであったりする。

ロンドンやニューヨーク、あるいはボストンのホテルやレストランの従業員に外国人労働者が多いのにも驚く。長年、フィリピン研究に浸かっている身としては、ロンドンのホテルのルームボーイがフィリピン人であったりすると、異境の地で思いがけず「同郷の友」に出会った感激を味わったりする。

しかし、「豊かな」（はずの）イギリスやアメリカは今や「貧しい」（はずの）第三世界の商品や労働力に席巻されかねない状況を目の前にすると、「モノ」の流通や「ヒト」の往来が国境を越えて盛んに行なわれ、いわゆるボーダーレス時代の進行がますます加速されていく感を免れない。そして、欧米先進諸国はそうしたボーダーレス時代の恩恵に支えられて辛うじて存続しえているように見えてしかたがない。

この夏、訪れたボストンはニューイングランド特有の美しい街並みと近代的高層ビルとが程よく調和した、観光客には大変魅力的な都市ではあるが、ボストンっ子が「Ｔ(ティ)」と呼んでいる地下鉄の構内にも、夏の休暇を利用して全米各地からやってくるアメリカ人観光客で連日賑わうクインシーマーケット周辺の街頭にも、小銭の入った古帽子や空缶を前につくねんと座り続ける「お貰いさん」の姿が目に付く。それが、どう見ても働き盛りの、筋骨隆々たる男性だったりすることが多く、ホームレスでお腹が空いていると書かれたボードを見せられても、もうひとつ哀れを誘わないのだが、しかし、新聞が報じているアメリカにおける失業率の高さだけは充分納得がいく光景であった。

「豊かさ」の中の貧困と「貧しさ」の中の富裕という矛盾の構造を背景に国際援助や国際協力が行なわれている現実を私たちは見落としていないだろうか。勿論、第三世界の多くの人々、（ほとんどの人々というべきかもしれない）は、本当に援助の手を切実に必要としていることも事実である。途上国の中には総人口の８割もの人々が貧困線以下の生活を余儀なく送っている国が存在しているのも事実である。一方、先進諸国のＯＤＡ（政府開発援助）が決して「善意」だけで行なわれいているなどと、だれも信じていないことも充分承知の上である。援助供与国側が国内に失業を始めとする様々な社会問題を抱えながら、国際援助を行なっている意図やその背後のからくりにも、もう少し私たちは目を向けることがあってもいいのではないだろうか。それと同時に、国際援助の実効性を高めるためにはどうすべきなのか、つまり、援助の供与国側と受容国側との双方に、従来とは異なる何らかの新しい工夫が凝らされる必要があることを問題にしたいのである。

国際援助や国際協力に最初から「援助」や「協力」の概念が全く盛り込まれていないなら、話は別である。「援助」の名目の下に「搾取」が行なわれているのなら、何もしないより罪深いことにならないだろうか。

イーラ・ラメシュ・バット(Ela Ramesh BHATT)

国籍：インド

現職：ＳＥＷＡ（自営女性協会）会長

略歴：1990年　国家計画委員会（５カ年にわたる国の総合計画を審議する最も権威ある委員会ー在ニューデリー）委員

1986年－1989年　国会（上院）議員：大統領指名による

1987年－1988年　国家自営女性委員会（ニューデリー）委員長

1985年　女性の世界銀行（Women's World Banking）（ニューヨーク）会長

1972年　ＳＥＷＡ協同組合銀行（アーメダバード）会長

著書・論文：1975年　『Gujarat ni Nari （グジャラティ地方の女性）』

1975年　『Profiles of Self Employed Women （自営女性の横顔）』

受賞：1990年　創造に携わる女性に贈る賞、女性同盟（パリ）

1986年　パドマブシャン賞（傑出した活動を行った人に与えられるインドの最も権威ある賞）

1985年　パドマシェリ賞（傑出した活動を行った人に与えられるインドの権威ある賞）

1984年　もう一つのノーベル賞（ライト・ライヴリフッド賞）（ストックホルム）

1983年　１９８３年度ベスト女性企業家（ニューデリー）

1982年　国家統合に対するスーザン・アンソニー賞

1977年　地域社会指導に対するマグサイサイ賞（フィリピン）

コメント

（イーラ・バット及びＳＥＷＡについて）

ＳＥＷＡ（自営女性協会）を支える指導者であり、地域社会指導に対するマグサイサイ賞（1977年）の受賞者であるイラベン・バットは、経済のインフォーマル・セクターで働き、生計を支えている、貧しい女性たちを組織化する活動で最も良く知られている。「アーメダバード繊維労働協会」婦人部の活動を通じて、イーラは、縫い子、野菜売り、手押車引き、いかけ屋、牛乳生産者等として生活の糧を得ようと苦闘している自営女性の窮状に関心を持ち始めた。１９７５年に産声をあげ、１９８１年に独立機関となったＳＥＷＡは、女性の搾取と闘いを支援し、信用供与を確保し、会員の発展を助長することを目的とした組合である。ＳＥＷＡの会員は２万人を越え、様々な部門から選ばれたリーダーたちから成るチームが管理運営にあたっている。ＳＥＷＡは露店商や行商人を警察のいやがらせから守り、またこれらの商人たちが公有地で商売する権利を守るために闘い、勝利をおさめてきた。貧しい女性が融資を受けるのを助け、読み書きの不自由な女性にも銀行が利用できるようにと手続きを簡素化することを目的に、ＳＥＷＡはマヒラ協同組合を設立した。同行は現在多額の資金を扱って会員が融資を受けられるように支援している。この銀行の運営には女性専門家があたり、また様々な労働者団体の代表者で構成される理事会が監督している。

現在ＳＥＷＡの活動は女性生産者協同組合（職人や商人の協同組合から土地や家畜に係わる組合まで）向けの識字教育、職業教育、法律教育、あるいは保育所、出産手当、低家賃住宅、健康保険、サービス事業協同組合、家族による権利侵害やセクシャル・ハラスメントからの保護、調和ある共同体推進運動など、インフォーマル・セクターに働く女性のための数多くの関連活動にまで広がっている。ＳＥＷＡは国内の他の地域で活動する同様の組織の発展を刺激し、またＳＥＷＡ自体の活動基盤も他の地方に拡大している。

現在イラベンは、ＳＥＷＡ会長及びＳＥＷＡ協同組合銀行頭取を務めるとともに、全国レベル、国際レベルの要職にもついている。女性の世界銀行・現会長であり、またメキシ

コ、コペンハーゲン、ナイロビでの世界女性会議ではメイン・パネリストを務めた。インド国会（上院）の大統領指名議員を１９８６年から４年半にわたって務め、インドにおける自営業者の主義主張を熱心に擁護した。彼女は「自営女性およびインフォーマル・セクターの女性に関する国家委員会」の委員長を務め、同委員会として「SHARAM SHAKTI（『労働力』）」と題する報告書を１９８８年に提出した。国家計画委員会の雇用、労働及び未組織労働者担当委員の職も務めた。

パトリシア・A・サント・トーマス（Patricia A. Sto. TOMAS）

国籍：フィリピン

現職：フィリピン公務員委員会会長

略歴：	1985年－1986年	ハーバード大学行政学修士
	1973年－1976年	フィリピン大学ロス・バーニョス校 開発コミュニケーション学修士
	1965年	ファー・イースタン大学学士（政治学）
	1988年－現在	公務員委員会会長（上級公務員委員会会長、官公庁部門労務管理審議会会長、外交官試験官委員会委員）
	1987年 7月－1988年 3月	労働・雇用省次官
	1987年 1月－ 6月	教育・文化・スポーツ省次官補
	1982年 5月－1987年 9月	フィリピン海外雇用局長

	1981年 9月－1982年 3月	国家賃金審議会主任担当官
	1981年 9月－1982年 4月	労働・人材研究所専務理事
	1978年11月－1979年 5月	国家人材、青年委員会地域人材開発担当官
	1978年－1979年	フィリピン大学労使関係研究所講師
	1977年	国連開発計画による農村開発のための通信技術プロジェクトのコンサルタント
	1973年－1975年	フィリピン大学ロス・バーニョス校講師
	1971年－1973年	フィリピン・ガール・スカウト広報部長
	1970年－1971年	投資委員会スタッフ・アシスタント
	1964年－1966年	フィリピン上院職員
その他：	1991年－1992年	フィリピン行政協会会長
	1991年 9月－10月	フィリピン女性の役割に関する国内委員会／カナダ国際開発局調査使節団メンバー（カナダ）
	1990年 7月	行政への女性の参加を促進する政策開発作業グループ会議参加（マレーシア、クアラルンプール）
	1982年	「国家に貢献した優秀な女性１０人」の行政部門受賞者

	1982年－1986年	１７カ国におけるフィリピン人労働者の賃金・労働条件に関する交渉、使節団にメンバーあるいは責任者として参加
	1980年、1983年、1985年	ＩＬＯ年次総会フィリピン代表団メンバー（スイス、ジュネーブ）
	1977年－1987年	１０カ国で開催された海外雇用、研究、訓練、賃金等に関するセミナー、会議、ワークショップに計３２回出席
著書：	1987年	ＩＬＯのための海外雇用の統計マニュアル
	1978年	第４地域諸州の通信の普及レベルと利用可能度ならびに社会・経済レベル

その他、海外雇用、賃金、公務員、人材開発、政策研究等に関する論文１７編

コメント

完全な男女の平等を妨げている歴史的な不均衡を排除しようとの運動は、婦人参政権論者が参政権を求めて立ち上がって以来、大いに促進されてきた。女性は、政策や行政改革といった面では、過去２０年の間に、それまでの長年にわたる結果に比べ、格段の成果を上げた。しかし、大きな進展を見てはいるものの、このような努力は国により大きな格差があり、闘いは続いている。

私は公務員委員会会長という職務上、また政府の政策の策定方法および政府の諸計画と実際の業務の最終的な策定方法の決定には、官僚が大きく関与しているという認識から、官僚制度における女性というテーマに関心を抱いている。フィリピンでは女性公務員の数が多いが、これは公的部門の賃金が低いことから生じた結果なのである。女性は従来稼ぎ手としては２番手と考えられていたため、低賃金の職を担ったのである。しかし、かつては低賃金のために女性に割り当てられたこの職も、現在ではひとつのチャンスと考えることも可能であるし、またそうなるべきである。女性の一般公務員が増えるにつれ、理論的には、政策決定の責任ある地位にまで昇進する女性も増えるはずである。そうすれば、男女の差別は減り、平等が促進されるはずである。しかし現実には、この理論上の可能性は、私の発表原稿でも説明したように、数々の要因によって、その実現を妨げられてきた。フィリピンの公務員制度のなかで、私たちはこういったマイナス要因を何とか除去しようと努力を続けている。

国際的レベルでは、我々皆が注視していかなければならない問題が数多くある。私は１９８６年まで、フィリピン海外雇用局長を務めていたが、多くの女性が、海外のとりわけ低賃金のサービス産業で職を得るため、出稼ぎに行くのを目の当たりにした。これらの女性はとりわけ搾取や虐待の対象となりがちであった。実際のところ、かつては女性の出稼ぎ労働者は全体の１５％たらずであったが、発生する問題の８５％は女性労働者に関するものであった。現在、女性は出稼ぎ労働者の４０％で、苦情や問題のうち女性労働者に関係するものは７５％を占めている。二国間あるいは多国間の措置を含む外交的取り組みなど様々な対策が採られてきたが、いずれも成果は少ない。受入国の女性は、外国人女性のために闘うべきではないだろうか。現行法では、外国人女性の代表は（彼女らの国の政

府も含め）、搾取や虐待の取り締まりに介入する権限はほとんどない。しかし、その国の女性たちにはその権限があり、また国際的なネットワークに入っていれば、国際世論の力をもって当局に圧力をかけることもできる。

外国、とりわけ先進国に恒久移民として移住し、今ではその国の発展に貢献しているフィリピン女性については、この頭脳流出に対する補償として援助を検討すべきではないだろうか。わが国では、国家の補助金による教育制度の下で医師や看護婦が育成されているが、その多くが外国で働くことを希望するため、フィリピン国民は十分なヘルス・ケアを受けられない状態に至っている。

アジア地域に、女性政策研究所が設立され、より綿密な調査研究を通じて国内及び国際的な諸問題に取り組むことを期待している。本会議でこの勧告が取り上げられるよう希望する。

馬上美恵子(まがみ　みえこ)

現　　職：バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰（ロシュン料理教室、ベンガル語クラス、バングラデシュ伝統手工芸品紹介、ナチュラルファーム体験セミナー、講演会活動）

略　　歴：

1989年	国際ソロプチミスト水戸よりバングラデシュとの交流活動に感謝状授与
1987年～現在	バングラデシュの料理『ロシュン料理教室』を開き、食文化を通して両国の総合理解に努める
1987年10月	第５会アジア栄養科学会議（学会）にて、足立己幸教授のご指導のもと「バングラデシュにおける食習慣」について発表
1987年	女子栄養大学食生態学研究室研究生として国際栄養学等学ぶ
1983年	青年海外協力隊家政隊員としてバングラデシュへ ３年間活動（1986年 3月帰国）
1980年	アフリカ・ケニアで開発途上国の食事情学ぶ
1979年	海外派遣農業研修留学、アメリカ農家14ケ月学び帰国
1977年	日本農業実践学園生活部　栄養専攻卒業

著書・論文：「オーラ・ジャンボ・マロエレレイ」アジア・太平洋編のうちのバングラデシュ編（WAA [Women's Activities Association/青年海外協力隊帰国女性隊員の会]、1990)

『Food Habits of People Suffering Goiter in Rural Area in Banguradesh 』（第５会アジア栄養学会より）(1987)

コメント

1986年 2月、３年間の協力隊活動を終え帰国した私の最初の驚きは、一般的に日本人は開発途上国の人々のことを知らなすぎる、ということでした。帰国後５年経過した今でもその思いを感じてなりません。ですから帰国当時のまだ興奮さめきらない私の単なる思い込みではなかった訳です。国際理解または開発教育といわれる近年、これらが本当に、意味のあることにつながっているのか、不思議に思えてなりません。

私は、バングラデシュでの３年間、農村開発局に配属になりインド・カルカッタの国境からわずか４～５KM離れたジェソール県シャシャ郡、純農村地帯の生活改善を目的として、栄養改善及び農村婦人の現金収入の途作り等、野菜・畜産・家政隊員と３職種が、プロジェクトを組み活動しました。生活改善という目的を掲げ、その一つの方法として現金収入を得るため伝統手工芸品の製作と販売の途作りに長い時間をかけ現地のお母さんたちと取り組みました。健康で明るい生活を送るには、どのような食生活を送るべきか、一緒に勉強しました。それぞれの道程は、大変厳しいものだったと思いますが、お母さんたちが意識を高め自分たちのこととして受け止めたとき、本来の意味での自立となって実を結び始めました。

私たちが現地の状況、現地の人々の意識の根底にあるものを本当に理解できたとき、はじめて、国境を越えて、同じ目線で、同じ価値観でお話できると思います。難しいことかもしれませんが・・・またそうあるべきと願ってやみません。そして、現地に根をおろし生活した者の役目として、バングラデシュの厳しさ、たくましさ、優しさ、技術、向上心、そして価値観を伝えていきたいと思うものです。

196

III. 発表要旨

BEST COPY AVAILABLE

《セッションI》

「開発と女性」へのアプローチ

BEST COPY AVAILABLE

1. 急激に変貌する社会における男女のあり方に対する理論的アプローチ

ウーマンカインド代表　ケイト・ヤング

1．文献の簡単な総括：「開発と女性（ＷＩＤ）」と「開発と性」の違い、及びそれぞれの理論的根拠

2．今日の論点：女性をいかに支援するか、その実際的ニーズと戦略的関心。女性のエンパワーメント（力をつけること）の意味について

3．これからの開発に果たす女性団体の役割の重要性について：市民が主役となる民主的な開発の実現に向けて、女性団体が果たす役割について

4．ＷＯＭＡＮＫＩＮＤの意義：国際協力の一例として、また女性のエンパワーメント（力をつけること）への努力の支援例としてのＷＯＭＡＮＫＩＮＤの紹介

5．９０年代の女性の課題：我々は、「女性は本来的に連帯できる同士であり、ともに働くことができる特別の能力を有している」という神話を打破し、多様性と差異を受け止め、真の永続する協力関係を築き、すべての人にとって望ましい世界の実現に寄与することができるか。

2. 農村の女性：開発におけるパートナー

国連食糧農業機関（FAO）アジア太平洋地域事務所
開発と女性（WID）担当官
アレクサンドラ・スティーブンズ

女性は世界の人口の半分余を構成し、世界の労働時間の４分の３労働し、世界の所得の１０％を受け取っている。大多数が農村地帯に居住しており、南アジアでは、女性の８０％余が農村女性という国もある。しかし、我々が既存の統計やデータベースを使って開発プロジェクトを立案する時、我々は男性を対象に立案しなければならないことに気付く。なぜなら女性はデータ上働いていないことになっているかたである。そして農村女性は、何についてのどんな情報の中にも彼女らに関する情報がほとんどないため、データ上はほとんど何もしていないことになっている。

しかし農村社会を訪ねてみると、女性の農業従事者、女性の労働者がおり、女性が薪や水を運び、家畜の世話をし、牛の乳を絞り、魚に餌をやり、飼料を運び、卵を集めて売りカゴや魚捕りのしかけや衣服を作り、子供や老人の世話をし、学校で教え、料理をし、掃除や庭の手入れをし、裁縫をし、機を織り、絶え間なく働き続けている。実際、農村地帯の女性について研究すると、彼女らの労働時間は男性より大幅に長く、世帯への経済的貢献は男性を大きく上回っている場合が多いことに気付く。「開発における女性」のプログラムおよびプロジェクトが策定されたのはこのためである。

従来、農村女性は「忘れられた農業従事者」であった。女性は働いていないとしたデータに基づいて、我々は男性と協力して変革と開発のための活動を行おうとした。しかし、これはうまくいかなかった。草の根レベルで生活を変革するためには、我々は農村女性と協力して活動しなければならない。農村女性は、家庭生活を変え、基本的生活水準を向上させ、生活の質を高めるための我々の当然のパートナーである。

女性を農村開発のパートナーにするためには、これらの隠れた労働者を表に出すことが必要であった。「国連婦人の１０年」（1976-85)の間に、多くの調査によって女性の経済的貢献に関する統計が提供されたことにより、これはある程度達成された。しかしこれらの調査は、通常、男性の貢献の測定を目的する従来の調査方法を用いて行われた。乳牛の乳の経済価値を測定するのは簡単だったが、女性の子供に乳を与える際の貢献を測定することはできなかった。農夫が米の収量を測定することはできたが、女性の家庭菜園には何の価値もないとされた。しかし開発途上国では、このような公認されない貢献が家計の、大部分とはいわないまでも、大きな部分を成している。

このため、女性の労働を正確に「測定する」新しい調査手段を用いる方法として、農村女性と協力した参加型調査が、アジアの発展途上国数カ国で開始された。目的は農村女性を労働者として、経済上のパートナーとして、また、農村開発プランナーにとって考慮の価値のある、また実際欠かせない農場・家庭経営者として表に出すことであった。これによって農村女性自身も、農村開発におけるパートナーとしての自らの重要性を認識することができる。この戦略は２つの目的を持つ戦略である。つまり、データ収集の過程を、貧しい女性を組織し自分の生活を自分で管理する力を与えるための教育と結びつけるのである。これが、地域、国、そしてやがては国際レベルでの将来のネットワークづくりの健全な土台となる。

データは２つの目的に役立つ。草の根レベルのデータベースとして、農村女性が総合的な農村開発プログラムの本流の中で女性自身の開発を計画、運営するための土台を提供する。また、農村女性の経済的貢献に関する統計データとして、従来農村女性を無視または回避してきた政策や計画の見直しのための土台を提供する。

４カ国におけるこれまでの試験調査から得た最も重要な発見は、国家経済への女性の貢献に関する既存のデータベースは大きな誤解を招くものが多いということである。これは国の政策決定者や計画立案者にとってと同様、研究者とパートナーを組んだ農村女性にとっても驚きであった。なぜなら女性は若いうちに社会化され自己の役割や貢献を過小評価するようになるからである。女性が古いイメージを脱ぎ捨て、立ち上がって評価されるべき時がきた。全国レベルで、例えば国の農業調査あるいは人口調査との関連でこれがなさ

れた時、女性は強い立場に立ち、経済上の働くパートナーとしてだけでなく世界の所得の１０％より大きい割合に対して権利を持つパートナーとしても、正当な地位を要求するであろう。

3．日本における『開発と女性』論への取り組み－文化人類学的視点から－

津田塾大学助教授　菊地　京子

Ⅰ　『開発と女性』論とは何か

1　なぜ『開発』と『女性』を結び付けて考える必要があるのか

「開発」とは、本来、「人間社会の生活に何らかの改善が導かれるような変革のプロセス」とでも定義できる。人間社会の発展（開発）の歴史には、女性の社会への直接的関わりが希少であったこと、あるいは、それが正当に評価されなかったことなどから、女性の男性への依存性・従属性が定着し、女性の、社会集団への貢献や社会集団からの受益を部分的な、あるいは間接的なものと捉える傾向がみられた。社会開発の過程の中で、女性を人的資源として再認識するとともに、女性の社会への貢献度と社会からの受益度をいかにして高めるかを模索する必要がある。

2　文化相対主義の視角からの『開発論』への取り組み

「開発」の究極の目標が社会進化論に基づいた欧米社会の再現を目指すものではないことは自明である。多様な生活様式（文化）の共存・文化の多元性を基盤に『開発論』が研究されるところから「内発的発展」が重視されるようになった。

3　様々な文化の中の女性像

女性の自立度が最も高いとされるのは、女性に対する行動規制が少ない非単系的親族制を有する社会である。社会開発を施行していくには様々な文化の中の女性像を的確に把握することが先決であろう。

II　国際開発学会「開発と女性」分科会の活動状況

1　国際開発学会（The Japan Society for International Development）の設立趣旨

1990年２月に設立された「国際開発学会」は、わが国の開発援助に対する国際社会からの期待に応え、学際的研究体系を集約して、政策研究組織の創設を目指すとともに学会活動を通じて開発研究や開発協力に携わる人材の養成に貢献することを目的としている。

2　「開発と女性」分科会の活動

国際開発学会に設けられた９つの分科会の一つである「開発と女性」分科会は、1990年５月の初会合以来、１５回の研究会（1991年９月現在）を開いてきた。各研究会の講師には、アジア、アフリカ、オセアニア等で地域研究に従事してきた大学院生、研究者をはじめ、開発関連機関の職員、あるいは開発協力に参画している民間企業の専門家などを招いて、開発における女性の役割に関して様々な分野からの情報を交換している。

3　今後の展望

「開発と女性」分科会の今後の活動目標は、「開発と女性」に関する基礎的研究の推進に努めるとともに、内外の、同じ問題関心を持つ団体・組織とのネットワークづくりにある。

《セッションＩＩ》

「開発と女性」に係わる活動現場から

BEST COPY AVAILABLE

4. SEWAの経験

自営女性協会会長イーラ・R・バット

I.　インドは大きな国である。膨大な女性人口の構成も複雑で、階級、カースト、宗教、民族の違いが存在する。そこで、ここでは、女性の大多数（８０％）を占める、貧しく、読み書きはできないが、経済的には活発に活動している農村地域の女性に焦点を絞って、話をすすめたい。

まず、貧困層においては女性は全員が労働に従事していることを明確に理解しておくべきである。彼女たちにとって常に最も重要な問題は、仕事と収入を確保することである。そこで、主として女性の生活の経済的側面について述べてみよう。

これらの女性には共通する重要な特徴がいくつかある。これらの特徴はおよそ次のように要約できる：限られた雇用機会、失業の影響、不完全就業と日雇い的な労働、十分な技術と教育が無いことからくるぜい弱さ、低い移動性と重い責任、女性の仕事を過少評価するという制度上の社会慣行、より進んだ技術、機器、生産資産へのアクセスの欠如である。ほとんどの場合、貧しい女性は自営、日雇い、失業という３つの状態を行き来している。

女性には成長の機会がほとんど与えられていない。女性は家族の中でさえも、収入、消費、資産の分配に関して差別を受けている。従って、貧困によって女性の消費レベルはさらに低下し、健康状態は悪化し、教育の機会は減少する。母子家庭にはとりわけ貧困家庭が多い。

未組織セクターにある農村女性の大多数は土地を所有していないが、田畑で働き、動物の世話をし、食糧の生産・加工、林業および農業に積極的に従事している。また、建設現場、工場、鉱山でも多く働いており、また小売りや行商にも携わっている。さらに、子供を産み育て、水を汲み、薪を集め、料理や掃除をするといった多くの時間と労力のかかる仕事を担っている。森林の乱伐、飢饉、干ばつ等の災害によっ

206

ても、女性は男性より、はるかに大きな被害を受ける。

女性の発展に対する政府のアプローチは場あたり的なものであるため、女性の受ける利益は最低限のものに止まっている。「国際婦人年」の宣言をきっかけに女性の地位に関し、盛んな議論が行なわれた。政府は全ての女性に関する問題について総合的な研究を行なう「女性の地位に関する委員会」を任命した。「第六次計画」には女性に関する１章が加えられ、これに続いて女性も貧困緩和計画の対象に含める試みが行なわれるとともに、２、３の計画も開始された。しかし、女性のための政府計画は女性のニーズにも女性の数にも見合ったものとはなっていない。

性による不平等な扱い

労働市場は男女に公平ではなく、女性より男性に有利なものとなっている。性による不平等はほとんど全ての部門に存在しており、また労働力分業は性による偏りが大きい。男女差別は、ミクロの調査で明らかにされた男女の収入の差に一層顕著である。

都市部のインフォーマル・セクターにおいては、最低の収入しか得られないいくつかの職業に女性の占める割合はきわめて高い。組織化されたセクターにおいても女性の９０％が未熟練職および半熟練職についている。

教育や職業技能の習得に関しても、性による不平等は著しい。識字能力を備えた女性の数は急増しているものの、今なお男女の格差が大きく、とりわけ女性の技術教育はいっこうに進まず、女性の教育の進展は遅々としている。

教育戦略の大きな欠点は、土地を持たない農民、未組織セクターの限界労働者、都市スラムの居住者、労働者および移住労働者など、極貧層の労働者には手が差し伸べられていないことである。女性には教育や技能訓練を受ける機会が少ないため、自らの手で平等を獲得する手段を開拓することができない。女性の識字能力の欠如は、出生率と幼児死亡率の問題にも関連しており、そのような現状の中で性による差別はさ

らに永続化していく。

未組織セクターの増加

未組織セクターは驚異的に増加している。労働市場の現状と現在の社会経済的環境のもとでは、女性労働者の大半はインフォーマルな未組織セクターに属している。

母子家庭

母子家庭の数は貧困層に最も多い。母子家庭は、配偶者の死亡、移住、夫による遺棄または夫の病気／失業／麻薬中毒に起因している。出産に関する制度では通常、女性を戸主として認めていない。

技術

近代化と技術変化は女性に不利な影響をもたらした。技術の進歩と商業化に伴ない大量生産に移行し、その結果雇用も幾分増大した。エレクトロニクスなどの部門においては女性の雇用はわずかに改善されたが、職場を追われた女性の数はこれをはるかに上回っている。新しい技術を導入すれば結局新しい技能が求められることになる。女性にはこのような技能を習得したり訓練を受けたりする機会が与えられていないため、女性が熟練分野から未熟練分野へと移らざるを得ないケースが多くなる結果となった。

信用供与、原料、マーケティング

女性の雇用を増やすにはいくつかの障害がある。その１つはますます複雑になっていくマーケティングと信用供与の制度である。金融機関を通じて低利の融資を受けることができるようになってきてはいるが、低所得事業に従事する女性が直面する最大の問題は、彼女らには担保にするものがないことである。マーケティング活動を実施し、コントロールする力は複雑化し、より優れたデザインと技術が要求される一方で、大量生産をこなすだけの市場対応が要求される。

組織化されていない仕事に従事し、自分で経理も行なっている貧しい自営女性の多くは、卸売業者や高利貸しに、また地方自治体当局や警察にさえも搾取されている。

移住

農村地帯において貧困化が進行したことで移住の流れが起き、また多くの富とソーシャル・サービスが都市経済へ集中するという形で農村地域と都市地域間での分極化が生じた。男性が移住する場合は、女性が残された家庭に対して責任を負わなければならない。家族全員で移住する場合は、女性は基本的な衛生設備さえないような状況で生活し労働しながら、稼ぎ手と主婦という二重の役割を果たさなければならないという難しい問題に直面する。

保健

重度の肉体労働、劣悪な労働条件や生活状況、栄養不良、度重なる妊娠と貧弱なヘルス・サービスの質は、女性の健康に大きな犠牲を強いている。女性はまた、姿勢からくる障害、関節の痛みその他の職業病にも悩まされている。国内の未組織セクターにおける職業病についてはデータがない上、十分な認識もない。ヘルス・サービスの質は決して満足すべきレベルではないが、女性はそのようなサービスさえも受けにくい状況にある。さらに未組織セクターの女性は出産手当を受けることもできない。

雇用主が女性を優先して雇用するのは、女性が男性より低い賃金を受け入れ、男性に比べて従順で素直である場合のみである、というのが一般的な見方である。従って、出産手当、育児、賃金における差別の撤廃といった女性労働者を保護するための法律は、結局は女性の組織労働者を減らし、女性を組織化されていない、より搾取の激しい、公にされたい職業へと追いやってしまう。

住宅

収入、住宅、経済活動の間には直接的な関連がある。住宅不足はとりわけ女性に影響を与える。女性は育児を含むほとんど全ての家事をとりしきる主婦であ。。自営女性は通常自宅を根拠地としているため、彼女らにとって家庭は仕事場でもある。

保育施設

これらの家庭の子供達は、貧困および、栄養不良、過密で不衛生な生活状態、教育機会の欠如等、貧困に伴うあらゆる事柄の影響を被っている。

貧しい働く女性のために保育施設が必要なことは言うまでもない。そのような児童養護サービスは母親のための支援サービスとしてだけでなく、児童の全人的発達にとっても必要である。

ＩＩ．組織化

現在、自営女性運動は徐々に盛り上がりを見せている。これらの女性は組織として様々な問題に対処し、自己を主張し、自らのニーズについて発言し、わが国の政治的意識の先頭に立つようになってきている。自営女性の組織が発展拡大し、彼女たちがよりはっきりと発言するようになり、共通の問題を強く打ち出すために互いに連携することで、この運動は雪だるま式に大きくなって政治的意識がうまれるのである。

このような展開が可能になったのは、ひとえにこれまでに自営女性による数多くの組織化の動きや試みがあったからである。わずかばかりしかない文献を見ても、貧しい女性たちが、「民族主義運動」や「労働運動」といったより大きい運動の参加を通じて、あるいは特定の問題について地方レベルでの闘争を通じて、これまでの運動において、重要な役割を果たしてきたことが明らかである。

私達はまず、女性問題は現在のような展開によっては解決されないことを認め、そして政治的解決、つまり国家的政策においてそれらの女性を援助するための方策をこれまで以上に優先するような方法を求めていかなければならない。

ボランティア機関や貧しい女性たち自身による組織化された活動だけに頼っていたのでは、この種団体をこれらの女性の置かれた状況を強く印象づけるのに十分な数に増大させることは難しいであろう。

国家政策の変更を迫る行動を推進する仕組みへの支援を国家に要請する、というのはいささか皮肉な事態ではある。しかし、女性たちが自らを組織化するような雰囲気を作り出すために、国家が草の根レベルでの組織化への取り組みのネットワー

クを創設し、維持するのを援助することが望ましい。

III．SEWAの経験と勧告

ここで、貧しい労働者階級の女性を組織化し、また政策の変更を求めて政策決定者たちに彼女たちの問題を提起した私の経験を述べてみたい。

マクロ・レベルでの一般的な勧告をいくつか申し上げることにする。

5．フィリピン官僚制度における女性の現状及び課題

フィリピン公務員委員会（CSC）会長
パトリシア・A・サント・トーマス

フィリピンでは、女性政策を改善するための条件がかなり整ってきた。これには、史上初の女性大統領の誕生、政策決定に関わる女性数の増加、女性を含む貧しく恵まれない層を重視した政府の姿勢など、多くの要因が存在する。

統計は改善の必要性を示している。女性は実質的に人口の半分を占めていながら、就労人口の割合や経済活動に従事している数では、男性をかなり下まわる。これらの統計結果が、フィリピン中期開発計画（ＰＭＴＤＰ）の一部を成すとも言える、女性のためのフィリピン開発計画（ＰＤＰＷ）を発足させるきっかけを提供した。ＰＤＰＷはＰＭＴＤＰと同じ柱立てとなっているが、それプラス４つの章が加えられている。これは、政府と民間部門、特にＮＧＯ（非政府組織）との協力がいかに効果的な活動を行なうことができるかと示す良い例でもある。

ＰＤＰＷの実施は官僚制度に左右されるところが大きいため、本報告では官僚制度における女性に焦点を当ててみたい。

官僚機構における女性の数は多い。初級公務員に占める女性の割合は４２％に過ぎないが、専門職や技術職では５９％を占めている。しかし皮肉にも、この専門・技術者集団が支える管理職クラスの場合、女性の割合はわずか２８．８％である。

このような不均衡が生じた理由としては、伝統的な先入観や偏見、構造上の障壁、政治的な情実採用・昇進、そして同性から課せられる厳しい要求などが挙げられる。

これらの不均衡を是正するため、公務員委員会はより公平な過程の実現をめざして数多くの施策に着手した。同時に採用方針の再検討と強化も行なわれた。これによって人事の恣意が最小限に抑えられ、女性にとっては有利に働くものと考えられている。女性が政府高官に昇格する条件も、本人の仕事ぶりと、厳正な管理職試験の結果であるべきである。女性の昇進を妨げている構造的な障壁を緩和するため、人的資源開発への様々な措置が行なわれてきた。

女性は国際的にも団結を図り、女性が関わる問題を解決するために手を差し伸べ合うべきである。この中には、外国人契約労働者に対する搾取や、写真花嫁、地球社会が狭くなってきたために出てきた、その他のいろいろな許されないような事態も含まれる。

各国の情報や戦略、政策や事業を交換する情報センターとしての機能を果たすような女性政策研究所ともいえるものがアジアに設立されることも、期待したいことである。

6. 自立への道程

バングラデシュとの総合的な文化交流会主宰　馬上　美恵子

バングラデシュは、1947年まで英領インドの一部でした。独立と同時に東パキスタンとなり、1971年にはベンガル語を話す国バングラデシュとして独立し今に至っています。国土の三方をインドに囲まれていて西は西ベンガル、北はアッサム州、東はトリプラ州に接しています。一方南はベンガル湾に面し、また東南部の一部はミャンマー、アラカン地方と接しています。ガンジス河、ブラマプトラ河、メグナ河の３大河川が国土の中央で合流してベンガル湾に注いでいる世界最大のデルタ地帯です。

1983年～86年の３年間青年海外協力隊家政隊員としてバングラデシュの首都ダッカより西南西へ約 300KM離れたジェソール県、さらに西へ約30KM行ったシャシャ郡にて、農村開発局が指導する農業協同組合員特に婦人組合員を対象に生活改善を目的とし、野菜・畜産・家政隊員と３職種が、プロジェクトを組み栄養改善、現金収入の途作り等々、働きかけをしてきました。83年当初私たちの個人的な食事作りなどの手伝いをしてくれていた、モドザン・ビビさん（イスラム教の女性）とウットールブルースバガン村の女性組合マネジャーをしていたオンジォリ・バシコさん（後に手工芸品製作リーダー）との出会いは、村々の人々に素晴らしい影響を与えてくれたばかりでなく、私に多くのことを勉強させてくださり、そして生涯のライフテーマとしてつながりを持っていくことになるのでした。

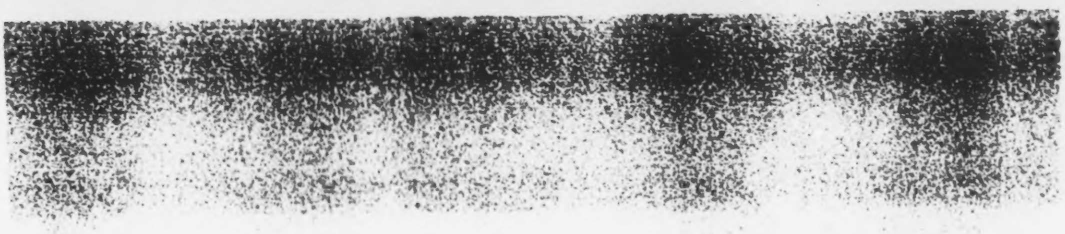
モドザン・ビビさん。妻であり、３人の子供の母で、現在は、２人の孫のおばあちゃんです。13歳の時結婚し、学校にはほとんど行っていません。したがって読み書きはできなかったのです。しかし、探求心は人一倍強く、私が村の婦人学級でデモンストレーション料理をする折りに度々アドバイスしてくれたことがきっかけとなり、後に調理指導普及員として共に村回りをすることになるのでした。しかし、そこまで行くには、いくつもの難問を乗り越えました。妻が外で働くことの不安、まわりから変なシットを受けないだろうか、変な誤解が生じるのではないか・・・。気の弱い夫はそれらの不安から、モドザンを殴ったり、蹴ったりの毎日だったのです。モドザンの仕事の意味を夫に理解してもらうた

め、たくさんの時間をかけて、根気強い説得が必要でした。３年目の後半に入った頃からモドザンを仕事場まで迎えに来てくれるようになりました。当時大豆普及活動などでとても忙しく、日がすっかり暮れた頃仕事終わりとなったものです。暗くなった夜道は危ないと迎えに来た夫。足元をランプで照らしながら帰る二人の後ろ姿を見ながら、ささやかなランプの光ではありましたが、とても暖かく感じました。早朝家を訪ねると夫が朝食を作っている場面に出くわしました。夫は照れながらニコッと笑いました。

女性の自立を考えたとき、大切なことは自分のこととして受け止めること、そして男性からの理解と応援とともにお互いを認め、尊重し合えることではないかと思います。モドザン夫婦から多くのことを学ばせてもらいました。

今年３月にシャシャを訪ねたときモドザン夫婦に会ってきました。約束どおり立派な手作りの家を夫の手で作っている、その真っ最中でした。モドザンは、これまで学んだ多くのことを、これからは自分たちのために役立てるとのこと。たってのお願いで無水ナベを届けました。パン、お菓子を焼いて店で売るそうです。ナベの代金、月20タカ(100円) ずつ返済していくと、10年はかかる計算です。「それまで（それからも）お互い元気でいなくちゃネ！」「アパ、もっと早く返せる自信があるよ。」返済金は、近くのショナリーバンクにモドザンの口座を作り、毎月入れていくことになりました。どれだけ貯金がたまるか、私もとても楽しみです。

モドザンたちがバングラで頑張るように、私たちも負けずに、日本でバングラデシュのお料理教室や手工芸品を、それらの背景とともに価値感のある物として、より多くの日本の方々にご紹介できるよう、努力していきたいと思います。



ERNATIONAL FORUM ON INTERCULTURAL EXCHANGE

October 29 - 30, 1991

NATIONAL WOMEN'S EDUCATION CENTRE

JAPAN

BEST COPY AVAILABLE

[Preface]

October 1991

This brochure has been produced for the "International Forum on Intercultural Exchange, 1991" organized by the National Womens' Education Centre.

The Centre has held national-level meetings of international exchange for organizations and individuals interested in international exchange.

This year, the Forum will deal with the theme "Women in Development: Towards Global Networking", inviting the four overseas specialists from India, the Philippines, U.K. and the UN Food and Agriculture Organization (FAO).

I hope that this booklet will provide information for the participants as well as those interested in international exchange and crosscultural understanding.

In conclusion, I would like to express my sincere gratitude to the participating specialists who have kindly accepted to write manuscripts for the Forum.

Mizue Maeda
Director - General
National Womens'Education Centre

Contents

I Prospectus of International Forum on Intercultural Exchange --------- 69

II Profiles and Comments of Chairperson and Panelists -------- 77

III Resume of the Presentations -- 115

[Session I : Approaches to 'Women in Development'] -------------- 117

1. Theoretical approaches to understanding the relative positions of women and men in societies undergoing rapid social change -- 119
   Dr. Kate YOUNG,
   Executive Director, WOMANKIND
2. Rural women : partners in development ------------------------ 120
   Ms. Alexandra STEPHENS,
   Women in Development Officer,
   FAO/Regional Office for Asia and the Pacific
3. Japan's approach to 'Women in Development' - From the viewpoint of cultural anthropology - ----------------- 123
   Ms. Kyoko KIKUCHI,
   Associate Professor, Tsuda College

[Session II : Field Report on 'Women in Development'] ------------ 127

4. SEWA experience -- 129
   Ms. Ela Ramesh BHATT,
   General Secretary,
   Self Employed Women's Association (SEWA)
5. Women in the bureaucracy: The Philippine case -------------- 136
   Ms. Patricia A. Sto. TOMAS,
   Chairperson,
   Civil Service Commission (CSC)
6. The path to independence -- 138
   Ms. Mieko MAGAMI,
   Organizer,
   Comprehensive Cultural Exchange Programmes between Japan and Bangladesh

I. Prospectus

BEST COPY AVAILABLE

Prospectus
of
the International Forum on Intercultural Exchange

1. The Purpose

The purpose of the Forum is to seek the intercultural exchange or international cooperation serving the global solidarity among women, by identifying from the international perspective, the present status of, and the role to be played by women in the socio-economic development, and by discussing the issue from the perspectives of women's participation in civic activities.

The Forum is thus intended to help create, through the sharing of experiences and views on the subject, the international networking for women in all of these important areas.

2. Theme

'Women in Development : towards global networking'

3. Organizing Body and Venue

National Women's Education Centre
Address : 728 Sugaya, Ranzan-machi, Hiki-gun,
Saitama-ken, 355-02 Japan
Tel : (81) 493-62-6711
Fax: (81) 493-62-6721
Cable address: NWEC HIGASHIMATSUYAMA

4. Period

October 29 (Tue.) - 30 (Wed.) , 1991

5. Panelists

(1) Three specialists from Japan

Dr. Yoriko MEGURO : Chairperson of the Forum
Professor, Sophia University

Ms. Kyoko KIKUCHI
Associate Professor, Tsuda College

Ms. Mieko MAGAMI
Organizer, Comprehensive Cultural Exchange
Programmes between Japan and Bangladesh

(2) Four specialists from abroad

Ms. Ela R. BHATT (India)
General Secretary,
Self Employed Women's Association (SEWA)

Ms. Alexandra STEPHENS (FAO)
Regional Sociologist
and Women in Development Officer,
FAO Regional Office for Asia and the Pacific

Ms. Patricia A.Sto. TOMAS (Philippines)
Chairperson, Civil Service Commission (CSC)

Dr. Kate YOUNG (United Kingdom)
Executive Director, Womankind (Worldwide)

6. Working Language

English and Japanese.
Simultaneous interpretation will be provided.

7. Participants

* Qualification: leaders of the groups or organizations active in intercultural exchange, international cooperation, cross-cultural understanding, etc., administrators or researchers in those fields, or those interested in the subject.

* Number of persons: approximately 100

8. Schedule

Tuesday, October 29

(1) Opening [13:10 - 13:50]

1) Opening address by Director-General of NWEC
Ms. Mizue MAEDA

2) Introduction of panelists

3) Address by Chairperson Dr. Yoriko MEGURO
(Chairperson also moderates the whole session of the two day programme)

(2) Session I : Approaches to 'Women in Development'
[13:50 - 17:00]

* The session is designed to learn about the

perspectives and methodology regarding 'Women in Development' by sharing experiences of different countries.

Presentation by panelists (13:50 - 15:20)

* Dr. Kate YOUNG
Theoretical approaches to understanding the relative positions of women and men in societies undergoing rapid social change

* Ms. Alexandra STEPHENS
Rural women: Partners in development

* Ms. Kyoko KIKUCHI
Japan's approach to 'Women in Development'
- from the viewpoint of cultural anthropology-

(Break)

Discussion (15:40 - 17:00)

(3) Buffet Party [18:00 - 19:30]

Wednesday, October 30

(4) Session II: Field Report on 'Women in Development'
[9:00 - 12:00]

* The session is designed to learn from experience in the field, with a view to seeking better approaches to development which improve the status of women, and also to identify the present and future of global solidarity of women in this field.

Presentation by panelists (9:00 - 10:30)

* Ms. Ela R. BHATT
SEWA experience

* Ms. Patricia A. Sto. TOMAS
Women in the bureaucracy: The Philippine case

* Ms. Mieko MAGAMI
The path to independence

(Break)

Discussion (10:40 - 12:00)

(5) Lunch [12:00 - 13:30]

(6) Session III : General Discussion [13:30 - 15:00]

* The session is designed for the discussion among panelists and the participants from the floor regarding Women in Development, with further elaboration on the results of the discussions during the previous sessions.

(7) Closing [15:00 - 15:10]

224

INTERNATIONAL FORUM ON INTERCULTURAL EXCHANGE
October 29-30, 1991
NWEC

Timetable

Time	October 29 (Tue.)	October 30 (Wed.)
9:00		Session II "Field Report on 'Women in Development'"
10:00		
11:00		
12:00	Registration	Luncheon (Cafeteria)
13:00	Opening	
14:00	Session I "Approaches to 'Women in Development'"	Session III "General Discussion"
15:00		Closing
16:00		
17:00		
18:00	Buffet Party (Cafeteria)	
19:00		
20:00		

II. Profiles and Comments of Chairperson and Panelists

BEST COPY AVAILABLE

Yoriko MEGURO

Profile

Nationality: Japanese

Present Status: Professor, Sophia University

Education:

Graduated from Case Western Reserve University Graduate School, Ph.D. in Sociology

Specialized Field: Sociology

Publications: (all in Japanese)

Readings gendai kazoku, (Readings - Modern Family) (Co-editor), 1987

Kojinka suru kazoku, (Individualizing Families), 1987

Onna yakuwari---Sei shihai no bunseki, (Women's Role - Analysis of Sex Domination), 1980,
etc.

227

Comment

Today, the notion that international cooperation and understanding can be achieved only through the exchange of people is beginning to take root in Japan's aid giving. While Japan's contribution to world society has become a popular topic among the average Japanese, official development aid (ODA) has come under scrutiny. Above all, since about last year the lack of a gender perspective has surfaced. Though belatedly, the Japan International Cooperation Agency (JICA), the organization which dispenses ODA, formed a "Women in Development" support counsel, to which I was appointed a member. As a member, I became involved in reviewing Japan's position and thinking in the area of WID, or "women in development."

There are many aspects of WID. Let us for a moment focus on the subject of improving women's position by analyzing the current status of women in developing countries. Over a decade ago, I was involved in a comparative study of women's status in Japan and other economically advanced countries. During that time, I came to realize how superficial it is to approach issues of equality in advanced nations without understanding the problems of women in the developing world. Later---about 4 years ago---a meeting was held in Montreal to discuss women in the developing countries. Reports on women who were being suppressed helped me gain a better understanding. In the meantime, there has been much analysis of the North-South structure, including the theories of world economic system and subordinate theory. In the process, definition of "development" was reviewed, but little attempt was made to address the issue from gender perspective.

International organizations have embraced the concept of recognizing its potential in improving women's status, at the heart of development aid. It seems that the Japanese government, as well as nongovernmental organizations (NGO), are now more disposed to accepting the positive results.

In the eyes of a researcher, groundwork appears to have been finally done to address this challenging issue.

Kate YOUNG

Profile

Nationality: British

Present Status: Executive Director, WOMANKIND (Worldwide)

Education:

1976	PhD in Social Anthropology, London University
1970	Post Graduate Diploma in Social Anthropology, London School of Economics and Political Science

Organizational Experience:

1989	Launch of WOMANKIND, March 8th
1988	During 2 year leave of absence from IDS set up WOMANKIND (Worldwide), a development agency with charitable status, supporting women's organisations in developing countries
1977 - 90	Fellow, Institute of Development Studies (IDS), University of Sussex. At IDS, organized lectures, conferences, workshops and seminars on the following subjects: The consistently subordinate status of women in development process, the social production by women in the caribbean, child labor, female labor in the tourist and export industries of Southeast Asia, present issues of feminist study, ways of studying rural women, women and men in

development, sex and development.

Research Experience:

1987	Benefits and Barriers in the Policy Process (Commonwealth Secretariat)
1986	Women's Employment and Technology in the NICs (IDRC) (F. Henwood, Research Assistant)
	Gender Issues in Household Labour Allocation: The Transformation of a Farming System in Northern Province, Zambia (ODA:ESCOR) (Research Officer, Alison Evans)
	Household Budgetting in the Third World (EEC Training for Trainers Project)
	Policy Measures for Increasing Women's Participation: Welfare and Equity Concerns (Commonwealth Secretariat)
1985	Integrating Women's Concerns into Planning at National, Regional and Local Levels (UNESCO)
	Supportive Measures for Working Women (Commonwealth Secretariat)
1982 - 85	Research into research methodologies suitable for fieldworkers and activists.
1982 - 84	Library research into subcontracting and outwork in historical and contemporary periods in industrialised and industrialising countries.

1979 - 80	Library reserach into the participation of women in the so-called informal sector.
1978 - 82	Library research into changing patterns of fertility historically and in contemporary societies.
1975	Fieldwork in Sierra de Juarez, Oaxaca, Mexico, on the economic contribution of women to the peasant econom. Research undertaken for Instsituto Nacional de Estudios del Trabajo, Mexico.
1971 - 72	Fieldwork in Oaxaca, Mexico, on causes of internal migration from an area of small-scale peasant farming and petty commodity production.

Publications:

1991	A World of Difference. Macmillan, London
1990	'Population: The Harsh Reality for Women' in Conservation Now. vol 1 no 4
	Household Resource Management: Module 6 of Gender and World Development; training for trainers project EEC/IDS
	'Employment Opportunities and Constraints for Women from Here to 2000' in Development. no 1 (special issue on Young Women)
1989	(ed) Serving Two Masters: Third World Women in Development. Allied Publishers Ltd, India
1988	(ed) and Introduction, Women and Economic

Development, Local, Regional and National Planning Strategies, Berg/UNESCO

1986 (ed), Women's Concerns and Planning: a Methodological Approach for Their Integration into Local Regional and National Planning (Socio-economic studies no 13), UNESCO, Paris. Also author of Introduction.

'Women, Men and Development', in A Rao (ed), Incorporating Gender Issues in Development Training, Population Council Regional Office for South and East Asia, Bangkok

(with F. Henwood), Microelectronics and Women's Employment in the Newly Industrialising Countries, Report for IDRC

'Benefits and Barriers in the Policy Process', Commonwealth Secretariat

1984 'Reproduction and gender hierarchy', paper presented at SSRC Workshop on Social Inequality and Gender Hierarchy

'No return to invisibility: viable research strategies for the '80s', CUSO Journal

'Future rapid appraisal work of the IDS women's cluster', IDS Bulletin vol 15 no 1 January

1983 'Family work: factory work', paper presented at Colloquium on Women, Employment and the Family, Hanoi, Vietnam

'Everywoman's dilemma', paper presented at the Inter-University Centre post-graduate course on Women and Work, Dubrovnik, Jugoslavia

(With Sheila Smith), 'Women's labour and demographic change', paper presented at Socialist Economic Review conference, London

1982 'The creation of a relative surplus population: a case study from Mexico', in L Beneria (ed), Women and Development: The Sexual Division of Labour in Rural Societies, Praeger, New York

(with Sheila Smith), 'Western feminism and development: the case of Britain', paper for the AAWORD/Dag Hammarskjold Foundation Conference, Another Development with Women, Dakar, Senegal. Publishied as 'Women's disadvantage: capitalist development and socialist alternatives in Britain', Development Dialogue 1982:1-2

1981 (with V. Goddard), 'Working Children: an International Perspective', report of the IDS/Anti-Slavery Society Workshop on Child Labour; later published as a special issue of Development and Change vol 13 no 4, 1982

1980 'A methodological approach to the analysis of capitalist agriculture and changes in women's roles', in Women in Rural Development: Critical Issues, ILO, Geneva

1978	'Modes of appropriation', in A.N.Wolpe and A. Kuhn (eds), Feminism and Materialism, Routledge & Kegan Paul, London
1977	'Women's wages', New Internationalist, Oxford

Comment

When I was at school I was very struck by John Donne's poem which includes the famous lines - 'no man is an Island entire of itself; every man is a piece of the 'continent', a part of the main.' Not because of the generic use of man, but because it spoke to some quite deeply felt but inchoate understanding within myself. Women I would now say experience that feeling of being embedded in society, of connectedness to others, in ways that men possibly don't so sharply.

Throughout my life, experience has reinforced that sense of belonging to a greater whole. And to feeling a particular sense both of joy and awe, when I meet women around the world who are struggling to uplift themselves, or work for the advancement of others. Joy, because I experience a sense of connectedness with them oftern despite enormous differences of cluture, age, class, and life chances. Awe, because they struggle against such tremendous odds, often with such slender resources whether social or financial, and yet with such creativity and vision. And each time I find that I have learned something new about women's resilience, their courage and their quiet wisdom. Often I have to work hard at understanding, and often I am sure I cause much exasperation. But the contact for me is vital, I find that my own commitment to women's cause is renewed; my level of energy increases and my sense of hopefulness returns.

International encounters are potential feasts of riches but they can be sites of tremendous dissention as we know from Mexico onwards. Yes we share by listening but also by speaking openly and without rancour of differences; unless we allow for and respect diversity and exploration of alternative views, international encounters can leave a feeling of frustration and even of anger.

We are living through very confusing times; many of our guiding stars have dimmed, our early hopes that rational and egalitarian forms of development would be relatively easily brought about have been shattered. There is a tremendous need for a new vision of a future in which a sense of global connectedness plays a central role. Women I believe have begun to feel their way towards such a new vision, but we will have to work hard to develop it and organise at the international level to get it accepted and implemented. Without it, I fear the future holds little of promise for the millions of women and men who live in poverty throughout the world. Indeed it is likely to hold even more terrible holocausts and yearly disasters; the unnecessary and needless deaths of hundreds of thousands of women through exhaustion and neglect, of millions of children through inadequate nourishment, of thousands of men through internecine warfare.

John Donne's poem ends 'Any man's death diminishes me, because I am involved in Mankind; and therefore never send to know for whom the bell tolls; it tolls for thee.'

Alexandra STEPHENS

Profile

Nationality: New Zealander

Present Status: Regional Sociologist and Women in Development Officer, FAO Regional Office for Asia and the Pacific (Bangkok, Thailand)

Education:

1974	M.A. degree in Rural Social Development, University of Reading U.K.
1967	Post-graduate Diploma in Pedagogy/Secondary Teaching, New Zealand
1964	B.Sc. in Home Science, University of Otago, New Zealand

Work Experience:

1984 - present 6 year	Regional Sociologist and Women in Development Officer - technical support, project planning and formulation, monitoring and evaluation of programmes for the integration of women in agriculture and rural development, and technical backstopping and training for small farmer development and people's participation projects.

1984	Consultant sociologist to Prevention of Food Losses Project in Pakistan. Two months consultant to FAO Regional Office for Asia and the Pacific for Women in Rural Development.
1980 - 83 4 years	Chief Technical Adviser, UN DTCD Self Help Village Development project in Eastern Liberia with team of 5 U.N. staff and 6 Liberian counterparts - led a pioneering project for grass roots people's participation in self help programme of small scale integrated rural development with US$3 million budget.
1979 - 80 1 year	At FAO HQ in Rome, programme planning and project design for small integrated rural development projects. 2 months in Tanzania on curriculum development for adult education in population/rural life development. One month in Sri Lanka and one month in Liberia as consultant for Prevention of Food Losses Programme.
1975 - 79 4 years	Team Leader, FAO Rural Life Development project in Papua New Guinea, to establish Rural Life Development courses in agricultural colleges at Diploma and Certificate levels, integrate women in agricultural extension service, provide in-service training for RLD to existing extension staff.
1970 - 73 4 years	Colombo Plan expert in Malaysia as Adviser to Federal Land Development Authority, establishing an extension service to land settler dependents (women and children) in over 100 settlement schemes throughout peninsular

	Malaysia, training staff, planning and organizing activities.
1968 - 70 2 years	Voluntary Service Abroad for N.Z. Govt. in Fiji School of Medicine as Tutor Nutritionist, Suva, Fiji.
1965 - 66 2 years	Secondary School Teaching, Waimea College, New Zealand

Comment

It is easy to celebrate the joys of womanhood. It is far more difficult to plan actions to alleviate the burdens and sorrows. What has to be done in all nations at first, is to name women's problems. I repeat, to name the problems, because by naming problems accurately, we provide clues to dealing with them. The name allows us to focus on the issue - to collect information on it, and to confront it. Many problems facing women remain undefined, invisible, unnamed, unacknowledged. As long as this pertains, required actions can not be taken to solve our problems.

Take one example - violence against women. Violence against women is often misnamed - called "domestic dispute", "sexual harassment", or "conjugal tension". There is no accurate data on violence against women in any country, because many forms of violence are not recognized, not named, often not even acknowledged by battered women themselves. Take a more practical, everyday example - women's work. Current information reflects only a tiny portion of the work that women do. Their domestic work is not called "work" - women who work at home are "unemployed", "dependent", "welfare". This is what employment statistics tell us, and for years we have accepted this. We have filled in survey and census forms confirming that we are "unemployed" by writing "housewife". We have told our friends we "don't work". Men boast that their "wives don't work".

This makes women invisible. Women are a silent, industrious work force that produces, rears and maintains the nation's "official workers", free of charge, denying themselves the chance of other more satisfying and more productive contributions in the process. This is a "problem". It is a problem for women but it is also a problem for all those who want to see our world progress.

241

Inter-cultural exchanges can help - by networking and by uniting to confront the forces which oppress and suppress female potential by denying that it exists. In order to do this coherently, women must first understand the influences of culture on women, and on women's roles. That women all over the world are disadvantaged by reason of their sex and gender is a given, but in order to address the problems which disadvantage women we need to know their sources, within the context of individual cultures, religions, agro-ecological lifestyles, in rural or urban contexts and political, social and economic frameworks. Only then can we as a group of half the world's population, unite to support each other in confronting the sources of our oppression.

Each of us can make a small contribution. Together this will amount to a revolution. In the Philippines, feminists call it "The Quiet Revolution". Elsewhere it can be noisy! When it becomes a truly international force, it will be a roar. Let me tell you about my own contribution just now, at this stage of my life. I want to make a revolution in my organization - FAO - which collects, compiles and analyses statistics on food and agriculture. There is practically nothing on women farmers or rural women in these data. A few statistics in the areas of population, health and education are disaggregated by sex, but generally statistics tell me what men own, what men do, and how much income rural men receive. In my work, I want to know what rural women do, how much they own, how much they contribute and how much they receive.

We have been conducting pilot studies in some Asian countries, to find answers to these questions, because available statistics are often very wrong, very misleading. Studies using new research instruments and new methods of data collection have been tested in India, Malaysia, Pakistan and Thailand. It is already a small revolution, because what we have found is so different from what men and women tell us about what women do. And we feed the new information right back to women's groups, which also make small revolutions with the new data.

The exciting thing about this new data on women is that it could help ordinary women in any country, better understand their own situation. It is both a data collection system, and an educational-cum-conscientization process, so it follows from this that better understanding across cultures becomes possible.

It is well said that information empowers, and empowerment is a key to women's advancement. However, the fact that much of the information about women has been incorrect and misleading in the past, has limited the empowerment potential. New research instruments for studying women all over the world promise to unleash that potential to change the world!

Kyoko KIKUCHI

Profile

Nationality: Japanese

Present Status: Associate Professor, Department of International and Cultural Studies, Tsuda College

Education:

- 1979 Studied at Tokyo Metropolitan University Graduate School, Left before receiving a Doctorate in Social Science
- 1973 Graduated from Tokyo Metropolitan University Graduate School, M.A. in Social Science
- 1970 Studied at the Department of Anthropology, Graduate School of the University of the Philippines
- 1968 Graduated from Sophia University Graduate School, M.A. in Post Graduate Literature

Membership:

Japan Society of Ethnology, The Japan Society for International Development, Asian Politics and Economics Society, Comparative Family History Study Group

Specialized Field: Social Anthropology

Publications: (all in Japanese)

Philippine karano kokusai rodo ryoku ido. (Migration of an International Labor Force from the Philippines), Vol. 106 of "Social Science Study" published by theSocial Science Research Institute, Waseda University, 1991

Kaihatsu ni okeru josei no yakuwari. (Women's Role in Development) April 1990 Issue of Gaiko Forum (Diplomatic Forum), Sekai no Ugoki Co., Ltd. 1990

Tounan Ajia no shakaigaku. (Sociology in South East Asia) (Co-writer), Sekai Shisosha Co., Ltd. 1989

Onna no bunka jinruigaku, (Women's Cultural Anthropology) (Co-writer), Kobundo Co., Ltd. 1982

Comment

I am frequently surprised to find that many products at department stores and supermarkets in the U.S. or U.K. are made in the Third World. Some are made in NIES or newly industrialized economies such as South Korea, Taiwan, or Hong Kong, while others are made in Malaysia, the Philippines, India, and Pakistan. I could probably find something made in the U.S. or in U.K. at a sophisticated boutique which specializes in designer brands, but the merchandise there would be priced beyond the means of an average person. Merchandise I look to buy often turn out to be T-shirts made in Hong Kong or sneakers made in Korea.

By the same token, there are a surprising number of foreigners working in hotels and restaurants in London, New York and Boston. Since I have devoted myself to the study of the Philippines for years, meeting a Filippino servicing my room at a hotel in London is as moving as unexpectedly meeting a boy from my hometown in a foreign country.

However, seeing the 'rich' British and American markets overwhelmed by products and labor from the 'poor' Third World countries, one cannot deny that a borderless age is now advancing at an unprecedented pace. In a borderless age, goods and people across borders. In my view, the advanced nations of the West seem to be surviving, thanks to benefits of a borderless age.

This summer, I visited Boston which is an attractive tourist city offering pleasant harmony between rows of New England-Stlye houses mixed with modern high-rise buildings. But we often find beggars inside what Bostonians call the 'T', the subway, or in the streets surrounding Quincy Market, a famous tourist spot. They sit absent-mindedly behind an old hat or a can containing small change. No matter how one looks at them, many are of sturdy build and in their prime of life. So even when they post a sign saying "homeless and hungry," it is difficult to pity them. Nevertheless, they are certainly proof of the high U.S. unemployment rate reported by newspapers.

Are we not overlooking the fact that international aid and cooperation are being carried out under a structure which is often contradictory poverty among the rich and abundance among the poor? Of course, many people in the Third World, (probably most of them), need help desperately. It is also true there are some Third World nations where 80 per cent of the people are forced to live below the poverty line. On the other hand, we are certainly aware that developed nations do not give official development aid (ODA) from mere good will. Should we not look at the intentions and complications behind international aid? We should realize that donor nations are also suffering from their own social problems such as high unemployment. At the same time, we should focus on what can be done to improve the effectiveness of international aid. I would like to emphasize that both donor and recepient nations need to come up with new and different ways of dispensing international aid.

If the concept of aid and cooperation does not initially exist in international aid, it is an entirely different story. Exploitation in the name of aid is more sinful than doing nothing.

Ela Ramesh BHATT

Profile

Nationality: Indian

Present Status: General Secretary, SEWA (Self Employed Women's Association)

Other Positions held:

1990	Member, Planning Commission of India, New Delhi
1986-89	Member of Parliament, (Rajyasabha) nominated by the President of India
1987-88	Chairman, National Commission on Self Employed Women, New Delhi
1985	Chairman, Women's World Banking, New York
1972	Chairman, SEWA Cooperative Bank, Ahmadabad

Publications:

Streeni Manomurtinu Roop, (Gujarati), 1983

Profiles of Self Employed Women, 1975

Gujarat ni Nari, (Gujarati), 1975

Honours Conferred:

- Women in Creation Award, Alliance De Femmes, Paris, 1990
- Padmabhushan, 1986
- Padmashri, 1985
- Alternate Nobel (Right Livelihood Prize),Stockholm, 1984
- Best Entrepreneur Woman of 1983, New Delhi
- Susan Anthony Award for National Integration, 1982
- Magsaysay Award for Community Leadership, Phillippines, 1977

Comment

On Mrs.Ela Ramesh Bhatt and SEWA

Elaben Bhatt, the guiding force behind SEWA (Self Employed Women's Association) and winner of the Magsaysay Award for Community Leadership (1977) is best known for her work in organising poor women struggling to earn a livelihood in the informal sector of the economy. While working in the Women's Wing of the Textile Labour Association of Ahmedabad, Elaben became concerned about the difficulties of self-employed women struggling to make a living as garment makers, vegetable vendors, handcart pullers, junk smiths, milk producers and other occupations. SEWA which was set up in 1975 and became autonomous in 1981 is a union which aims to help women fight exploitation, secure credit and promote the development of its members. With a membership of over 20,000, SEWA is governed by a team of leaders elected by the various sections of membership. SEWA has successfully fought to protect street vendors and peddlars from police harassment and for their right to municipal space for their activities. To help poor women secure loans and simplify the procedures which make it difficult for illiterate women to use banks, SEWA set up the Mahila Cooperative Bank, which today handles large sums of money, helps members to obtain loans. The bank is professionally managed by women and controlled by a Board with representatives from various workers' groups.

SEWA has now branched out into numerous related activities on behalf of women in the informal sector - literacy, training and legal education for women producers' cooperatives (ranging from artisans and traders to land-based and livestock-based) child care centres, maternity benefits, low-cost housing and health insurance, service cooperatives, protection against family and sexual harassment and a movement for communal harmony. SEWA has fueled the growth of similar organisations in other parts of the country, as well as broadening its own organisational base by expansion to other areas.

Today, Elaben, while continuing as General Secretary of SEWA and President of the SEWA Cooperative Bank, also carries several national and international responsibilities. She is a Chairman of the Board of Directors of Women's World Banking and was a leading panelist in the World Conferences on Women held in Mexico, Copenhagen and Nairobi.

A nominated member of the Rajya Sabha - Upper House of the Parliament for four and a half years from 1986, she ardently championed the cause of the self-employed there. She was Chairperson of the National Commission on Self-Employed Women and Women in the Informal Sector, which submitted its report, SHRAM SHAKTI in 1988. She was a Member of the National Planning Commission in charge of Employment, Labour and Unorganised Workers.

Patricia A. Sto. TOMAS

Profile

Nationality: Filipino

Present Status: Chairman, Civil Service Commission

Education:

1985 - 86 Master in Public Administration, Harvard University

1973 - 76 Master of Science in Development Communication, University of the Philippines at Los Banos

1965 Bachelor of Arts (Political Science), Far Eastern University

Work Experience:

1988 to present

Chairman, Civil Service Commission; Chairman, Career Executive Service Board; Chairman, public Sector Labor Management Council; Member, Board of Foreign Service Examiners.

July, 1987 - March, 1988

Undersecretary, Department of Labor and Employment (DOLE)

January - June, 1987

Assistant Secretary, Department of Education, Culture and Sports (DECS),

May, 1982 - September, 1987
Administrator, Philippine Overseas Employment Administration

September, 1981 - March, 1982
Officer-in-Charge, National Wages Council

September, 1981 - April, 1982
Executive Director, Institute of Labor and Manpower Studies (ILMS)

November, 1978 - May, 1979
Regional Manpower Development Officer, National Manpower and Youth Council (NMYC)

1978 -79 Professorial Lecturer, UP Institute for Industrial Relations

1977 Consultant, Communication Technology for Rural Development UNDP Project

1973 - 75 Instructor, UP at Los Banos

1971 - 73 Head, Public Relations Division, Girl Scouts of the Philippines (GSP)

1970 - 71 Staff Assistant, Board of Investments

1964 - 66 Clerk, Philippine Senate

Other Information:

1991 - 92	President, Philippine Society for Public Administration
September - October, 1990	Member, study mission, National Commission on the Role of Filipino Women/Canadian International Development Agency, Canada
July, 1990	Participant, Working Group Meeting on policy development for women's participation in public management, Kuala Lumpur, Malaysia
1982	Awardee for Public Administration, Ten Outstanding Women in the Nation's Service (TOWNS)
1982 - 86	Headed or participated in negotiations and missions for wages and working conditions of overseas Filipino workers in 17 countries
1980, 1983, 1985	Member, Philippine Delegation to the ILO Annual Conference, Geneva, Switzerland
1977 - 1987	Attended 32 seminars, conferences, workshops on overseas employment, research, training and wages in 10 countries

Publications:

1987	A Manual of Statistics for Overseas Employment, for the International Labor Organization

1978	Communication Adequacy and Availability and the Socio-Economic Levels of the Provinces in Region 4
	Seventeen other papers on overseas employment, wages, the civil service, human resource development and policy research

Comment

Redressing the historical imbalances that prevent full equality for women has greatly accelerated since the day Suffragettes marched for the right to vote. In the past twenty years, women have gained more in terms of policy and program reforms than in all the years before that put together. But the struggle continues because while great strides are being made, these studies are largely uneven across countries.

My interest in women in the bureaucracy is a function of my position as Chairman of the Civil Service Commission as well as the perception that bureaucrats determine to a great extent how government policies are determined and how government programs and services are finally developed. The predominance of women in the Philippine bureaucracy came as a result of lower wages paid in the public sector. Since women were then considered secondary breadwinners, they were the ones who took the lower paying jobs. But that initial disadvantage could and should be turned into an opportunity now. With more women in the general bureaucracy, there should theoretically be more women available for streaming up into responsible, policy-determining jobs. This should then result in policies that are less discriminatory and promote greater equality for both sexes. But this theoretical possibility has been obviated by many factors which have been outlined in my paper. Within the Philippine civil service, we are working on bypassing these factors.

On an international level, there are many issues that require our concerted attention. I was until 1986, the Administrator of the Philippine Overseas Employment Administration. In that capacity, I saw an increasing exodus of women for overseas jobs, particularly in the lower-paying service categories. In these capacities, they were particularly prone to exploitation and abuse. In the early years, in fact, women accounted for 15% of the jobs but 85% of the problems. To date, women comprise almost 40% of the Filipino overseas workforce but account for

70% of all complaints and problems. Many solutions have been offered to include diplomatic initiatives, multi or bilateral arrangements but these have met with limited success. I think native women should take up the cudgels for non-native women in a foreign land. Because of operative legislations, representatives of non-native women (including their governments) have little suasive powers over control of exploitation or abuse. But local women have and if they are part of an international network, then they can bring to bear on the local authorities the strength of international opinion.

On the part of our women who have migrated permanently and who now contribute to the development of other countries, particularly those which are more developed, perhaps a reverse flow of aid to compensate for this talent loss should be considered. Our nurses and doctors benefit from an educational system that is largely subsidized by the state and yet the local population want for adequate health care because many of our doctors and nurses prefer to work in foreign lands.

I am interested in seeing an Asia-based Institute for Women's Policy emerge in this region, tackling both local and international issues that require closer scrutiny, research and study. I hope that this conference can take up this recommendation.

Mieko MAGAMI

Profile

Nationality: Japanese

Present Status: Organizer of the Comprehensive Cultural Exchange Programmes between Japan and Bangladesh, including Roshun Cooking Class, Bengal Language Class, Introduction of Traditional Bangladesh Handicraft Products, Summer Seminar in Natural Farm, Other Seminar Activities

Education:

1987 Researched and studied international nutritional science at the Women's Nutrition College, Food Ecology Laboratory, as a researcher

1980 Studied the Dietary Habits of Developing Countries in Kenya, Africa

1979 Studied abroad through Japan Agriculture Programme at an American farmhouse for 14 months

1977 Graduated from Japan Training College of Agriculture, majored in Nutritional Science

Work Experience:

1989 Received a Letter of Appreciation from Soroptimist International of the Americas. Mito, for organizing various exchange activities with Bangladesh

1987 - present

Conduct "Roshun Cooking Class" teaching Bangladesh cooking, trying to promote comprehensive understanding between the two countries through the culture of food

1987 Under the guidance of Professor Miyuki Adachi, made presentation on "Food Habits in Bangladesh" at the 5th Asian Congress of Nutrition

1983 Went to Bangladesh as a Junior Home Economics Expert of the Japan Overseas Cooperation Voluteers. Worked for 3 years. (Returned in March 1986)

Publications:

Chapter on Bangladesh in "Aula - Jumbo - Maroelelei" Asia Pacific Volume in Japanese, published by WAA (Women's Activities Association of Japan Overseas Cooperation Volunteers), 1990

Food Habits of People Suffering Goiter in Rural Area in Bangladesh (Paper presented at the 5th Asian Congress of Nutrition), 1987

Comment

In Feburuary 1986, I returned to Japan after three years of volunteer work in Bangladesh. The first thing that shocked me upon my return home was that the Japanese in general know so little about people in developing countries. I did not get the impression just in the excitement of my return to Japan, because I still feel the same way after five years. There is much talk about international understanding and developmental education, but I wonder if such things really contribute to anything meaningful.

While in Bangladesh, I spent three years in Shasha, in the Jessore District, only 4-5 kilometers from the border with Calcutta, India, under assignment from the Rural Development Board. In Shasha, experts of Japan Overseas Cooperation Volunteers from three areas - farming, animal husbandry and household management - organized projects to improve the livelihood of people in the farming region through better nutrition and devising ways for women to earn cash . We spent long hours with mothers in the region making traditional handicrafts and creating channels to sell their products. Together, we studied the proper diet for a wholesome, healthy life. Each of these processes was very difficult, but when mothers realized that it was for their own good, they became more independent, and things started to move in the right direction.

I believe we can share the perspective and values of people in countries only by understanding what is deep inside their minds. I hope we will be able to accomplish the difficult task. As a Japanese who has lived in Bangladesh, I believe I have a mission to inform the public about what I experienced there - the harshness, toughness, gentleness, technology, values and desire to improve themselves.

III. Resume

# of the Presentations

BEST COPY AVAILABLE

[Session I]

Approaches to 'Women in Development'

BEST COPY AVAILABLE

1. THEORETICAL APPROACHES TO UNDERSTANDING THE RELATIVE POSITIONS OF WOMEN AND MEN IN SOCIETIES UNDERGOING RAPID SOCIAL CHANGE.

Dr. Kate YOUNG
Executive Director
WOMANKIND (Worldwide)

1. BRIEF review of the literature to date
   Differences between WID and GAD (Gender and Development) and their respective theoretical underpinnings.

2. CURRENT debates
   How to support women - practical needs and strategic interests.
   The varied meanings of empowerment

3. IMPORTANCE of women's organisations to the future course of development
   Brief discussion of the relevance of women's organisations and the struggle for a more people centred and 'democratic' form of development

4. THE RATIONALE behind WOMANKIND (Worldwide)
   WOMANKIND as a very small example of international cooperation and support for women's efforts at collective empowerment

5. CHALLENGES facing women in the 90s.
   Can we rid ourselves of the myths of innate sisterhood and our special capacity for working together, to forge genuine and durable ways of collaborating, despite diversity and difference, in the creation of a better future world for all?

2. RURAL WOMEN: PARTNERS IN DEVELOPMENT

Ms. Alexandra STEPHENS
Regional Sociologist and
Women in Development Officer,
FAO Regional Office for Asia and
the Pacific

Women make up over half the world's population, contribute three quarters of the world's work hours, and receive 10 per cent of world income. The majority live in rural areas. In some countries of South Asia, over 80 per cent of women are rural women. Yet when we plan development projects using available statistics and databases, we see that we should plan for men, because women, apparently, don't work. And rural women, apparently, don't do anything very much, because they are hardly represented in any information on anything!

When we visit rural communities however, we see women farmers, women workers, women fetching and carrying fuelwood and water, women taking care of livestock, milking cows, feeding the fish, carrying fodder, collecting and selling eggs, making baskets, fish traps and clothing, taking care of children and old people, teaching in schools, cooking, cleaning and gardening, sewing, weaving, endlessly working! In fact, when we study women in rural areas, we find their work day is significantly longer, and her economic contribution to the household often significantly more, than that of men. This is the reason for Women in Development programmes and projects.

In the past, rural women have been the "forgotten farmers". The data that told us that women don't work, also told us to work with men for change and development. But that didn't work. To change life at the grassroots, we must work with rural women. Rural women are our natural partners to change family life, improve basic standards of living, and to enhance the quality of life.

To co-opt women as partners in rural development it has been necessary to make these invisible workers visible. During the United Nations Decade for Women (1976 - 85), this was accomplished to some degree by a large number of research studies which provided statistics on women's economic contributions. However, these were usually done using traditional research methods designed to measure men's contributions. It was easy to measure the economic value milk from a dairy cow, but quite impossible to count a woman's contribution when she breastfed her child. A farmer could count his yield of rice, but a woman's vegetable garden at home apparently had no value. Yet in developing countries such informal contributions form a significant, if not a major part of a household economy.

Participatory research with rural women has thus been initiated in several developing Asian countries as a way of applying new research instruments to accurately "count" women's work. The aims are to make rural women visible as workers, economic partners, as farm and household managers worthy of consideration by, and indeed indispensible to rural development planners. It also makes rural women themselves aware of their importance as partners in rural development. The starategy is a dual purpose one. It combines a process of data collection with education through which poor women become organized and empowered to take control their own lives. This is a sound basis for future networking at district, national, and eventually at international levels.

The data serves two purposes. As a database at the grassroots level it provides the basis for rural women to plan and manage their own development within the mainstream of overall rural development programmes. As a set of statistics on rural women's economic contributions it provides a basis for revision of policies and plans which, in the past, have ignored or by-passed rural women.

The most significant findings from pilot studies so far in four countries is that existing databases on women's contribution to national economies are often very misleading. This is as much a surprise to the rural women who have formed partnerships with the researchers, as it is to national policy makers and planners, because women are socialized early in life to undervalue their own role and contributions. It is time for women to shed old images, and to stand up and be counted. When this is done at a nationwide level e.g. in conjunction with a national agricultural or population census, women will be in a strong position to reclaim their fightful place not only as economic working partners, but as partners who have a right to more than 10 per cent of the world's income.

3. JAPAN'S APPROACH TO 'WOMEN IN DEVELOPMENT'
- FROM THE VIEWPOINT OF CULTURAL ANTHROPOLOGY -

Ms. Kyoko KIKUCHI
Associate Professor
Tsuda College

I. What is the Theory of 'Women in Development'?

1. Why is it necessary to connect development and women?

Essentially, "Development" can be described as "a process of change which can lead to some kind of improvement in human life". Over the history of human society, women had a little direct involvement in society, and what little they did have was not duly appreciated. Therefore, women's reliance and dependence on men became an institutionalized idea, and women's contribution towards or benefits from social groups tended to be considered as partial or indirect . In the course of social development, it is necessary to reacknowledge women as human resources and to seek ways to promote the level of women's contribution to and benefits from society.

2. Approach to "Theory of Development" from the Viewpoint of Cultural Relativism

It is self-evident that the ultimate goal of "development" is not to reproduce a Western society which is based on Social Evolution.

The "Theory of Development" is based on the co-existence of diverse lifestyles (cultures) and a pluralistic culture. Therefore, "Internally Generated Development" bacame increasingly important.

3. Image of Women in Various Cultures

Women's independence is considered highest in a society which has a non-unilineal kinship system, and few restrictions on women's behavior. In order to enforce social development, it is vital to accurately grasp the image of women in different cultures.

II. Activities of the Women in Development Subcommittee of the Japan Society for International Development

1. Purpose of the Japan Society for International Development

The Japan Society for International Development was established in February 1990. Its objective was to address the needs of international societies requesting development aid from Japan, to epitomize the interdisciplinary research system and to set up a policy research organization, as well as contribute, through Society activities, to manpower training for research on development or development cooperation.

2. *Activities of the Women in Development Subcommitte*

As of September 1991, the Women in Development Subcommittee, one of 9 subcommittees of the Japan Society for International Development, has held 15 seminars since the first one in May 1990. Graduate school students and researchers engaged in area studies in Asia, Africa, Oceania etc., staff members of development-related institutes, or experts in private enterprises who are participating in development cooperation have been invited as lecturers. They have been able to exchange information from various fields regarding the role of women in development.

3. *Future Prospects*

The future goals of the Women in Development Subcommittee are to emphasize promoting basic studies on 'Women in Development' and to build a network with other similarly-interested organizations and groups.

[Session II]

Field Report

on 'Women in Development'

BEST COPY AVAILABLE

4. SEWA EXPERIENCE

Mrs. Ela Ramesh Bhatt
General Secretary
SEWA (Self Employed Women's Association)

I. India is a big country. The vast female population is not homogeneous. It faces differences of class, caste, religion, ethnicity. So, I shall limit my presentation keeping in focus the majority (80%) of women who happen to be rural, poor, illiterate and economically very active.

We have to recognise that amongst poor, all women work. Invariably, their issues of topmost priority are security of work and income. So, I shall give major thrust to the economic aspect of the women's lives.

There are some very important characteristics shared by all of them. These characteristics can be roughly summed up as: fewer and poorer opportunities to work; greater impact of unemployment, underemployment and casual nature of work; greater vulnerability because of lack of skills and education; lesser mobility, heavy responsibilities; a systematic social practice of under-rating women's work; and lack of access to better technologies, tools and productive assets. To a large extent, poor women keep moving between the status of self-employed, casual labour, and unemployed.

They have poorer access to development. They are discriminated against in the family itself, in terms of distribution of income, consumption and assets. Consequently poverty affects women with lower consumption levels, poorer health and lower education. Women-headed households particularly have a higher incidence of poverty.

The vast majority of rural women in the unorganised sector is landless; they work in the fields, they look after the animals, they are actively involved in food production, food processing, forestry and rural industry. They also participate in construction work, labour in the factories, work in mines and engage in trade and vending. In addition, they have the burden of bearing and rearing children, collecting and fetching water, gathering firewood, cooking and cleaning activities which consume much time and energy.

Deforestation, famine, drought and other calamities affect women much more adversely than men.

The approach of government to women's development is one of adhocism leading to marginal benefits. The declaration of the International Year for Women generated many debates on the status of women. The government appointed a Committee on the Status of Women which made a comprehensive study of the problems of all women. A chapter of Women was included in the Sixth Plan which was followed by attempts to cover women under poverty alleviation programmes and the starting of a few new schemes. However, government programmes designed for women have not been proportionate either to their needs or their numbers.

Gender inequalities

The labour market is not neutral to men and women. It favours men against women. Gender inequalities exist in almost all sectors. The division of labour is highly sex biased.

The discrimination is further manifested in male and female earnings which has been revealed by micro studies.

In the urban informal sector, some of the lowest paid occupations

273

have a disproportionately high percentage of women. In the organised sector, 90 percent of the women are found in unskilled and semi-skilled jobs.

Gender inequality is also marked in acquiring educational and vocational skills. In spite of the impressive increase in total numbers of literate women the male-female gaps remain large, and a slow rate of progress of women's education is noted with a virtual a stagnation in the area of technical education.

A major shortcoming of the education strategy has been that workers in poverty-stricken groups of landless farmers, marginal workers in unorganised sector, urban slum dwellers, workers, and migrant workers have not been reached. Since women have less access to education and skill training, they are unable to exploit the instruments through which women can attain equality. The present situation of illiteracy amongst women, which is negatively related to fertility rates and infant child mortality rates, further perpetuate gender inequalities.

Growth of unorganised sector

There has been a phenomenal growth of the unorganised sector. Given the labour market conditions and the existing socio-economic environment most of the female work force is in the informal unorganised sector.

Women-headed households

The number of women-headed households are maximum among the poor. Women-headed households are a result of widowhood, migration, desertion or the illness / unemployment / addictive habits of their husbands. The delivery structures normally do not recognise women as heads of households.

Technology

Modernisation and technological changes have affected women adversely. Growth of technology and commercialization have led to mass production and have also in turn resulted in some increase in employment. There has been a marginal improvement in women's employment in sectors like electronics. But the number of women who have been thrown out of employment is far greater. The introduction of new technology in the long run requires new skills. Women do not have access to these skills and training. In many cases women have been forced to move out from skilled areas to unskilled areas.

Credit, raw material, and marketing

Promotion of women's employment faces several obstacles, one of them being an increasingly complex marketing and credit system. Cheaper forms of credit have been made available through financial institutions but the central problem faced by women in low income earning ventures is that they have no security to offer.

The forces operating and controlling marketing have become complex, demanding better designs and techniques and mass production. The immediate local market can no longer absorb their entire production.

A large section of the poor self-employed women doing their own account work, who are engaged in unorganised work are exploited by various people like wholesale and money-lenders, and even the municipal authorities and police.

Migration

Increasing pauperization in rural areas has led to streams of migration and polarisation between rural and urban areas with considerable concentration of wealth and social services in the urban economy. If men migrate then women have to take the total responsibility for the family left behind. If the whole family migrates, women themselves face the problems of having to perform the dual role of earner and home maker while living and working in conditions which lack even the basic sanitary facilities.

Health

The heavy manual labour performed by women, the shocking working and living conditions, malnutrition, repeated pregnancies and poor quality of health services take a heavy toll of the health of the women. They also suffer from other occupational health hazards like postural problems, pain in the joints and other such complaints. There is absence of data and lack of recognition of occupational health hazards in the unorgnised sector of the country. Apart from the poor quality of health services and the poor accessibility of women to them, maternity benefits are also not available to women in the unorganised sector.

A widely held view is that employers show a preference for women only when they are prepared to accept lower wages than men and also because they are expected to be more docile and submissive. Thus laws for the protection of women workers such as maternity benefits, childcare, removal of discrimination in wages, only result in the reduction of women in organised employment and push them more and more into unorganised, more exploitative and invisible occupations.

Housing

There is a direct link between income, housing and economic activity. Lack of housing particularly affects women. They are the home makers, doing almost all the household work including childcare. Those women who are self employed are generally home-based, so the home is also their work place.

Childcare facilities

Children in these families suffer the affects of poverty and all that goes with it like malnutrition, overcrowded and unhygienic conditions of living, lack of opportunities for education etc.

The need for childcare services for poor working women is undebatable; such services are necessary not only as a support service for the mother but also for the all round development of the child.

II. On Organising

Today we are witnessing the gradual rise of a movement of self-employed women, who are organising on issues, asserting themselves, articulating their needs, and coming to the forefront of our political consciousness. As their organisations grow and spread, as they become more articulate, as they link with each other to highlight common issues, so the movement snowballs and emerges into consciousness.

Such development has been possible only because of many earlier movements and attempts to organise by these women. What little documentation is available indicates that poor women did indeed play in important role in earlier movements through participation within a larger movement, such as the Nationalist Movement and the Labour Movement, or through localised struggles over specific issues.

If we accept that women's problems are not going to be solved in the course of the current type of development, then we are looking for a political solution - a method of giving additional priority in state policies to measures for helping these women.

Left only to voluntary agencies and the poor women's own organised efforts, it is unlikely that these kinds of organisations will come up quickly enough in sufficiently large numbers to make a significant impression on the situation of these women.

It is rather ironic to ask the state to support a machinery which is to promote action for change in state policies. However, it is recommended that ro create an atmosphere for the women to organise themselves, the state should initiate and help in maintaining a network of grassroot level organising efforts.

III. SEWA Experience and Recommendations

Then I shall narrate my experience in organising the poor working class women, and taking their problems to the decision makers for policy change.

I shall make a few broad Recommendations of macro level.

5. WOMEN IN THE BUREAUCRACY: THE PHILIPPINE CASE

Ms. Patricia A. Sto. TOMAS
Chairman
Civil Service Commission (CSC)

The climate for reform in the area of women's policy has significantly improved in the Philippines. This proceeds from a number of factors such as having a woman President for the first time, the presence of an increasing number of women in policy-determining positions as well as the government's articulated bias for the poor and the underprivileged which has traditionally included women.

The statistics indicate the need for reform. While virtually half of the population are women, the labor force participation rate as well as the number of economically active women are significantly lower than men. These statistics provided the impetus for the setting up of a Philippine Development Plan for Women (PDPW) which is a companion piece to the Philippine Medium-Term Development Plan (PMTDP). The PDPW parallels all chapters of the PMTDP plus four additional chapters on special concerns. It also provides a good illustration of how effectively government and the private sector, particularly non-government organizations can work.

Since the implementation of the PDPW will largely hinge on the bureaucracy, the paper deems it important to focus on women in the bureaucracy.

Women predominate in the bureaucracy. While they are only 42% at the lowest level, they occupy 59% of the professional and technical group. The professional or technical group is the feeder group for the executive class which, ironically, show a female participation rate of only 28.8%.

This disproportionate representation is due to a number of factors which include: traditional biases and prejudices, structural barriers, political patronage and the sometimes strange enforcement of more stringent requirements on females by other females.

To redress these imbalances, the Civil Service Commission has initiated a number of measures geared towards making the process more fair. At the same time, recruitment policies have been reviewed and strengthened, a move which is perceived to be beneficial to women as it will minimize favoritism in personnel selection. Women government executives are also bring streamed upward on the basis of their superior performance as well as through their having passed the rigorous process set for entering the government career executive service. A number of human resource development interventions have been instituted to mitigate the structural barriers that prevent women from moving up.

On a transnational basis, women should be encouraged to bond together and, in sisterhood, reach out to lend their support to problems which are within their control. This would include exploitation of overseas contract workers, mail-order brides and such other aberrations that have surfaced as a result of an expanding global village.

An Asia-based Institute for Women's Policy is also recommended for the purpose of acting as an exchange-center and clearing house for information, strategies, policies and programs across countries.

6. THE PATH TO INDEPENDENCE

Ms. Mieko MAGAMI
Organizer
Comprehensive Cultural
Exchange Programmes
between Japan and Bangladesh

Bangladesh was part of British-ruled India until 1947. At the time of the India-Pakistan split, the region was named East Pakistan. In 1971, Bangladesh became an independent country with Bengalese as the official language. The country borders India on three fronts: it faces West Bengal to the west. Assam to the north and and Tripura to the east. The Bay of Bengal is to the south, and sections of its south-eastern border face Arakan, Myanmar. Three large rivers - the Ganges, Brahmaputra and Meghna - join at the center of Bangladesh and flow into the Bay of Bengal to form the world's largest delta.

In 1983, I went to Bangladesh on a three-year mission as a junior Home Economics Expert of the Japan Overseas Cooperation Volunteers. The mission took us to Jessore, about 300 kilometers west south-west of Dacca, and Shasha, 30 kilometers further to the west. Our mission was to help improve the standard of living for the members of the Agricultural Cooperation Association - women in particular - under the guidance of the Rural Development Board. The farming, animal husbandry and household management volunteers organized various projects for better nutrition and to devise ways to earn cash income.

One of my encounters with two Bangladeshi women had a great impact on the people in the village. It also taught me many things and led me to my current lifework. The two women are Mrs. Moduzan Bibi, a Moslem woman and Mrs. Onjoli Bhashco, the Manager of the Women's Association in Uttor Bruz Bagan (who later became the leader of handicraft production).

Mrs. Moduzan Bibi is a wife and a mother of three children. She now has two grandchildren. Mrs. Moduzan married at the age of 13 and has received little schooling. She could not read or write, but she had a strong desire to study. When I was giving a cooking demonstration at the village women's class, Mrs. Moduzan often advised me. Later, she toured villages with me as a cooking instructor. In the process, she had to overcome many difficulties. Being a wife, she was uncertain of working outside the home, because people would either be jealous or misunderstand her. Because of these fears, her husband, a weak-minded person, abused her physically. It took Mrs. Moduzan a long time to persuade her husband and make him understand the significance of her work. By the latter half of the third year, Mr. Moduzan would come to meet Bibi after her work was over. We were very busy spreading use soy bean at the time, and it was quite dark by the time we finished. Mr. Moduzan was concerned about his wife walking home in the dark. It warmed my heart to see the two walking with a lamp in their hands. At one instance, I visited the Moduzans in the morning to find Mr. Moduzan cooking breakfast. He shyly smiled at me.

The Moduzans taught me many things. I believe it is important for women to think of 'independence' as something of their own. They should gain the understanding and support of men, and both sexes should respect each other.

When I visited Shasha this March, I again met the Moduzans. Mr. Moduzan was constructing a fine house of their own as he had promised. Mrs. Moduzan said she will now use the skills she learned to help their standard of living. She asked me to bring a pressure cooker, which she says she will use to bake bread and sweets to sell at a store. It will take her 10 years to repay the price of the pan, at 20 taka (100 yen) a month. I told her, 'We must stay healthy until then', and she replied, 'Apa, I am sure I can pay it back much earlier'. The money will be deposited in Moduzan's new account at the nearby Sonali Bank. I am looking forward to their deposits growing.

The Moduzans are working hard in Bangladesh. As for myself, I will do my best to introduce Bangladeshi foods, handicrafts, as well as their values, and background, to people in Japan.